

第五十條 商法第四條ニ依リ裁判所ニ於テ債務者ヲ釋放スルトキハ決定書ヲ檢事ニ送致シ其執行ヲ爲サシム

第五十一條 商法中非訟事件ニ關スル裁判所管轄ハ裁判所構成法ニ定ムルモノノ外第二百五十四條第三百七十一條第四百四十一條第四百九十九條第五百十四條第八百五十六條第九百二條ノ事件ニ付テハ區裁判所トシテ其他ノ事件ニ付テハ地方裁判トス(同上法令ヲ以テ本條ヲ廢止セル事) 舊商法ノ規定ニ依ルヘキ場合ニ於テハ仍ホ其效力ヲ存スル(旨ヲ定ム)

第五十二條 (同上法令ニテ新商法實施ノ日ヨリ本條ヲ廢止ス)

第五十三條 (同上)

第二編 商法ニ關スル法規

商法中署名スヘキ場合ニ關スル件

(明治三十三年二月法律第十七號)

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル商法中署名スヘキ場合ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

小商人ノ範圍ニ關スル件

(明治三十三年六月勅令第二百七十一號)

朕小商人ノ範圍ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

附則

此勅令ハ商法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

韓國商號令

(明治四十一年八月勅令第九十九號)

朕韓國商號令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

韓國商號令

第一條 韓國ニ於ケル商號ニ關シテハ商法及非訟事件手續法ニ依ル但シ同法中市町村トアルハ府

郡ニ、府縣トアルハ道ニ、裁判所トアルハ理事廳及統監府法務院ニ、日本トアルハ韓國ニ、司

法大臣トアルハ統監ニ該當ス

第二條 本令ハ日韓兩國臣民ノ商號ニ關シ同様ノ保護ヲ與ヘ且韓國ニ於テ商號ノ保護ニ關シ治外

法權ヲ行使セサル國ノ臣民又ハ人民ニモ之ヲ適用ス

附則

第三條 本令ハ明治四十一年八月廿六日舊商法之ヲ施行ス

第四條 商法第十八條ノ規定ハ本令施行前ヨリ韓國國內ニ於テ使用スル商號ニハ之ヲ適用セス

商法施行法第二百二十二條ニ依ル湖川、港灣及沿岸小

航海ノ範圍ニ關スル件

(明治三十三年五月遞信省令第二十號)

商法施行法第二百二十二條ノ規定ニ依リ湖川、港灣及沿岸小航海ノ範圍左ノ通定ム

湖川、港灣ノ範圍ハ平水航路ノ區域ニ依ル
沿岸小航海ノ範圍ハ播磨國明石川口西岸ヨリ淡路國江崎ニ至ル線、淡路國押登崎ヨリ阿波國大磯
崎ニ至ル線、伊豫國佐田岬ヨリ高島ヲ經テ豊後國地蔵崎ニ至ル線及豊前國部埼ヨリ長門國宇部村
ニ至ル線ヲ以テ限ラレタル内海トス

私設鐵道株式會社ニ關スル件

(明治二十八年二月法律第四號)

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル私設鐵道株式會社ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 私設鐵道株式會社ハ各株式ニ付十分一以上ノ拂込ヲ爲シタルトキハ其登記ヲ受クルコト
ヲ得

第二條 前條ニ依リ登記ヲ受ケタル後ト雖四分一拂込前ノ株式ノ讓渡ハ無効タリ

第三條 私設鐵道株式會社ハ其資本金十分一未滿ニ減シタルトキハ解散ス
但シ其拂込金額四分一以上ニ及ヒタルモノハ商法第二百三十四條第四ニ據ル

附則
此法律ハ發布ノ日ヨリ施行ス

外國ニ於テ鐵道ヲ敷設スル帝國會社ニ關スル件

(明治三十三年九月法律第八十七號)

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル外國ニ於テ鐵道ヲ敷設スル帝國會社ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公
布セシム

帝國臣民ニシテ外國ニ於テ鐵道ヲ敷設シ運輸業ヲ營ム爲ニ帝國内ニ於テ設立スル會社ニ付テハ勅
令ヲ以テ特別ノ規定ヲ設ケ之ヲ進據セシムルコトヲ得

同上

(明治三十三年九月勅令第三百六十六號)

朕外國ニ於テ鐵道ヲ敷設スル帝國會社ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 外國ニ於テ鐵道ヲ敷設シ運輸業ヲ營ム爲帝國内ニ於テ帝國臣民ノ設立スル株式會社ニ關
シテハ本令ニ別段ノ定アルモノヲ除クノ外商法及附屬法令ノ規定ヲ適用ス

第二條 會社ノ發起人ハ株金第一回拂込前定款ノ工事方法書、線路實測圖及工費豫算書ヲ具シ選
信大臣ニ會社設立ノ免許ヲ申請スヘシ

前項免許ノ申請ニハ株式申込證ノ謄本及必要ナル書類圖面ヲ添附スルコトヲ要ス

第三條 會社ハ資本總額ヲ數回ニ分ツテ募集スルコトヲ得但シ第一回募集額ハ資本總額ノ五分ノ
一ヲ下ルコトヲ得ス

第四條 株金ノ第一回ノ拂込金額ハ株金ノ十分ノ一迄下ルコトヲ得

第五條 第一回募集ノ資本ニ對スル第一回ノ株金拂込アリタルトキハ發起人ハ創立總會ヲ招集ス
ルコトヲ得

第六條 定款變更ノ決議ハ選信大臣ノ認可ヲ受クルニ非サレハ其ノ效ヲ生セス

第七條 會社ハ選信大臣ノ認可ヲ受クルニ非サレハ社債ヲ發行スルコトヲ得ス
社債總額ハ拂込株金額ノ十倍ニ至ルコトヲ得但シ其額ハ資本總額ノ五分ノ四ヲ超過スルコトヲ得ス

第八條 會社ハ選信大臣ノ認可ヲ受クルニ非サレハ工費豫算及工事方法ヲ變更スルコトヲ得ス

第九條 會社ノ選任大臣ノ認可ヲ受ケルニ非サレバ合併又ハ任意ノ解散ヲ爲スコトヲ得ス
 第十條 會社ノ本條ノ規定又ハ免許者ノ認可ニ附シタル條件ニ違反シタルトキ選任大臣ノ役員
 會社ノ前項免許ノ取消ニ因リテ解散スルコトヲ得
 第十一條 第六條第八條乃至第十條ノ規定ハ外國ニ於テ鐵道ヲ敷設シ運輸業ヲ營ム爲帝國内ニ於
 第十二條 第六條第八條乃至第十條ノ規定ハ外國ニ於テ鐵道ヲ敷設シ運輸業ヲ營ム爲帝國内ニ於
 第十三條 第六條第八條乃至第十條ノ規定ハ外國ニ於テ鐵道ヲ敷設シ運輸業ヲ營ム爲帝國内ニ於

明治二十六年農商務省令第十一號廢止ノ件

明治三十六年五月農商務省令第十一號ノ法律命令ニ依リ官廳ノ許可ヲ受ケヘキ營
 業ニ關シテ爲サシメタル株式會社ニ關スル件ナリ

商法ノ規定ニ依リ拒絕證書ノ作成請求ニ關スル手續

料ノ件 (明治三十六年五月十三日臺灣總督府令第三十八號)

商法ノ規定ニ依リ拒絕證書ノ作成ヲ請求スル者ハ手續料金二十五錢ヲ納ムヘシ
 拒絕者ヲ營業場或ハ住居ニ間合聲拒絕證書ノ作成ヲ請求スル者ハ手續料金五十錢ヲ納ムヘシ
 若シ里以上ノ地ニ至リ職務ヲ行フ場合ニ於テ手續料外ニ里毎ニ金十錢ノ旅費金納ムコトヲ得

附則

本令ハ明治三十六年六月一日ヨリ施行ス

商法第五百六十二條ニ依ル書類ノ件

(明治三十二年五月遞信省令第十九號)

商法第五百六十二條第一項第二號乃至第五號ニ掲グル書類ノ件左ノ通定ム

第一條 海員名簿ハ第一號書式、屬具目錄ハ第二號書式、航海日誌ハ第三號書式、旅客名簿ハ第
 四號書式ニ依リ之ヲ調製スヘシ

前項ノ書類ハ書式ニ示ス順序ニ依リ之ヲ編綴シ且各頁ニ頁數ヲ附スヘシ但其紙數ハ適宜トス
 第二條 前條ノ書類ニハ書式ニ定メサル事項ヲ記載スル爲メ欄ヲ設クルコトヲ得 (明治三十五年
 十月遞信省令第四十八號ヲ以テ本條改正)

内國沿岸ノミテ航行スル船舶ニ在リテハ航海日誌及旅客名簿ノ書式ニ定ムル事項ヲ省略スルコ
 トヲ得

航海航路ノミテ航行スル船舶ニ在リテハ旅客名簿ヲ備ヘサルコトヲ得
 前三項ノ場合ニ於テハ船籍港ヲ管轄スル海事局ノ認可ヲ受ケヘシ

第三條 第一條ノ書類ニハ各事項ニ付英譯ヲ附シ又ハ頁ノ上部ニ船舶及船舶所有者ノ名簿等ヲ附
 記シ又ハ記載心得等ヲ掲グルコトヲ得

第一條ノ書類ハ書式ニ定ムル事項ノ位置ヲ變更シテ之ヲ調製スルコトヲ得但其順序ヲ變更スル
 コトヲ得ス (書式ハ之ヲ略ス)

第三編 破産

（明治三十三年四月法律第三十二號）

第一章 破産宣告

第九百七十八條 商人カ支拂ヲ停止シタルトキハ裁判所ハ本人又ハ債權者ノ申立ニ因リ決定テ以テ破産ヲ宣告ス（明治三十二年三月法律第四十九號ヲ以テ本條ヲ改ム）

第九百七十九條 支拂停止ハ其停止ヲ爲シタル本人ヨリ又會社ニ在テハ業務擔當ノ任アル社員又ハ取締役又ハ清算人ヨリ支拂停止ノ日ヲ算入シテ五日以内ニ其營業所又ハ住所ニ裁判所ニ書面ヲ以テ又ハ口述ヲ調書ニ筆記セシメテ之ヲ届出ツ可シ此届出ニハ支拂停止ノ事由ヲ明示シ及ヒ貸借對照表並ニ商業帳簿ヲ添フルコトヲ要ス

第九百八十條 破産決定書ニハ左ノ諸件ヲ包含ス
第一 總テノ破産、不動産其他債權ノ列擧及ヒ價額
第二 總テノ債務
第三 債權者ノ姓名及ヒ住所
第四 毎月ノ一身上ノ費用及ヒ家事費用ノ支出額
第九百八十一條 破産決定書ニハ左ノ諸件ヲ包含ス
第一 支拂停止ノ日時但此日時ハ後日裁判所ノ決定ヲ以テ之ヲ定ムルコトヲ得

第二章 破産管理

高利貸及日損失概要

第九百八十二條 破産決定書ニハ左ノ諸件ヲ包含ス

第一 支拂停止ノ日時但此日時ハ後日裁判所ノ決定ヲ以テ之ヲ定ムルコトヲ得

第九百八十三條 破産主任官ハ總テノ破産手續ヲ指揮及ヒ監督スルコトヲ要ス其命令ハ假執行

第九百八十四條 檢事ハ破産手續ヲ以テ破産者ノ對シテ之ヲ可成所爲ノ有無ヲ檢査シ且此爲ヲ取引帳

第九百八十五條 破産者ハ其手続ヲ停止シ其手続ヲ以テ破産手續ヲ費用ヲ償フニ足ラズ其手続ノ手續ヲ除ク

第九百八十六條 破産者ハ其手続ヲ停止シ其手続ヲ以テ破産手續ヲ費用ヲ償フニ足ラズ其手続ノ手續ヲ除ク

第九百八十七條 破産者ハ其手続ヲ停止シ其手続ヲ以テ破産手續ヲ費用ヲ償フニ足ラズ其手続ノ手續ヲ除ク

第九百八十八條 破産者ハ其手続ヲ停止シ其手続ヲ以テ破産手續ヲ費用ヲ償フニ足ラズ其手続ノ手續ヲ除ク

第九百八十九條 破産者ハ其手続ヲ停止シ其手続ヲ以テ破産手續ヲ費用ヲ償フニ足ラズ其手続ノ手續ヲ除ク

第九百九十條 破産者ハ其手続ヲ停止シ其手続ヲ以テ破産手續ヲ費用ヲ償フニ足ラズ其手続ノ手續ヲ除ク

第九百九十一條 破産者ハ其手続ヲ停止シ其手続ヲ以テ破産手續ヲ費用ヲ償フニ足ラズ其手続ノ手續ヲ除ク

第九百九十二條 破産者ハ其手続ヲ停止シ其手続ヲ以テ破産手續ヲ費用ヲ償フニ足ラズ其手続ノ手續ヲ除ク

第九百九十三條 破産者ハ其手続ヲ停止シ其手続ヲ以テ破産手續ヲ費用ヲ償フニ足ラズ其手続ノ手續ヲ除ク

第九百九十四條 破産者ハ其手続ヲ停止シ其手続ヲ以テ破産手續ヲ費用ヲ償フニ足ラズ其手続ノ手續ヲ除ク

第九百九十五條 破産者ハ其手続ヲ停止シ其手続ヲ以テ破産手續ヲ費用ヲ償フニ足ラズ其手続ノ手續ヲ除ク

第九百九十六條 破産者ハ其手続ヲ停止シ其手続ヲ以テ破産手續ヲ費用ヲ償フニ足ラズ其手続ノ手續ヲ除ク

第九百九十七條 破産者ハ其手続ヲ停止シ其手続ヲ以テ破産手續ヲ費用ヲ償フニ足ラズ其手続ノ手續ヲ除ク

第九百九十八條 破産者ハ其手続ヲ停止シ其手続ヲ以テ破産手續ヲ費用ヲ償フニ足ラズ其手続ノ手續ヲ除ク

第九百九十九條 破産者ハ其手続ヲ停止シ其手続ヲ以テ破産手續ヲ費用ヲ償フニ足ラズ其手続ノ手續ヲ除ク

第一千條 破産者ハ其手続ヲ停止シ其手続ヲ以テ破産手續ヲ費用ヲ償フニ足ラズ其手続ノ手續ヲ除ク

第一千零一條 破産者ハ其手続ヲ停止シ其手続ヲ以テ破産手續ヲ費用ヲ償フニ足ラズ其手続ノ手續ヲ除ク

第一千零二條 破産者ハ其手続ヲ停止シ其手続ヲ以テ破産手續ヲ費用ヲ償フニ足ラズ其手続ノ手續ヲ除ク

第一千零三條 破産者ハ其手続ヲ停止シ其手続ヲ以テ破産手續ヲ費用ヲ償フニ足ラズ其手続ノ手續ヲ除ク

第一千零四條 破産者ハ其手続ヲ停止シ其手続ヲ以テ破産手續ヲ費用ヲ償フニ足ラズ其手続ノ手續ヲ除ク

第一千零五條 破産者ハ其手続ヲ停止シ其手続ヲ以テ破産手續ヲ費用ヲ償フニ足ラズ其手続ノ手續ヲ除ク

第一千零六條 破産者ハ其手続ヲ停止シ其手続ヲ以テ破産手續ヲ費用ヲ償フニ足ラズ其手続ノ手續ヲ除ク

第一千零七條 破産者ハ其手続ヲ停止シ其手続ヲ以テ破産手續ヲ費用ヲ償フニ足ラズ其手続ノ手續ヲ除ク

第一千零八條 破産者ハ其手続ヲ停止シ其手続ヲ以テ破産手續ヲ費用ヲ償フニ足ラズ其手続ノ手續ヲ除ク

第一千零九條 破産者ハ其手続ヲ停止シ其手続ヲ以テ破産手續ヲ費用ヲ償フニ足ラズ其手続ノ手續ヲ除ク

第一千一十條 破産者ハ其手続ヲ停止シ其手続ヲ以テ破産手續ヲ費用ヲ償フニ足ラズ其手続ノ手續ヲ除ク

第一千一百一條 破産者ハ其手続ヲ停止シ其手続ヲ以テ破産手續ヲ費用ヲ償フニ足ラズ其手続ノ手續ヲ除ク

第一千一百二條 破産者ハ其手続ヲ停止シ其手続ヲ以テ破産手續ヲ費用ヲ償フニ足ラズ其手続ノ手續ヲ除ク

第一千一百三條 破産者ハ其手続ヲ停止シ其手続ヲ以テ破産手續ヲ費用ヲ償フニ足ラズ其手続ノ手續ヲ除ク

第二章 破産ノ效力

第九百八十五條 破産宣告ニヨリ破産者ハ破産手續ノ繼續中自己ノ財産ヲ占有シ管理シ及ヒ處分スル權利ヲ失フ

破産者宣告ノ日ヨリ以後ハ破産者ノ爲シタル支拂其他總テノ權利行爲及ヒ破産者ニ對シタル支拂ハ當然無効トス

破産ノ動産、不動産ニ關スル訴及ヒ執行ハ特リ管財人ヨリ又ハ管財人ニ對シテ之ヲ起シ又ハ繼續スルコトヲ得

第九百八十六條 破産者ノ營業ノ用ニ供スル動産ニ對シテ不動産貸貸ノ爲メニスル強制執行ハ三十日間之ヲ猶豫ス但貸貸人カ其貸貨物ヲ取戻ス權利ヲ有スルトキハ此限ニ在ラス

第九百八十七條 各債權者ハ優先權ノ存スルニ非サレハ破産處分中破産者ノ財産ニ對シテ強制執行ヲ爲スコトヲ得ス

第九百八十八條 辨濟期間ノ未タ至ラサル破産者ノ債務ハ破産宣告ニ依リテ辨濟期限ニ至リタルモノトス

爲替手形ノ引受人又ハ引受ナキ爲替手形ノ振出人又ハ約束手形ノ振出人カ破産宣告ヲ受ケタルトキハ其償還義務ニ付テモ前項ノ規定ヲ適用ス

第九百八十九條 財團ニ對シテハ破産宣告ノ日ヨリ利息ヲ生スルコトヲ止ム但抵當權、質權其他ノ優先權ヲ以テ擔保セラレタル債權ハ其擔保物ノ賣拂代金ニ滿ツルマデテ限リテ利息ヲ生スルコトヲ得

第九百九十條 支拂停止後又ハ支拂停止前三十日内ニ破産者ガ爲シタル贈與其他ノ無償行爲又ハ

之ト同視ス可キ有償行爲期限ニ至ラサル債務ノ支拂、期限ニ至リタル債務ノ代物辨濟及ヒ從來負擔シタル債務ノ爲メ新ニ供スル擔保ハ財團ニ對シテハ當然無効トス

第九百九十一條 前條ニ掲ケタルモノノ外債務者カ支拂停止後破産宣告前ニ財團ノ損害ニ於テ爲シタル總テノ支拂及ヒ權利行爲ハ相手方カ支拂停止ヲ知りタルトキニ限り財團ノ計算ノ爲メ之ニ對シテ異議ヲ述フルコトヲ得

然レトモ手形ヲ支拂ヒタル場合ニ於テハ爲替手形ヲ振出シ又ハ振出サシムル際支拂停止ヲ知りタル振出人又ハ振出委託人ヨリ又約束手形ニ在テハ裏書讓渡ノ際支拂停止ヲ知りタル第一ノ裏書讓渡人ヨリ其支拂金額ヲ償還スルコトヲ要ス

第九百九十二條 有效ニ取得シタル抵當權其他合式ノ登記ニ因リテ法律上效力ヲ有ス可キ權利ハ支拂停止後ニ在テハ其取得ノ時ヨリ十五日ヲ過キサルトキニ限り破産宣告ノ日マテ登記ヲ爲スコトヲ得

第九百九十三條 破産宣告ノ時ニ破産者及ヒ其相手方ノ未タ履行セス又ハ履行ヲ終ラサル雙務契約ハ孰レノ方ヨリモ無賠償ニテ其解約ヲ申入ルルコトヲ得

貸借契約又ハ履備契約ニ在テハ解約申入ノ期間ニ付キ協議調ハサルトキハ法律上又ハ慣習上ノ豫告期間ヲ遵守ス可シ

第九百九十四條 契約者ノ一方ノ義務不履行ノ爲メ他ノ一方ニ於テ契約ヲ解除スル權利又ハ既ニ給付シタル物ヲ取戻ス權利ハ財團ニ對シテ之ヲ行フコトヲ得ス

第九百九十五條 相殺ノ權利アル債權者ハ期限ニ至ラサル債權又ハ金額未定ノ債權ト雖モ財團ニ對シテ其效用ヲ致サシムルコトヲ得

第一千六條 破産者ニ對シテ債務ヲ負ヒ又ハ財團ニ屬スル者ヲ占有スル者ハ其支拂又ハ交付ヲ管財人ニノミ爲ス可キコトヲ拂渡差押ノ命令ヲ以テ催告セラルモノトス

別除權ヲ行ハント欲スル者ハ其旨ヲ管財人ニ申立ツ可シ若シ管財人ヨリ其物ノ評價ヲ爲サントトキ求ムルトキハ之ヲ承諾スルコトヲ要ス

債務者ニ宛テタル電信、書狀其ノ他ノ送達物ハ之ヲ管財人ニ交付ス可シ

其管財人ハ開封ノ權ヲ有ス然レトモ其旨趣カ財團ニ關係ナキトキハ管財人ヨリ債務者ニ引渡ス可トヲ要ス

破産裁判所ハ此カ爲メ郵便局、電信局其他運送取扱所ニ必要ナル命令ヲ發ス可シ

第一千七條 破産主任官ハ破産者及ヒ其家族ニ財團ヨリ給養ノ扶助料ヲ與フルコトヲ得

第五章 財團ノ管理及ヒ換價

第一千八條 各裁判所管轄區ニハ職務上義務ヲ負テ可キ破産管財人ノ名簿ヲ備置キ破産裁判所ハ各箇ノ場合ニ於テ其名簿中ヨリ管財人ヲ選任ス

第一千九條 管財人ノ勤勞ニ對スル報酬ハ財團ヨリ第一ニ之ヲ支拂ヒ其額ハ破産裁判所之ヲ定ム

第一千十條 裁判所ハ何時ニテモ管財人ヲ易ヘ又ハ他ノ管財人ヲ加フルコトヲ得

第一千十一條 管財人ハ其行爲ニ付テハ代理人ト同一ノ責任ヲ負フ若シ管財人二人以上アルトキハ共同ニ非サレハ行爲ヲ爲スコトヲ得ス但破産主任官カ或ル行爲ニ付キ各箇ニ特別ノ委任ヲ與ヘタルトキハ此限ニ在ラス

第一千十二條 管財人ハ破産宣告後即時ニ財團ヲ占有シ且其管理及ヒ換價ニ著手スルコトヲ要ス

管財人ハ其職務ヲ爲メ破産者ノ補助ヲ求ムルコトヲ得破産主任官ハ此カ爲メ破産者ニ報酬ヲ與フルコトヲ得

フルコトヲ得

第一千十三條 管財人ハ破産主任官ノ監督ヲ受ケ且其指揮ニ從フ義務アリ若シ管財人ノ行爲又ハ決斷ニ對シテ異議ヲ述フル者アルトキハ破産主任官命令ヲ以テ之ヲ決ス此命令ニ對シテハ破産裁判所ニ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第一千十四條 財産目錄ハ裁判所職員又ハ其地警察官吏ノ立會ヲ以テ管財人ノ之ヲ作り若シ必要アルトキハ破産者ヲモ立會ハシム

破産者ニ屬スル總テノ財産ハ財團ニ組入ル可カラサルモノト雖モ其價額ヲ明示シテ之ヲ財産目錄ニ記入スルコトヲ要ス必要ナル場合ニ在テハ其價額ハ鑑定人ヲシテ之ヲ鑑定セシム

財産目錄及ヒ之ニ關スル證書ノ謄本ハ公衆ノ展閱ニ供スル爲メ裁判所ニ之ヲ備フ

檢事ハ其見込ニ因リ職權ヲ以テ財産目錄ノ作成ニ立會フコトヲ得

第一千十五條 破産者ニ屬セタル財産ヲ財團ヨリ取戻スコトニ係ル争訟ハ破産裁判所之ヲ裁判シ不動産ニ付テハ其所在地ヲ管轄スル裁判所之ヲ裁判ス

第一千十六條 管財人ハ破産主任官ノ定メタル三十日以内ノ期間ニ破産者ヨリ差出シタル届書及ヒ貸借對照表ヲ調査シ若シ破産者ヨリ之ヲ差出サザリシトキハ自ラ貸借對照表ヲ作り且其報告書

ニ貸借對照表ヲ添ヘテ破産主任官ニ提出ス可シ

報告書及ヒ貸借對照表ノ認證アル謄本ハ公衆ノ展閱ニ供スル爲メ裁判所ニ之ヲ備フ

報告書及ヒ貸借對照表ハ之ヲ檢事ニ送致スルコトヲ要ス

第一千十七條 貸方ノ借方ニ超ユルコト判然ナルトキ又ハ協諾契約ノ豫期セラルル間ハ裁判所ハ破産主任官ノ申立ニ因リ且管財人ノ意見ヲ聽キタル後管財人ヲシテ破産者ノ營業ヲ續行セシムル

管財人ハ其使用ノ爲メ届出書及ヒ債權表ノ謄本ヲ受領ス

第二十五條 調査會ハ管財人及ヒ成ル可ク破産者ノ面前ニ於テ破産主任官之ヲ開キ其調査ヲ作ル可シ債權者ハ自身又ハ代理人ヲ以テ此會ニ參加スルコトヲ得

破産主任官ノ債權者ニ取引帳簿若クハ其抜書ヲ提出シ命スルコトヲ得

調査ノ結果ハ債權表及ヒ提出シタル債權證書ニ附記シ且各債權者又ハ其代理人ニ告知スルコトヲ要ス

調査會ハ届出期間ノ滿了後十日乃至十五日間ニ之ヲ開クヲ通例トス

届出期間ノ滿了後三届出テタル債權ハ調査會ニ於テ之ヲ調査スルコトヲ得然レトモ其調査ヲ爲スコトニ付キ異議ノ申立アリタルトキ又ハ調査會ノ終リタリ後債權ヲ届出テタルトキハ其債權者ノ費用ヲ以テ新ナル調査會ヲ開ク

第二十六條 債權ノ確定ハ承認亦ハ裁判所ノ判決ヲ以テ之ヲ爲ス

調査會ニ於テ管財人ヨリモ又債權ノ確定シ若クハ貸借對照表ニ掲ケタル債權者ヨリモ異議ヲ申立テサルトキハ債權ハ承認ヲ得タルモノトス

管財人ノ債權ニ係ル承認又ハ異議ハ破産主任官其管財人ニ代ハリテ之ヲ爲ス

第二十七條 異議ヲ受ケタル各債權ハ若シ其債權者之ヲ取消ササルトキハ破産裁判所公廷ニ於テ破産主任官ノ演述ヲ聽キ成ル可ク合併シテ其判決ヲ爲スコシ其辯論及ヒ判決ハ原告、被告ノ出頭セサルトキト雖モ之ヲ爲ス但此判決ニ對シテハ故障ヲ申立ツルコトヲ得ス

第二十八條 判決ハ成ル可ク債權者集會前ニ之ヲ爲スコトヲ要ス若シ之ヲ爲スコト能ハス又ハ判決ニ對シテ控訴ヲ爲シタルトキハ裁判所ハ異議ヲ受ケタル債權者ノ右集會ニ加ハルコトヲ許

ス可キヤ否キ又裁許ノ金額ニ付キ加ハルコトヲ許ス可キヤ否キヲ決定ス

債權者ノ優先權ノミカ異議ヲ受ケタルトキハ其債權者ハ通常ノ債權者トシテ右集會ニ加ハルコトヲ得

第二十九條 債權ヲ正當時期ニ届出テス又ハ債權ノ確定セサル債權者ハ以後ノ確定ニ因リテ爲ス可キ財團ノ配當ニノミ加ハルコトヲ得然レトモ異議ヲ受ケテ訴訟中ニ在ル債權及ヒ届出並ニ調査ノ爲メ別段ノ期間ヲ定メラレタル在外國債權者ノ債權ニ付テハ以前ノ配當ニ於テ其債權ニ歸スル割前未留存ス

第二節 特種ノ債權者

第三十條 主タル債務者ノ破産ニ於テ届出テタル債權ハ協諧契約ノ場合ト雖モ保證人其他ノ共同義務者ニ對シ其金額ニ付キ之ヲ主張スルコトヲ得又保證人又ハ共同債務者ハ主タル債務者ノ破産ニ於テ其償還請求ヲ届出ツルコトヲ得然レトモ主タル債務者ノ爲メニスル協諧契約ノ效果ニ從フ

第三十一條 二人以上ノ共同義務者カ破産シタルトキハ各其義務者ノ破産ニ於テ債權ノ全額ヲ届出ツルコトヲ得

各自ノ破産財團ノ間ニ於ケル償還請求權ハ之ヲ主張スルコトヲ得然レトモ債權者カ受取ル割前ノ額カ主タルモノ及ヒ從タルモノヲ合セタル債權ノ總額ヲ超過スルトキハ其超過額ハ共同義務者中他ノ共同義務者ニ對シテ償還請求權ヲ有スル者ノ財團ニ歸ス

第三十二條 左ニ掲ケル債權ハ届出及ヒ確定ニ關スル規定ニ從フコトヲ要セス
第一 裁判費用、管理費用其他破産手續上ノ費用

第三 協諧契約カ詐欺其他不正ノ方法ヲ以テ成リタルトキ

第四 協諧契約カ公益ニ觸レルトキ

第四十二條 協諧契約ハ破産者カ後ニ至リ有罪破産ノ判決ヲ受ケタルトキハ當然消滅シ其審問

中ハ免訴又ハ無罪ノ宣告ヲ受クルマテ之ヲ停止ス

前條第三號ニ掲ケタル理由アルトキハ協諧契約認可ノ後ト雖モ尙ホ之ニ對シテ異議ヲ申立ツル

コトヲ得

第四十三條 協諧契約ヲ確定シタルトキハ管財人ハ直チニ其執務ヲ罷メ且其執務ニ付キ計算ヲ

爲ス可シ

破産者ハ協諧契約ニ別段ノ定ナキトキニ限り任意ノ管理及ヒ處分ノ爲メ其財産ヲ取戻スコトヲ

得

協諧契約ノ履行ハ破産主任官ノ監督ヲ以テ之ヲ爲ス

第四十四條 協諧契約カ棄却セラレ又ハ後ニ至リ消滅シ若クハ取消サルルトキ又ハ不履行ノ爲

メ解除セラルトキハ破産手續ヲ再施シ直チニ財團ノ換價及ヒ配當ヲ爲シテ終局ニ至ラシム其

再施シタル手續ニハ再施マテノ間ニ債權ヲ得タル者モ参加スルコトヲ得

不履行ノ場合ニ在テハ協諧契約ノ爲メ立テタル保證人ハ其義務ヲ免務ニス

第八章 配當

第四十五條 第三十二條ニ掲ケタル債權及ヒ優先權アル債權ヲ支拂ヒタル後ニ殘レル財團ノ

他ノ債權者間ニ平等ノ割合ヲ以テ之ヲ配當ス

破産者カ資本ヲ分チ數箇ノ營業ヲ爲シタル場合ニ在テハ各營業ニ對スル債權者ハ其營業ニ屬ス

ル財團ヨリ優先權ヲ以テ辨償ヲ受ク

第四十六條 配當ハ普通ノ調査會ノ終リタル後ハ配當ニ足ル可キ財團ノ生スル毎ニ管財人ノ調

製シテ破産主任官ノ許可ヲ受ケタル配當案ニ依リテ之ヲ爲ス其案ハ破産主任官之ニ署名シ公衆

ノ展閱ニ供スル爲メ裁判所ニ備置キ且其旨ヲ公告ス可シ

配當案ニ對スル異議ハ其公告ノ日ヨリ起算シ十四日以内ニ之ヲ裁判所ニ申立ツルコトヲ得

第四十七條 前條ニ掲ケタル期間ニ配當案ニ對シテ異議ヲ申立ツル者ナキトキ又ハ異議ノ落著

シタルトキハ管財人ハ各債權者ヲシテ其債務證書ヲ提出セシメ之ニ毎回ノ支拂額ヲ記入シテ支

拂ヲ爲ス若シ債務證書ノ提出ヲ爲スコト能ハサルトキハ破産主任官ノ許可ヲ得テ債權表ニ依リ

支拂ヲ爲スコトヲ得執レノ場合ニ於テモ債權者ハ配當案ニ受取書ヲ記スルコトヲ要ス

第四十八條 財團ノ換價及ヒ配當ヲ全ク終リタルトキハ債權者集會ヲ開キ此集會ニ於テ管財人

ノ終局ノ計算ヲ爲スコシ此計算ノ濟了シタルトキハ裁判所ハ直チニ破産主任官ノ申立ニ依リテ

破産手續ヲ終結ヲ決定ス此決定ハ之ヲ公告ス可シ

第四十九條 破産手續終結ノ後ハ辨償ヲ受ケサル債權者ハ破産手續ニ於テ確定シタルニ因リテ

得タル權利名義ニ基キ其債權ヲ債務者ニ對シテ無限ニ行フコトヲ得

第九章 有罪破産

第五十條 破産宣告ヲ告ケタル債務者支拂力停止又ハ破産宣告ノ前後ヲ問ハス履行スル意ナキ

義務又ハ履行スル能ハサルコトヲ知リタル義務ヲ負擔シタルトキ又ハ債權者ニ損害ヲ被ラシ

ムル意志ヲ以テ貸方財産ノ全部若クハ一分ヲ藏匿シ轉匿シ若クハ脱漏シ又ハ借方現額ヲ過度ニ

掲ケ又ハ商業帳簿ヲ毀滅シ藏匿シ若クハ偽造ハ變造シタルトキハ詐欺破産ノ刑ニ處ス

第一千五十一條 破産宣告ヲ受ケタル債務者カ支拂停止又ハ破産宣告ノ前後ヲ問ハス左ニ掲クル行爲ヲ爲シタルトキハ過意破産ノ刑ニ處ス

第一 一身又ハ一家ノ過分ナル費用、博奕、空取引又ハ不相應ノ射利ニ因リテ貸方財産ヲ甚シク減少シ若クハ過分ノ債務ヲ負ヒタルトキ

第二 支拂停止ヲ延ハサンカ爲メ損失ヲ生スル取引ヲ爲シテ支拂資料ヲ調ヘタルトキ

第三 支拂停止ヲ爲シタル後支拂又ハ擔保ヲ爲シテ或ル債權者ニ利ヲ與ヘ財團ニ損害ヲ加ヘタルトキ

第四 商業帳簿ヲ秩序ナク記載シ藏匿シ毀滅シ又ハ全ク記載セサルトキ

第五 財産目錄、貸借對照表ノ作成若クハ支拂停止届出ノ義務ヲ怠リタルトキ又ハ裁判所ノ許可ヲ得スシテ其住地ヲ離レタルトキ(明治三十二年三月法律第四十九條ヲ以テ本號改正)

第一千五十二條 前二項ノ罰則ハ會社ノ義務擔當ノ任アル社員若クハ取締役及ヒ清算人ニモ之ヲ適用シ又第一千五十條ノ罰則ハ破産管財人及ヒ有罪行爲ヲ行フ際犯者ヲ助ケ又ハ有罪行爲ヲ破産者ノ利益ノ爲メ行ヒタル者ニモ之ヲ適用ス

第一千五十三條 債權者集會ニ於ケル議決ニ關シ債權者ニ賄賂ヲ爲シタルトキハ其雙方ヲ二年以下ノ重禁錮又千圓以下ノ罰金ニ處ス

第十章 破産ヨリ生スル身上ノ結果

第一千五十四條 破産宣告ヲ受ケタル債務者ハ復權ヲ得ルニ非サレハ會社ノ無限責任社員、舊商法ノ規定ニ從ヒテ設立シタル合資會社ノ業務擔當社員、株式會社ノ取締役若クハ監査役、清算人、破産管財人又ハ商業會議所ノ會員ト爲ルコトヲ得ス(同上法令ニテ本條改正)

第一千五十五條 復權ヲ得ルニハ協賛契約ノ調ヒタルト否トヲ問ハス破産者カ元債、利息及ヒ費用ノ全額ヲ債權者總員ニ辨償シタルコト又所在ノ知レサル爲メ未タ辨償ヲ受ケサル債權者ニ全額ヲ辨償スル準備又ハ資力アルコト證明ス可シ(明治三十二年法律第四十九號ヲ以テ第三項ヲ削ル)

復權ノ申立ニハ債權者ノ受取證其他必要ナル證據物ヲ添フ可シ

第一千五十六條 債權ノ申立アリタルトキハ破産裁判所ハ異議アル者ヲシテ二箇月ノ期間ニ異議ヲ起サシメンカ爲メ裁判所ノ揭示場ト取引所トニ其旨ヲ揭示シ且裁判所ノ見込ニ因リ新聞紙ヲ以テ之ヲ公告シ又調査及ヒ捜査ヲ爲サシメンカ爲メ之ヲ檢事ニ通知ス可シ

裁判所ハ檢事ノ意見ヲ聽キタル後復權ノ申立ヲ許可スルト否トヲ決定ス此決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得確定シタル決定ハ之ヲ公告ス

棄却セラレタル申立ハ一箇年ノ滿了前ニハ再ヒ之ヲ爲スコトヲ得ス

第十一章 支拂猶豫

第一千五十七條 復權ハ債務者ノ死亡後ト雖モ之ヲ許ス

第一千五十八條 復權ハ詐欺破産ノ爲メ判決ヲ受ケタル破産者又ハ重罪、輕罪ノ爲メニ剝奪公權若クハ停止公權ヲ受ケテ其時間中ニ在ル破産者ニハ之ヲ許サス

過意破産ノ場合ニ在テハ復權ハ刑ノ滿期ト爲リ又ハ恩赦ヲ得タル後ニアラサレハ之レヲ許サス

第一千五十九條 商人カ商行爲ニ因テ生シタル債務ニ付自己ノ過失ナクシテ支拂ヲ中止セサルコトヲ得サルニ至リタル場合ニ於テ其債權者ノ過半数以上ノ承諾ヲ得タルモハ營業所ノ所在地又ハ住所地ヲ管轄スル裁判所ハ一年ヲ超エサル範圍内ニ於テ支拂猶豫ヲ與フルコトヲ得(同令ニテ改正)

第一千六十條 支拂猶豫ノ申立ニハ左ノ諸件ヲ添附スルコトヲ要ス

第一 支拂中止ノ事由ノ完全ナル明示
 第二 貸借對照法、財産目錄及住所ト債權額トヲ明示シタル債權者名簿
 第三 債權者ニ主ナルモノ及ヒ從タルモノノ完全ナル辨償ヲ爲シ得ル方法、期間及ヒ此力爲メ
 供スルコトヲ得ル擔保ノ證明

右申立及ヒ添附書類ハ公衆ノ展閱ニ供スル爲メ之ヲ裁判所ニ備置キ且債權者ノ集會期日ヲ定メ
 之ト共ニ其備置キタル旨ヲ公告スルコトヲ要ス債權者ハ集會ノ爲メ各別ニ召集ヲ受ク
 支拂猶豫ハ裁判所ヨリ假ニ之ヲ許可スルコトヲ得

第六十一條 集會期日ニ於テハ裁判所ヨリ任セラレタル主任判事ノ上席ヲ以テ債權者ト債權者
 トノ間ニ支拂猶豫ノ申立ニ付キ辯論ヲ爲ス其申立ヲ承諾スルニハ第一千三十六條ニ揭ケケル過半
 數ヲ要ス其辯論及ヒ議決ニ付テハ調書ヲ作ル可シ

第六十二條 裁判所ハ承諾ヲ得タル支拂猶豫ノ認否ニ付主任判事ノ演述ヲ聽キテ決定ヲ爲ス此
 決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

支拂猶豫ハ申立ニ因リテ前數條ノ手續ニ從ヒ一回ニ限り之ヲ延長スルコトヲ得然レトモ其期間
 ハ一箇年ヲ超ユルコトヲ得ス

第六十三條 債務者有效ナル支拂猶豫ヲ得タルトキハ猶豫期間中其以前ニ取結ヒタル商取引ヨ
 リ生スル債權ノ爲メニ強制執行及ヒ破産宣告ヲ受クルコト無シ但猶豫契約ノ履行及業務ノ施行
 ニ關シテハ主任判事ノ監督ヲ受ク

債務者ノ保證人及ヒ共同義務者ノ義務ハ右猶豫ノ爲メニ變更スルコト無シ
 第六十四條 支拂猶豫ノ承諾ヲ得ス若クハ裁判所之ヲ棄却シタルトキ又ハ後日ニ至リ債務者ノ

詐欺若クハ不正ノ爲メ若クハ法律上ノ條件ノ缺クルカ爲メ之ヲ廢止シタルトキ又ハ債務者ニ於
 テ其猶豫契約ヲ履行セザルトキ又ハ其猶豫期間中債務者ノ財産ニ付キ他ノ債權者ヨリ強制執行
 ヲ爲ストキハ直チニ債務者ニ對シテ破産手續ヲ開始ス此場合ニ於テハ支拂猶豫申立ノ日附ヲ以
 テ支拂停止ノ日ト定ム

商法ニ從ヒ破産ノ宣告ヲ受ケタル者ニ關スル件

(明治二十三年十月法律第十一號)

朕商法ニ從ヒ破産ノ宣告ヲ受ケタル者ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

此法律ハ「明治二十四年一月一日」ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

- 一 詐欺破産ヲ爲シタル者ハ輕懲役ニ處ス
- 二 過怠破産ヲ爲シタル者ハ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處ス

第四篇 商事非訟事件印紙法

商事非訟事件印紙法

(明治二十三年八月法律第六十六號)

朕商事非訟事件印紙法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十四年一月一日ヨリ施行スヘ
 キコトヲ命ス(明治四十三年法律第十六號ヲ以テ本法稅額ニ改正ヲ加ヘ尙ホ非常特別稅法中商事
 非訟事件印紙ニ關スル規定ヲ廢ス)

商事非訟事件印紙法

第一條 商事中登記ニ關ル場合ヲ除ク外非訟事件ニ付裁判所ノ命令其他ノ處分ヲ求ムル者ハ以下數條ノ手續ニ從ヒ其差出ス書類ニ「民事訴訟用印紙」ヲ貼用ス可シ但口述ヲ以テスル場合ニ於テハ其調書ニ印紙ヲ貼用ス可シ(明治三十一年勅令第四百十號ヲ以テ訴訟用印紙ヲ貼用スヘキ場合ニハ收入印紙ヲ用ユヘキコトヲ定ム)

第五條第六條第七條ノ場合ニ於テハ管財人ヨリ差出ス計算書ニ印紙ヲ貼用ス可シ

第二條 左ニ掲クルモノニ付テハ一圓ノ印紙ヲ貼用ス可シ

- 一 抗告又ハ假差押ノ申立
- 二 債權者ヨリ爲ス破産宣告ノ申立
- 三 支拂猶豫ノ申立

第三條 左ニ掲クルモノニ付テハ二十五錢ノ印紙ヲ貼用ス可シ(同上)

- 一 抗告ニ對スル答辯
- 二 裁判所ノ命令其他ノ處分ノ申立ニシテ本法ニ於テ特ニ規定セサル非訟事件ニ係ルモノ

第四條 破産手續ニ付テハ破産財團中ノ貸方金額ニ應ジ左ノ區別ニ從ヒ印紙ヲ貼用ス可シ但財團ノ管理費用其他破産手續上ノ費用及ヒ財團ノ爲メニ負擔シタル債務並ニ別除ノ辨濟ニ供スル金額ハ貸方金額ヨリ之ヲ控除ス可キモノトス

財團ノ價額五圓マテ 五十錢
 同 十圓マテ 八十錢

同 二十圓マテ 一圓六十錢
 同 五十圓マテ 三圓六十錢
 同 七十五圓マテ 五圓
 同 百圓マテ 七圓
 同 二百圓マテ 十四圓
 同 五百圓マテ 二十四圓
 同 七百五十圓マテ 三十圓
 同 千圓マテ 三十六圓
 同 二千五百圓マテ 五十圓
 同 五千圓マテ 六十圓
 同 五千圓以上ハ千圓ニ達スル毎ニ六圓ヲ加フ

第五條 破産手續ニ付テハ財團ノ配當アル毎ニ其配當金額ノ割合ヲ以テ印紙價額ニ相當スル金額ヲ引去リ置キ終局計算ニ至リ配當金額高ノ割合ニ從ヒ相當印紙ヲ貼用ス可シ

第六條 協議契約ニ依リ手續ヲ止メタルトキハ第四條ニ掲ケタル印紙ノ半額ヲ貼用ス可シ

第七條 破産手續再施ノ場合ニ於テハ破産手續開始ニ於ケル場合ト同一ノ印紙ヲ貼用ス可シ

第八條 本法ニ定ムル印紙代價ノ負擔ニ付テハ民事訴訟法第一編第二章第五節ノ規定ヲ準用ス

民事訴訟用印紙法ハ本法ノ規定ニ牴觸セサルモノニ限り之ヲ準用ス

商事非訟事件印紙規則

(明治三十八年六月律令第八號)

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル商事非訟事件印紙規則勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス
商事非訟事件印紙規則

第一條 商法中登記ニ關スル場合ヲ除ク外非訟事件ニ付法院ノ命令其ノ他ノ處分ヲ求ムル者ハ明治二十三年法律第六十六號商事非訟事件印紙法ニ依リ印紙ヲ貼用スヘシ但シ同法第四條ニ定ムル印紙額ニ付テハ左ノ區別ニ從フ

財團價格十圓マテ	六十錢
同 五十圓マテ	三圓
同 百圓マテ	六圓
同 五百圓マテ	二十圓
同 千圓マテ	三十圓
同 五千圓マテ	五十圓
同 五千圓以上ハ千圓ニ達スル毎ニ四圓ヲ加フ	

第二條 明治三十一年律令第六號民事訴訟用印紙規則ハ本則ノ規定ニ牴觸セサルモノニ限り之ヲ準用ス

附則

本令ハ明治三十八年八月一日ヨリ之ヲ施行ス

第五編 商業登記

第一章 商業登記

商業登記取扱手續

(明治三十二年五月司法省令第十三號)

商業登記取扱手續左ノ通相定ム

商業登記取扱手續

第一條 商業登記簿ハ附錄第一號乃至第九號雜形ニ依リ地方裁判所ニ於テ之ヲ調製スヘシ但合資會社登記簿ヲ調製スルニハ附錄第七號雜形ノ第一欄ヨリ變更欄ニ至ルマテノ用紙ト社員ノ氏名、住所等ヲ記載スヘキ用紙トナ別チ初メテ第一欄ヨリ變更欄ニ至ルマテノ用紙ヲ纏メ其末尾ニ社員ノ氏名、住所等ヲ記載スヘキ用紙ヲ纏メテ之ヲ編綴スヘシ

外國會社登記簿ノ雜形ハ附錄第六號乃至第九號ニ依ルヘシ

第二條 商業登記簿ハ市町村毎ニ別冊ト爲スヘシ但市制又ハ町村制ヲ施行セサル地方ニ在リテハ從來ノ町村其他之ニ類スル區域毎ニ別冊ト爲シ東京市、京都市及ヒ大阪市ニ在リテハ其各區毎ニ別冊ト爲スヘシ

第三條 商業施行法第十五條第一項ニ依ル商號ノ登記ノ爲メ東京市及ヒ大阪市ニ存スル登記所

(東京區裁判所及ヒ大阪區裁判所ノ本廳ヲ除ク)ノ管轄毎ニ別ニ商號登記簿ヲ備フヘシ

第四條 商業登記簿ノ見出帳ハ附錄第十號乃至第十九號雜形ニ依リ之ヲ調製スヘシ

第五條 受附帳ハ附錄第二十號雜形ニ依リ之ヲ調製スヘシ

第六條 法律ニ依リ登記ノ申請書ニ捺印スヘキ者ハ豫メ其印鑑ヲ登記所ニ提出スヘシ改印ヲ爲シタルトキ亦同シ但登記ノ申請ニ付キ委任ニ因ル代理ヲ爲ス者ハ此限ニ在ラス

第七條 印鑑ハ附錄第二十一號雜形ニ依リ之ヲ調製スヘシ

第八條 登記所ニハ登記簿、見出帳及ヒ受附帳ノ外左ノ帳簿ヲ備フ

- 一 謄本抄本證明書交付帳
 - 二 商號登記申請書附屬書類綴込帳
 - 三 未成年者登記申請書附屬書類綴込帳
 - 四 妻登記申請書附屬書類綴込帳(三五年司法省令第一六號ニテ本號改正)
 - 五 後見人登記申請書附屬書類綴込帳
 - 六 支配人登記申請書附屬書類綴込帳
 - 七 合名會社登記申請書囑託書通知書附屬書類綴込帳(同上)
 - 八 合資會社登記申請書囑託書通知書附屬書類綴込帳(同上)
 - 九 株式會社登記申請書囑託書通知書附屬書類綴込帳(同上)
 - 十 株式合資會社登記申請書囑託書通知書附屬書類綴込帳(同上)
 - 十一 外國會社登記申請書囑託書通知書附屬書類綴込帳(同上)
 - 十二 受領證原符元帳
 - 十三 決定原本綴込帳
 - 十四 登記簿謄本綴込帳
 - 十五 登記簿濟證交付帳
 - 十六 抗告書類綴込帳
 - 十七 印鑑簿
- 第八條ノ二 前條第一號乃至第十六號ノ帳簿ハ一介年毎ニ別冊ト爲スヘシ(同令ニテ本條追加)

第九條 登記簿ノ爲メ當事者ノ提出シタル申請書其他ノ書面ニシテ登記所ニ保存スヘキモノハ之

ニ登記簿ノ冊數及ヒ其丁數ヲ記載シ登記簿ノ區別ニ從ヒ提出年月日ノ順序ヲ追ヒテ編綴スヘシ

第九條ノ二 印鑑簿ハ永久ニ之ヲ保存スヘシ(同上)

受附帳及ヒ登記簿謄本綴込帳ハ十年間之ヲ保存スヘシ

決定原本綴込帳及ヒ抗告書類綴込帳ハ五年間之ヲ保存スヘシ

謄本抄本證明書交付帳、受領證原符元帳及ヒ登記簿濟證交付帳ハ三年間之ヲ保存スヘシ

前三項ノ帳簿ノ保存期間ハ當該年度ノ翌年ヨリ之ヲ起算ス

第十條 登記簿若クハ附屬書類ノ閱覽又ハ登記簿ノ謄本若クハ抄本ノ交付ヲ請求スル者ハ申請書

ヲ提出スヘシ

第十一條 登記簿又ハ附屬書類ノ閱覽ヲ請求スル場合ニ於テハ申請書ニ左ノ事項ヲ記載シ申請人

署名捺印スヘシ但附屬書類ノ閱覽ヲ請求スル場合ニ於テハ申請書ニ利害ノ關係ヲ説明スルニ足

ルヘキ事由ヲ記載シ又ハ之ニ其關係ヲ説明スルニ足ルヘキ書面ヲ添付スヘシ

一 登記簿ノ種類

二 閱覽セント欲スル登記事項

三 登記所ノ表示

四 年月日

第十二條 登記簿ノ謄本又ハ抄本ノ交付ヲ請求スル場合ニ於テハ申請書ニ左ノ事項ヲ記載シ申請

人署名捺印スヘシ

一 登記簿ノ種類

二 閱覽セント欲スル登記事項

三 登記所ノ表示

四 年月日

第十三條 登記簿ノ謄本又ハ抄本ノ交付ヲ請求スル場合ニ於テハ申請書ニ左ノ事項ヲ記載シ申請

人署名捺印スヘシ

一 登記簿ノ種類

二 閱覽セント欲スル登記事項

三 登記所ノ表示

二 謄本又ハ抄本ノ交付ヲ請求スル登記事項
 三 手数料ノ金額
 四 登記所ノ表示
 五 年月日

登記簿ノ抄本ノ交付ヲ請求スル場合ニ於テハ申請書ニ前項ニ掲ケタル事項ノ抄本ノ外交付ヲ請求スル部分ヲ記載スヘシ

第十三條 登記事項ニ變更ナキコト又ハ或事項ノ登記ナキコトヲ證明ヲ請求スル者ハ申請書ニ通テ提出スヘシ

前項ノ申請書ニハ證明ヲ請求スル事項及ヒ年月日ヲ記載シ申請人署名捺印スヘシ

登記官吏ハ申請書ノ一通ニ證明文ヲ附シ年月日ヲ記載シテ署名捺印シ且登記所ノ印ヲ捺捺シテ之ヲ申請人ニ交付スヘシ

第十四條 登記ノ申請ハ申請人又ハ其代理人登記所ニ出頭シテ之ヲ爲スヘシ

第十五條 登記官吏カ申請書ヲ受取リタルトキハ受附帳ニ登記ノ目的、申請人ノ氏名(會社カ申請人ナルトキハ其商號)受附ノ年月日及ヒ受附番號ヲ記載シ申請書ニ受附ノ年月日及ヒ受附番號ヲ記載スヘシ

第十六條 申請書其他ノ書面ノ受領證ニハ受附ノ年月日及ヒ受附番號ヲ記載スヘシ

第十七條 登記官吏ハ受附番號ノ順序ニ從ヒテ登記ヲ爲スヘシ

第十八條 登記ヲ爲スニハ登記用紙中相當欄ハ登記事項及ヒ登記ノ年月日ヲ記載シ登記官吏捺印スヘシ

登記用紙中或欄ニ登記事項ヲ記載スルコトナクシテ登記ヲ完了シタルトキハ其空欄ニ朱線ヲ交又スヘシ但後日登記スルコトアルヘキ事項ヲ爲メ設ケタル欄ニ付テハ此限ニ在ラス

登記用紙中或欄ニ登記事項ヲ記載シタル場合ニ於テ同欄内ニ餘白アルトキハ其餘白ニ朱線ヲ交又スヘシ

變更欄ニ登記ヲ爲シタルトキハ其左側ニ縦線ヲ劃シテ餘白ト分界スヘシ

第十九條 變更ノ登記又ハ登記ノ更正ヲ爲シタルトキハ變更又ハ更正シタル登記事項ヲ朱抹スヘシ

第二十條 登記用紙ヲ閉鎖スルニハ登記番號ヲ朱抹スヘシ

第二十一條 商法第五十一條第二項第五十二條第一項第八十一條又ハ第百十八條第二項等ノ規定ニ依リ同法第五十一條第一項ニ定メタル登記ヲ爲シタルトキハ豫備欄ニ其事由ヲ記載スヘシ

非訟事件手續法第百三十五條ノ二及ヒ第百三十五條ノ三ニ定メタル營業ノ禁止又ハ外國會社ノ支店ノ閉鎖ノ登記ハ豫備欄ニ之ヲ爲スヘシ

同法第百五十三條及ヒ第百七十條第二項ノ規定ニ依リ商業登記ニ記載スヘキ事項ハ豫備欄ニ之ヲ記載スヘシ

保險ヲ營業トスル株式會社設立費用償却ノ方法ノ登記ハ豫備欄ニ之ヲ爲スヘシ(明治三十三年六月司法省令第二十號ヲ以テ本項及次項ヲ加フ)

私設鐵道法第十四條第一項ノ規定ニ依リ本免許ノ年月日及ヒ第三十五條第三項ノ規定ニ依ル合併ノ認可ヲ受ケタル年月日ハ豫備欄ニ之ヲ記載スヘシ

第二十二條 擔保附社債信託法ニ依ル社債ノ登記ハ登記用紙中變更欄ニ之ヲ爲スヘシ(三十九年一月司法省令第一號ヲ以テ本條ヲ追加ス)

第二十一條之三 登記官吏カ擔保附社債信託法第百十五條ノ規定ニ依リ主務官廳ヨリ登記ノ囑託ヲ受ケタルトキハ左ノ規定ニ從フヘシ(同上)

- 一 囑託カ信託會社ノ事業ノ停止ニ關スル場合ニ於テハ登記用紙中豫備欄ニ其登記ヲ爲スヘシ
- 二 囑託カ銀行事業ヲ兼ナル信託會社ノ免許ノ取消ニ關スル場合ニ於テハ目的變更ノ登記ヲ爲スヘシ
- 三 囑託カ信託事業ヲ專業トスル信託會社ノ免許ノ取消ニ關スル場合ニ於テハ解散ノ登記ヲ爲スヘシ

第二十二條 社債又ハ資本若クハ株金ノ増加ノ登記ヲ爲シタル後同一ノ事項ニ付キ更ニ登記ヲ爲スヘキ變更欄ニ其登記ヲ爲スヘシ

第二十三條 非訟事件手續法第百四十八條ノ規定ニ依リ登記ノ更正ノ申請アリタルトキハ登記用紙中變更欄ニ其登記ヲ爲スヘシ

第二十四條 登記用紙中或欄カ登記ヲ爲スヘキ餘白ナキニ至リタルトキハ新用紙中登記番號ノ左側ニ其番號ノ第二ナルコト竝ニ前用紙ヲ編綴セル登記簿ノ冊數、丁數及ヒ其繼續用紙ナルコトヲ記載シ且前用紙中登記番號ノ左側ニ第一ノ文字竝ニ新用紙ヲ編綴セル登記簿ノ冊數、丁數及ヒ之ニ繼續スル旨ヲ記載スヘシ

前用紙中他ノ欄ニ餘白アルトキハ其欄ニ登記スヘキ事項ニ付テハ仍ホ之ニ登記ヲ爲スヘシ
前二項ノ規定ハ第三以下ノ繼續用紙ヲ設クル場合ニ之ヲ準用ス

第二十五條 登記ヲ爲シ又ハ申請書其他登記ニ關スル書面ヲ作ルニハ字畫ヲ明瞭ニスヘシ
金錢其他ノ物ノ數量、年月日及ヒ番號ヲ記載スルニハ壹貳參拾ノ字ヲ用ユヘシ

文字ハ之ヲ改竄スルコトヲ得ス若シ訂正、挿入又ハ削除ヲ爲シタルトキハ其字數ヲ欄外ニ記載シ又ハ文字ノ前後ニ括弧ヲ付シ之ニ捺印シ其削除ニ係ル文字ハ尙ホ讀得ヘキ爲メ字體ヲ存スヘシ

第二十六條 登記ノ公告ハ登記ヲ爲シタル登記所ノ名ヲ以テ之ヲ爲スヘシ

第二十七條 登記ノ申請人ハ登記簿ニ交付ヲ請求スルコトヲ得

第二十八條 商業登記簿ノ見出帳ニハイロハ順ニ依リ豫メイノ部ヨリスノ部マテヲ設ケ置キ登記用紙ニ登記番號ヲ記載スル毎ニ登記用紙ヲ編綴セル登記簿ノ冊數丁數及登記番號ヲ記入スヘシ

第二十九條 登記用紙ヲ閉鎖シタルトキハ見出帳中備考欄ニ其事由ヲ記載シテ其見出ヲ抹スヘシ

第三十條 商號ノ變更又ハ未成年者、妻、後見人若クハ支配人ノ氏名ノ變更ノ登記ヲ爲シタルトキハ見出帳中更ニ相當ノ部ニ其見出ヲ移シ前ノ見出ノ備考欄ニ第何冊第何丁ニ移シタル旨ヲ記載シテ抹スヘシ

第三十一條 甲登記所ノ管轄地ノ一部カ乙登記所ノ管轄ニ轉屬シタルトキハ甲登記所ハ其部分ニ屬スル登記簿又ハ其謄本及ヒ附屬書類又ハ其謄本ヲ乙登記所ニ移送スヘシ但登記簿ノ謄本ニハ現存スル登記ノミヲ謄寫スヘシ

前項ノ場合ニ於テハ甲登記所ノ登記用紙中豫備欄ニ管轄變更ニ因リ轉出シタル旨及ヒ其年月日ヲ記載シ登記官吏捺印シ其登記用紙ヲ閉鎖スヘシ

第三十二條 前條ノ規定ニ依リ登記簿ノ謄本及ヒ附屬書類又ハ其謄本ノ移送ヲ受ケタルトキハ乙登記所ハ登記簿ノ謄本ニ依リ登記簿ニ登記ヲ移スヘシ

登記簿ニ登記ヲ移スニハ登記用紙中登記番號欄ニ其登記簿ニ於ケル登記ノ順序ヲ追ヒテ新ナル

番號ヲ記載シ其左側ニ前登記管轄ノ表示ヲ爲シ前登記番號ヲ記載シ豫備欄ニ管轄變更ニ因リ轉入シタル旨及其年月日ヲ記載シ登記官吏捺印スヘシ

第三十三條 會社ノ商號ハ商號登記簿ニ登記スル旨ヲ要セス其別本ハ商號ノ變更ニ因リ轉入シタル旨及其年月日ヲ記載シ登記官吏捺印スヘシ

第三十四條 同一ノ當事者ヨリ數箇ノ商號ヲ登記シ申請アリタルトキハ各商號ニ付キ各別ノ登記用紙ニ登記ヲ爲スヘシ

第三十五條 商業ヲ營ム未成年者カ登記ヲ爲シタル場合ニ於テ其登記事項カ未成年者ノ死亡ニ因リ消滅シタルトキハ親權ヲ行フ者又ハ後見人ヨリ登記ノ申請ヲ爲スヘシ

第三十六條 商業ヲ營ム妻カ登記ヲ爲シタル場合ニ於テ其登記事項カ妻ノ死亡ニ因リ消滅シタルトキハ其夫ヨリ登記ノ申請ヲ爲スヘシ

第三十七條 被後見人ノ爲メニ商業ヲ營ム後見人カ登記ヲ爲シタル場合ニ於テ其登記事項カ後見人ノ死亡ニ因リ消滅シタルトキハ後見監督人ヨリ登記ノ申請ヲ爲スヘシ

第三十八條 前三條ノ場合ニ於テハ申請書ニ登記事項ノ消滅シタルコトヲ證スルニ足ルベキ書面ヲ添附スベシ

第三十九條 數人ノ支配人カ登記ノ申請アリタル場合ニ於テハ各別ノ登記用紙ニ登記ヲ爲スヘシ

第四十條 登記ヲ爲シタル未成年者ノ妻若クハ後見人ノ營業所又ハ支配人カ登記カ必營業所カ登記所ノ管轄外ニ移轉シタルトキハ登記用紙中消滅欄ニ其登記ヲ爲シ登記用紙ヲ閉鎖スヘシ

第四十一條 商號ノ登記ヲ爲シタル者ハ營業所カ商號カ效力ヲ有スル區域外ニ移轉シタルトキハ登記用紙中消滅欄ニ其登記ヲ爲シ登記用紙ヲ閉鎖スヘシ

第四十二條 前條ノ規定ハ市町村又ハ商號ノ登記ノ效力ニ付キ市町村ニ準スヘキ區域ノ變更ニ因リ商號ノ登記ノ効力カ消滅シタル場合ニ之ヲ準用ス

第四十三條 合資會社ノ社員ノ氏名、住所、出資及ヒ責任ノ登記ハ登記簿ノ末尾ニ編綴セル用紙ニ之ヲ爲スベシ其登記事項ノ變更又ハ消滅ノ登記ニ付テモ亦同シ

第四十四條 會社カ其本店又ハ支店ヲ登記所ノ管轄外ニ移轉シタル場合ニ於テ移轉ノ登記ヲ爲シタルトキハ其登記用紙ヲ閉鎖スヘシ

第四十五條 前項ノ規定ハ登記所ノ管轄内ニ本店又ハ他ノ支店アル場合ニハ之ヲ適用セス

第四十六條 會社登記簿ニ清算終了ノ登記ヲ爲シタルトキニハ其登記用紙ヲ閉鎖スヘシ

第四十七條 登記ノ申請書ニ添附シタル書類ノ原本ノ遺失ヲ請求スル場合ニ於テハ申請人ハ其原本ト共ニ相違ナキ旨ヲ記載シタル謄本ヲ添附スヘシ

登記官吏カ書類ノ原本ヲ還付スルトキハ其謄本ニ原本還付ノ旨ヲ記載シテ捺印スヘシ

第四十八條 外國會社ノ支店廢止ノ登記ハ登記用紙中豫備欄ニ之ヲ爲シ其登記用紙ヲ閉鎖スヘシ

第四十九條 商法施行前ニ登記シタル事項ノ變更若ハ消滅ノ登記又ハ商法施行前ニ設立ノ登記ヲ爲シタル會社ニ付キ商法施行法ノ規定ニ依リ其會社ニ登記ニ追加スヘキ事項ノ登記ハ從來ノ登記簿ニ之ヲ爲スヘシ但從來ノ登記用紙中相當ノ欄ナキ事項ニ付テハ變更簿ニ其登記ヲ爲スヘシ

番號ヲ記載シ其左側ニ前登記管轄ノ表示ヲ爲シ前登記番號ヲ記載シ豫備欄ニ管轄變更ニ因リ轉入シタル旨及其年月日ヲ記載シ登記官吏捺印スヘシ

第三十三條 會社ノ商號ハ商號登記簿ニ登記スル旨ヲ要セス其別本ハ商號ノ變更ニ因リ轉入シタル旨及其年月日ヲ記載シ登記官吏捺印スヘシ

第三十四條 同一ノ當事者ヨリ數箇ノ商號ヲ登記シ申請アリタルトキハ各商號ニ付キ各別ノ登記用紙ニ登記ヲ爲スヘシ

第三十五條 商業ヲ營ム未成年者カ登記ヲ爲シタル場合ニ於テ其登記事項カ未成年者ノ死亡ニ因リ消滅シタルトキハ親權ヲ行フ者又ハ後見人ヨリ登記ノ申請ヲ爲スヘシ

第三十六條 商業ヲ營ム妻カ登記ヲ爲シタル場合ニ於テ其登記事項カ妻ノ死亡ニ因リ消滅シタルトキハ其夫ヨリ登記ノ申請ヲ爲スヘシ

第三十七條 被後見人ノ爲メニ商業ヲ營ム後見人カ登記ヲ爲シタル場合ニ於テ其登記事項カ後見人ノ死亡ニ因リ消滅シタルトキハ後見監督人ヨリ登記ノ申請ヲ爲スヘシ

第三十八條 前三條ノ場合ニ於テハ申請書ニ登記事項ノ消滅シタルコトヲ證スルニ足ルベキ書面ヲ添附スベシ

第三十九條 數人ノ支配人カ登記ノ申請アリタル場合ニ於テハ各別ノ登記用紙ニ登記ヲ爲スヘシ

第四十條 登記ヲ爲シタル未成年者ノ妻若クハ後見人ノ營業所又ハ支配人カ登記カ必營業所カ登記所ノ管轄外ニ移轉シタルトキハ登記用紙中消滅欄ニ其登記ヲ爲シ登記用紙ヲ閉鎖スヘシ

第四十一條 商號ノ登記ヲ爲シタル者ハ營業所カ商號カ效力ヲ有スル區域外ニ移轉シタルトキハ登記用紙中消滅欄ニ其登記ヲ爲シ登記用紙ヲ閉鎖スヘシ

第四十二條 前條ノ規定ハ市町村又ハ商號ノ登記ノ效力ニ付キ市町村ニ準スヘキ區域ノ變更ニ因リ商號ノ登記ノ効力カ消滅シタル場合ニ之ヲ準用ス

第四十三條 合資會社ノ社員ノ氏名、住所、出資及ヒ責任ノ登記ハ登記簿ノ末尾ニ編綴セル用紙ニ之ヲ爲スベシ其登記事項ノ變更又ハ消滅ノ登記ニ付テモ亦同シ

第四十四條 會社カ其本店又ハ支店ヲ登記所ノ管轄外ニ移轉シタル場合ニ於テ移轉ノ登記ヲ爲シタルトキハ其登記用紙ヲ閉鎖スヘシ

第四十五條 前項ノ規定ハ登記所ノ管轄内ニ本店又ハ他ノ支店アル場合ニハ之ヲ適用セス

第四十六條 會社登記簿ニ清算終了ノ登記ヲ爲シタルトキニハ其登記用紙ヲ閉鎖スヘシ

第四十七條 登記ノ申請書ニ添附シタル書類ノ原本ノ遺失ヲ請求スル場合ニ於テハ申請人ハ其原本ト共ニ相違ナキ旨ヲ記載シタル謄本ヲ添附スヘシ

登記官吏カ書類ノ原本ヲ還付スルトキハ其謄本ニ原本還付ノ旨ヲ記載シテ捺印スヘシ

第四十八條 外國會社ノ支店廢止ノ登記ハ登記用紙中豫備欄ニ之ヲ爲シ其登記用紙ヲ閉鎖スヘシ

第四十九條 商法施行前ニ登記シタル事項ノ變更若ハ消滅ノ登記又ハ商法施行前ニ設立ノ登記ヲ爲シタル會社ニ付キ商法施行法ノ規定ニ依リ其會社ニ登記ニ追加スヘキ事項ノ登記ハ從來ノ登記簿ニ之ヲ爲スヘシ但從來ノ登記用紙中相當ノ欄ナキ事項ニ付テハ變更簿ニ其登記ヲ爲スヘシ

第五十條 不動產登記法施行細則第四條第五條第十二條第十三條第二十條第二十四條第二十七條第三十三條乃至第三十九條第四十七條第五十一條第七十一條第一項及七十二條之規定、商業登記法之準用ス。

〔附錄第二號乃至第二十號ハ之ヲ略ス〕

附錄第二十一號 (用紙厚紙、五寸横一寸)

市町村番地

印 鑑

氏 名

何年何月生

(注意) 會社ノ代表者ナルトキハ氏名ノ肩ニ會社ノ營業所ノ所在地、會社ノ商號並ニ代表者ノ資格ヲ記載スヘシ

附錄第二十二號

登記簿

登記簿

登記番號	登記ノ件名	申請人ノ氏名	住所	登記年月日
右登記簿ナルハ、海産ノ...				
明治三十三年六月...				

第二章 相互保險會社登記

相互保險會社登記取扱手續

(明治三十三年六月司法省令第十八號)

相互保險會社登記取扱手續左ノ通相定ム

相互保險會社登記取扱手續

- 第一條 相互保險會社登記簿ハ附錄第一號雛形ニ依リ地方裁判所ニ於テ之ヲ調製スヘシ
外國相互保險會社登記簿ハ附錄第一號雛形ニ準シ之ヲ調製スヘシ(明治三十三年九月司法省令第三十五號ヲ以テ本項ヲ追加ス)
- 第二條 相互保險會社登記簿見出帳ハ附錄第二號雛形ニ依リ之ヲ調製スヘシ
外國相互保險會社見出帳ハ附錄第二號雛形ニ準シ之ヲ調製スヘシ(同上)
- 第三條 相互保險會社社員登記簿ハ附錄第三號雛形ニ依リ地方裁判所ニ於テ之ヲ調製スヘシ
外國相互保險會社社員登記簿ハ附錄第三號雛形ニ準シ之ヲ調製スヘシ(同上)
- 第四條 登記所ニハ登記簿、社員名簿、見出帳及ヒ受附帳ノ外左ノ帳簿ヲ備フ(明治三十三年司法省令第三十五號ヲ以テ第三號ヲ追加シテ以下順次繰下ク尙三十五年同省令十八號ヲ以テ第二號及第三號ニ追加ヲ施ス)
- 一 原本抄本證明書交付帳
- 二 相互保險會社登記申請書囑託書類送帳
- 三 外國相互保險會社登記申請書通知書屆書附屬書類送帳
- 四 受領證原符元帳
- 五 決定原本綴込帳
- 六 登記簿謄本綴込帳
- 七 登記簿送付帳
- 八 抗告書類送帳
- 九 印鑑簿

- 第四條ノ二 前條第一號乃至第八號ノ帳簿ハ一年毎ニ別冊ト爲スヘシ(明治三十五年七月司法省令第十八號ヲ以テ本條ヲ加フ)
- 第五條 相互保險會社ノ設立ノ登記申請書ニハ設立ノ年月日ヲ記載スヘシ
外國相互保險會社ノ登記申請書ニ添附スヘキ書類カ外國語ヲ以テ記載シタルモノナルトキハ申請人ハ之ヲ其譯文ヲ添附スヘシ(同上法令ニテ本項ヲ追加ス)
- 第六條 登記所ニ差出スヘキ社員名簿ノ表紙ハ厚紙ヲ用テ表面ニ(何々相互保險會社)社員名簿ト記載シ裏面ニ其枚數ヲ記載シ申請人記名捺印スヘシ
社員名簿ノ用紙ニハ丁數ヲ記入シ且毎葉ノ綴目ハ契印ヲ爲スヘシ
前二項ノ場合ニ於テ取締役又ハ監督役カ多數ナルトキハ各一人ノ記名捺印又ハ契印ヲ以テ足ル
- 第七條 社員名簿カ一冊以上ナルトキハ申請人ハ各冊ノ表紙ニ其冊數ヲ記載スヘシ
- 第八條 社員名簿ノ記載ノ變更ノ申請ヲ爲ス場合ニ於テハ其申請書ニ變更シタル事項ノ記載アル用紙ヲ編綴セル社員名簿ノ冊數及ヒ丁數ヲ記載スヘシ
- 第九條 相互會社ノ設立ノ年月日ハ登記用紙中豫備欄ニ之ヲ記載スヘシ
- 第十條 登記官吏カ登記ヲ爲シタルトキハ社員名簿ノ表紙ニ登記番號、受附ノ年月日、受附番號及ヒ登記所ノ名稱ヲ記載スヘシ
- 第十一條 社員名簿ノ記載ノ申請アリタルトキハ社員登記簿ノ登記用紙中番號欄ニ其登記簿ニ於ケル登記ノ順序ヲ追ヒテ新ナル番號ヲ記載シ其左側ニ變更シタル事項ノ記載アル社員名簿ノ冊數及ヒ丁數ヲ記載シ相當欄ニ保險業法第四十九條ノ規定ニ依リ社員名簿ニ記載シタル事項ヲ移シタル上變更欄ニ其登記ヲ爲スヘシ

前項ノ手續ヲ爲シタルトキハ社員名簿中相當部分ノ餘白ニ社員登記簿第何冊第何丁ニ移シタル旨及ヒ年月日ヲ記載シ登記官吏捺印スヘシ

第十二條 社員ノ入社ニ因リ社員名簿ノ記載シ變更ノ申請アリタルトキハ社員登記簿ノ登記用紙中番號欄ニ其登記簿ニ於ケル登記ノ順序ヲ追ヒテ新ナル番號ヲ記載シ相當欄ニ保險業法第四十九條ニ掲ケタル事項ヲ登記スヘシ

第十三條 社員ノ退社ニ因リ社員名簿ノ記載ノ變更ノ申請アリタルトキハ社員名簿中相當部分ノ餘白ニ其登記ヲ爲シ退社シタル社員ノ氏名ヲ抹スヘシ

若シ其社員カ社員登記簿ニ登記セラレタル者ナルトキハ社員登記簿ノ登記用紙中變更欄ニ退社ノ登記ヲ爲シ登記番號及ヒ其社員ノ氏名ヲ抹スヘシ

第十四條 社員登記簿ノ登記用紙中減欄カ登記ヲ爲スルニ於テ餘白カ減欄ニ至リタルトキハ新ニ番號欄ニ前番號ヲ轉寫シ其左側ニ第二ノ文字ノ前番號ノ用紙ヲ綴接セル社員登記簿ノ冊數、丁數及ヒ其綴接用紙ナルコトヲ記載シ社員ノ氏名、住所欄ニ社員ノ氏名、住所ヲ移シタルトキハ登記ヲ爲スヘシ

前項ノ手續ヲ爲シタルトキハ前項ノ左側ニ第一ノ文字並ニ綴接用紙ヲ綴接セル社員登記簿ノ冊數、丁數及ヒ之ニ綴接スル旨ヲ記載スヘシ

前二項ノ規定ハ第三以下ノ綴接用紙ヲ設ケル場合ニ之ヲ適用ス

第十五條 不動産登記法施行細則第四條第五條第十二條第十三條乃至第二十四條第二十七條第三十三條乃至第三十九條第四十七條第五十一條及ヒ商業登記取扱手續第五條乃至第七條第九條乃至第二十條第二十一條第一項第三項第二十三條乃至第三十三條第四十四條乃至第四十六條第四十七條第二項第四十八條ノ規定ハ相互保險會社ノ登記ニ之ヲ準用ス(同上法令ヲ以テ本條ヲ改メ)

受附番號ハ明治三十三年分ニ限リ七月一日ニ始メ十二月三十一日ニ止ムヘシ

相互保險會社ニ關スル登記事務所

相互保險會社ニ關スル登記ノ事務ハ商業登記ヲ取扱フ登記所ニ於テノミ之ヲ取扱ハシム

(明治三十三年七月司法省令第二十三條)

外國相互保險會社登記取扱所

外國相互保險會社ニ關スル登記ノ事務ハ商業登記ヲ取扱フ登記所ニ於テノミ之ヲ取扱フ

(明治三十三年十月司法省令第三十八號)

相互保險會社登記簿ノ謄本又ハ抄本ノ交付ノ請求等

相互保險會社登記簿ノ謄本又ハ抄本ノ交付ノ請求等ニ關スル手数料ニ付テハ明治三十二年司法省令第十四號第一條及第三條乃至第六條ノ規定ヲ準用ス

關スル手数料

相互保險會社登記簿ノ謄本又ハ抄本ノ交付ノ請求等ニ關スル手数料ニ付テハ明治三十二年司法省令第十四號第一條及第三條乃至第六條ノ規定ヲ準用ス

外國相互保險會社登記簿ノ謄本又ハ抄本ノ交付ノ請求ニ關スル手數料

(明治三十三年九月司法省令第三十六號)

外國相互保險會社登記簿ノ謄本又ハ抄本ノ交付ノ請求等ニ關スル手數料ニ付テハ明治三十二年司法省令第十四號第一條及ヒ第三條乃至第六條ノ規定ヲ準用ス

相互保險會社登記ニ關スル取扱手續ハ明治三十三年司法省令第十八號ニ依ルノ件

(明治三十三年十二月臺灣總督府令第百十六號)

相互保險會社登記ニ關スル取扱手續ハ明治三十三年(六月)司法省令第十八號相互保險會社登記取扱手續ニ依ル

但シ地方裁判所ノ職務ニ屬セシメタルモノハ覆審法院チシテ之ヲ行ハシム(明治三十六年一月臺灣總督府令第五號ヲ以テ本但書ヲ追加ス)

第三章 船舶登記

船舶登記規則

(明治三十二年六月勅令第二百七十號)

朕船舶登記規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

船舶登記規則

第一章 總則

第一條 不動產登記法第二條乃至第七條第九條第一項第十條第十二條第十三條第十八條乃至第三十五條第三十八條乃至第六十六條第六十九條乃至第七十八條第一百一條第一百八條第一百十七條第一百十九條第二百一十條第二百二十二條乃至第二百二十七條第四百一十一條第四百四十二條第四百四十四條乃至第四百四十八條及ヒ第五百五十條乃至第五百五十九條ノ規定ハ船舶ノ登記ニ之ヲ準用ス

第二章 登記所

第二條 此規則ニ別段ノ定メアル場合ヲ除ク外船舶港ヲ管轄スル區裁判所又ハ其出張所ヲ以テ管轄登記所トス

船舶港力數箇ノ登記所ノ管轄地ニ跨カルトキハ司法大臣管轄登記所ヲ指定ス

第三條 登記所ハ船舶所有權移轉ノ登記又ハ第三十條ノ規定ニ依ル抹消ノ登記ヲ爲シタルトキハ遲滞ナク其旨ヲ船舶港ヲ管轄スル管海官廳ニ通知スルコトヲ要ス
管海官廳ハ第十六條ニ掲ケタル事項又ハ船舶港ノ變更アリタルトキハ遲滞ナク其旨ヲ登記所ニ通知スルコトヲ要ス

第三章 登記簿

第四條 登記簿ハ船舶港毎ニ別冊ト爲ス

第五條 登記簿ハ一艘ノ船舶ニ付キ一用紙ヲ備フ

第六條 登記簿ハ其一用紙ヲ登記番號欄、表題部及ヒ甲乙丙丁ノ四區ニ分チ尙ホ表題部ニ表示欄、表示番號欄ヲ設ケ各區ニ事項欄、順位番號欄ヲ設ケ

登記番號欄ニハ各船舶ニ付キ登記簿ニ始メテ登記ヲ爲シタル順序ヲ記載ス

表示欄ニハ第十六條ノ規定ニ依リテ船舶ノ表示ヲ爲シ及ヒ其變更ニ關スル事項ヲ記載シ表示番號欄ニハ表示欄ニ登記事項ヲ記載シタル順序ヲ記載ス

甲區事項欄ニハ所有權ニ關スル事項ヲ記載ス

乙區事項欄ニハ船舶管理人ニ關スル事項ヲ記載ス

丙區事項欄ニハ抵當權ニ關スル事項ヲ記載ス

丁區事項欄ニハ貸借權ニ關スル事項ヲ記載ス

順位番號欄ニハ事項欄ニ登記事項ヲ記載シタル順序ヲ記載ス

第四章 登記手續

第一節 通則

第七條 登記ヲ申請スルニハ始メテ船舶所有權ノ登記ヲ申請スル場合及ヒ第十一條第一項ノ場合ヲ除ク外申請書ニ登記證書ヲ添附スルコトヲ要ス

第八條 申請書ニハ左ノ事項ヲ記載シ申請人ノ署名、捺印スルコトヲ要ス

一 船舶ノ種類、名稱及ヒ積量

二 船籍港

三 不動産登記法第三十六條第三號乃至第八號ニ掲ケタル事項

第九條 登記官吏カ登記ヲ完了シタルトキハ登記證書ニ申請書受附ノ年月日、受附番號、順位番號、登記權利者ノ氏名、住所、登記原因、其日附、登記ノ目的及ヒ登記簿ノ旨ヲ記載シ登記所ノ印ヲ捺捺シテ之ヲ所有權ノ登記名義人ニ還付スルコトヲ要ス

第十條 登記證書カ滅失シタル時キハ船舶助船籍港ニ淀泊スル場合ニ限り所有權ノ登記名義人ハ其登記簿ヲ爲シタル登記所ノ所在地ヲ管轄スル區裁判所ノ許可ヲ得テ更ニ登記證書ノ交付ヲ申請スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テハ區裁判所ハ裁判ヲ爲ス前船長ヲ訊問スルコトヲ要ス

第十一條 所有權ノ登記名義人ハ登記證書ヲ提出セスシテ證明ヲ申請スルコトヲ得此場合ニ於テハ登記簿ニ特別登記簿ニ之ヲ爲スコトヲ要ス

前項ノ場合ニ於テ登記證書ヲ提出スルコトヲ得ルニ至リタルトキハ之ヲ提出シテ更ニ登記ヲ申請スルコトヲ要ス

第十二條 船舶登記官吏カ前條第二項ノ申請ヲ受ケタルトキハ特別登記簿ノ登記ヲ登記簿ニ移シ其末尾ニ特別登記簿ニ依リテ登記ヲ移シタル旨及ヒ申請書受付ノ年月日ヲ記載シ登記官吏捺印スルコトヲ要ス

登記簿ニ登記ヲ移ス時ハ順位番號欄ニ其登記簿ニ於テ何處登記ノ順序ヲ追記テ新ナル番號ヲ記載スルコトヲ要ス

第十三條 特別登記簿ニ登記簿ニ移シタル時ハ特別登記簿ノ用紙ヲ閉鎖スルコトヲ要ス

第十四條 特別登記簿ニ登記簿ニ移シタル時ハ特別登記簿ノ申請者以外ノ當事者ニ對シテ本登記簿ノ旨ヲ通知スルコトヲ要ス

第十五條 特別登記簿ニ登記簿ニ移シタル時ハ特別登記簿ノ申請者以外ノ當事者ニ對シテ本登記簿ノ旨ヲ通知スルコトヲ要ス

第十六條 特別登記簿ニ登記簿ニ移シタル時ハ特別登記簿ノ申請者以外ノ當事者ニ對シテ本登記簿ノ旨ヲ通知スルコトヲ要ス

第十七條 特別登記簿ニ登記簿ニ移シタル時ハ特別登記簿ノ申請者以外ノ當事者ニ對シテ本登記簿ノ旨ヲ通知スルコトヲ要ス

第十八條 特別登記簿ニ登記簿ニ移シタル時ハ特別登記簿ノ申請者以外ノ當事者ニ對シテ本登記簿ノ旨ヲ通知スルコトヲ要ス

第十九條 特別登記簿ニ登記簿ニ移シタル時ハ特別登記簿ノ申請者以外ノ當事者ニ對シテ本登記簿ノ旨ヲ通知スルコトヲ要ス

第二十條 特別登記簿ニ登記簿ニ移シタル時ハ特別登記簿ノ申請者以外ノ當事者ニ對シテ本登記簿ノ旨ヲ通知スルコトヲ要ス

第十四條 始メテ所有權ノ登記ヲ爲ス場合ニ於テハ書面ニ依リ自己カ所有者タルコトヲ證スル者

不動產登記法第七條但書ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第十五條 始メテ所有權ノ登記ヲ申請スル場合ニ於テハ申請書ニ管海官廳官署ヨリ交付シタル船舶件

名書ノ謄本及七次條第三項第八號並ニ第三項第四號第五號ニ掲ケタル事項ヲ證スル書面ヲ添附

日本ニ於テ製造シタル船舶ニ付キ始メテ所有權ノ登記ヲ申請スル場合ニ於テハ申請書ハ其船舶

ノ製造地ヲ管轄スル登記所ノ特別登記簿ニ謄本又ハ特別登記簿ニ其船舶ニ關スル登記ヲキコト

第十六條 始メテ所有權ノ登記ヲ爲ス場合ニ於テハ表示欄ニ左ノ事項ヲ記載スルコトヲ要ス

一 船舶ノ種類及七名稱

二 國籍取得ノ年月日但日本ニ於テ船舶ヲ製造シタル場合ハ此限ニ在ラス

三 外板ノ材料

四 船骨ノ材料

五 一橋ノ數

六 噸數

七 登簿噸數

八 進水ノ年月日

九 汽船ニ在リテ前ニ掲ケタル事項ノ外左ノ事項ヲ記載スルコトヲ要ス

一 汽機石種類及噸數

二 汽機ノ種類及噸數

三 推進器ノ種類

四 汽機製造ノ年月日

五 汽機製造ノ年月日

第十七條 始メテ所有權ノ登記ヲ爲ス場合ニ於テ登記官吏カ其登記ヲ完了シタルトキハ登記證書

ヲ作り之ニ登記番號、船舶ノ種類、名稱並ニ積量、船籍港及七第九條ニ掲ケタル事項ヲ記載シ

登記所ノ印ヲ捺捺シテ之ヲ登記權利者ニ交附スルコトヲ要ス

第十八條 所有權ノ登記ヲ申請スル場合ニ於テハ申請書ニ登記權利者カ日本人ナルコトヲ證スル

戸籍吏ノ書面其他之ヲ證スルニ足ルベキ書面ヲ添附スルコトヲ要ス

第十九條 所有權ノ登記ヲ申請スル場合ニ於テ登記權利者カ商會社其他ノ法人ナルコトヲ申請

書ニ其本店又ハ主ナル事務所ノ所在地及七船舶法第一條ニ掲ケタル社員、無限責任社員、取締

役、業務擔當社員若クハ代表者ノ氏名ヲ記載シ且之ヲ證スル謄本、抄本又ハ登記簿及

此等ノ者カ日本人ナルコトヲ證スル戸籍吏ノ書面其他之ヲ證スルニ足ルベキ書面ヲ添附スル

同ノ登記所ニ於テ既ニ商法第五十一條乃至第五十三條第七條第百四十一條第百四十二條

商法第百三十八條又ハ民法第四十六條ノ規定ニ依リテ登記ヲ爲シタルトキハ前項ニ定メタル

登記簿之謄本、抄本又ハ登記簿證ヲ添附スルコトヲ要セス

第五十條 始メテ所有權ノ登記ヲ申請スル場合ニ於テ船舶ガ數人ノ共有ニ屬スルトキハ申請書ニ各共有者ノ持分及ヒ船舶管理人ノ氏名、住所ヲ記載スルコトヲ要ス

前項ノ規定ハ船舶所有者ガ其所有權ノ一部ヲ讓渡シタル場合ニ於テ準用ス

第二十一條 第十六條ニ掲ケタル事項ニ變更ヲ生シ又ハ船舶所有者ガ船舶籍港ヲ變更シタルトキハ所有權ノ登記名義人ハ遲滞ナク其登記ヲ申請スルコトヲ要ス

前項ノ場合ニ於テ同一ノ船舶ノ登記用紙ニ抵當權又ハ賃借權ノ登記アルトキハ申請書ニ其登記名義人ノ承諾書又ハ之ニ對抗スルコトヲ得ヘキ裁判ノ謄本ヲ添附スルコトヲ要ス

第三十二條 第十六條ニ掲ケタル事項ニ變更ノ登記ヲ爲スルコトキハ登記用紙中表示欄ニ變更後ノ事項ヲ記載シテ表示番號欄ニ番號ヲ記載シ前ノ表示及ヒ其番號ヲ抹スルコトヲ要ス

第二十三條 第十六條ニ掲ケタル事項ニ變更ノ登記ノ申請書ヲ受附タル時ニ於テ未ダ海官廳ヨリ其事項ニ關スル通知ヲ受ケサルトキ又ハ其申請書ニ記載シタル登記ノ目的ガ海官廳ノ通知ニ符合セザルトキハ不動産登記法第四十九條ノ規定ヲ準用ス但登記ノ目的ガ海官廳ノ通知ニ符合セザルトキハ抄本ト符合スルトキハ此限ニ在ラス

第二十四條 同一ノ登記所ノ管轄内ニ於ケル船舶籍港變更ノ登記ノ申請アリタルトキハ新船舶籍港ノ登記簿ニ舊船舶籍港ノ登記ヲ移スコトヲ要ス

登記簿ニ登記ヲ移スコトキハ登記用紙中登記番號欄ニ其登記簿ニ於ケル順序ヲ追ヒテ新ナル番號ヲ記載シ其左側ニ舊船舶籍港ノ表示ヲ爲シ前登記番號ヲ記載スルコトヲ要ス

前項ノ場合ニ於テハ表示欄及ヒ事項欄ニ移シタル登記ノ末尾ニ何船舶籍港ノ登記簿ニ依リ登記ヲ

移シタル旨及申請書受附ノ年月日ヲ記載シ登記官吏捺印スルコトヲ要ス

登記簿ニ登記ヲ移シタルトキハ前登記用紙ヲ閉鎖スルコトヲ要ス

第二十五條 船舶所有者ガ船舶籍港ヲ甲登記所ノ管轄地ヨリ乙登記所ノ管轄地ニ移シタルトキハ舊船舶籍港ノ登記簿及ヒ其附屬書類ノ謄本ノ交附ヲ甲登記所ニ申請シ其謄本ヲ乙登記所ニ提出シテ登記ヲ申請スルコトヲ要ス

前條第二項第三項及ヒ不動産登記法第九條第二項但書ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第二十六條 船舶管理人ノ更迭ノ登記ハ所有權ノ登記名義人ヨリ之ヲ申請スルコトヲ要ス

不動産登記法第五十八條ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第二十七條 船舶管理人ノ表示ノ變更ノ登記ハ本人ヨリ之ヲ申請スルコトヲ要ス

不動産登記法第四十三條及ヒ第五十八條ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第二十八條 所有權ノ移轉ノ登記ヲ爲シタル場合ニ於テ其移轉ノ結果ニ因リ共有ガ消滅スヘキトキハ船舶管理人ノ登記ヲ抹消スルコトヲ要ス

第二十九條 未登記ノ船舶所有權ノ變更又ハ處分ノ制限ノ登記ハ之ヲ命スル裁判ニ依リテ自己ノ權利ヲ證スル者ヨリ之ヲ申請スルコトヲ得

不動産登記法第二百二十九條ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第三十條 左ノ場合ニ於テハ所有權ノ登記名義人ハ申請書ニ事由ヲ記載シテ登記ノ抹消ヲ申請スルコトヲ要ス

一 船舶ガ滅失又ハ沈没シタルトキ

二 船舶ガ解散セラレタルトキ

三 船舶ノ存否カ六個月間分明ナラサルトキ
 四 船舶ガ日本ノ國籍ヲ喪失シタルトキ
 前項ノ場合ニ於テハ其事實ヲ證スル官吏又ハ公吏ノ書面ヲ添附スルコトヲ要ス
 第三節 抵當權及ヒ貸借權ニ關スル登記手續
 第三十一條 登記官吏ガ抵當權ノ登記ヲ完了シタルトキハ登記證書ニ不動産登記法第一百七七號ニ掲ゲタル事項ヲ記載スルコトヲ要ス

第三十二條 製造中ノ船舶ノ抵當權ノ登記ハ製造地ヲ管轄スル登記所ニ之ヲ爲スコトヲ要ス
 第三十三條 製造中ノ船舶ノ抵當權ノ登記ヲ申請スル場合ニ於テハ申請書ニ左ノ事項ヲ記載シ申請人之ニ署名捺印スルコトヲ要ス

- 一 船舶ノ種類
- 二 龍骨ノ長サ若シ船舶ガ石數ヲ以テ積量ヲ表示スルモノナルトキニハ船ノ長サ
- 三 計畫ノ幅及ヒ深サ
- 四 計畫ノ積量
- 五 製造地
- 六 造船者ノ氏名、住所若シ造船者ガ法人ナルトキハ其名稱及ヒ事務所
- 七 不動産登記法第三十六號第三號乃至第八號ニ掲ケタル事項

第三十四條 製造中ノ船舶ノ抵當權ノ登記ヲ申請スル場合ニ於テハ申請書ニ前條第一號乃至第六號ニ掲ケタル事項ヲ證スル造船者ノ書面ヲ添付スルコトヲ要ス
 第三十五條 製造中ノ船舶ノ抵當權ノ登記ハ特別登記簿ニ之ヲ爲スコトヲ要ス

第三十六條 特別登記簿ニ抵當權ノ登記ヲ爲スコキハ登記用紙中登記番號欄ニ番號ヲ記載シ、表示欄ニ第三十三條第一號乃至第六號ニ掲ケタル事項ヲ記載シ且甲區事項欄ニ登記義務者ノ氏名、住所及ヒ抵當權ノ登記ノ申請ニ因リテ登記ヲ爲ス旨ヲ記載スルコトヲ要ス
 第三十七條 製造中ニ抵當權ノ登記アリタル船舶ノ所有權ノ登記ヲ爲ス場合ニ於テ船籍港カ抵當權ノ登記ヲ爲シタル登記所ノ管轄ニ屬スルトキハ所有權ノ登記ヲ爲シタル後其登記用紙ニ抵當權ノ登記ヲ移スコトヲ要ス

抵當權ノ登記ヲ移スコキハ其登記ノ末尾ニ特別登記簿ニ依リテ登記ヲ移シタル旨及ヒ其年月日ヲ記載シ登記官吏捺印スルコトヲ要ス
 抵當權ノ登記ヲ移シタルトキハ之ニ關スル特別登記簿ノ用紙ヲ閉鎖スルコトヲ要ス
 第三十八條 製造中ニ抵當權ノ登記アリタル船舶ノ所有權ノ登記ヲ爲ス場合ニ於テ船籍港カ抵當權ノ登記ヲ爲シタル登記所ノ管轄ニ屬セサルトキハ申請書ニ特別登記簿ノ謄本ヲ添付スルコトヲ要ス

前項ノ場合ニ於テハ登記官吏ハ特別登記簿ノ謄本ニ依リ登記簿ニ抵當權ノ登記ヲ移スコトヲ要ス
 前條第二項ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス
 前登記所カ特別登記簿ノ謄本ヲ交付シタルトキハ其用紙ヲ閉鎖スルコトヲ要ス

第三十九條 船長カ商法第五百六十八條第一項第一項ノ規定ニ從ヒテ設定シタル抵當權ノ登記ハ日本ニ於テハ其契約ヲ爲シタル港ヲ管轄スル登記所、外國ニ於テハ最近ノ日本領事館ヲ以テ管轄登記所トス

第四十條 船長カ前條ノ登記ヲ申請スル場合ニ於テハ申請書ニ船舶ヲ抵當ト爲シタル事由ヲ記載スルコトヲ要ス

第四十一條 第三十九條ノ登記ハ特別登記簿ニ之ヲ爲スコトヲ要ス

第四十二條 特別登記簿ニ登記ヲ爲スコトキハ登記用紙中登記番號欄ニ番號ヲ記載シ表示欄ニ船舶ノ種類、名稱並ニ積量及ヒ船籍港ヲ記載シ且甲區一項欄ニ船舶所有者ノ氏名、住所及ヒ抵當權ノ登記ノ申請ニ因リテ登記ヲ爲ス旨ヲ記載スルコトヲ要ス

第四十三條 第三十九條ノ登記ヲ爲ス場合ニ於テ代理權ヲ證スル書面カ船中ニ備ヘ置クヘキモノナルトキハ登記官吏ハ登記完了ノ後之ヲ還附スルコトヲ要ス

第四十四條 第三十九條ニ定メタル登記所ハ登記ヲ爲シタル後遲滞ナク船籍港ヲ管轄スル登記所ニ特別登記簿ノ謄本ヲ移送シ其用紙ヲ閉鎖スルコトヲ要ス

第四十五條 特別登記簿ノ謄本ヲ移送ヲ受ケタル登記所ハ其謄本ニ依リ登記簿ニ登記ヲ移シ其末尾ニ特別登記簿ノ謄本ニ依リテ登記ヲ移シタル旨及ヒ其年月日ヲ記載シ登記官吏捺印スルコトヲ要ス

登記官吏カ登記證書ニ依リ商法第五百六十八條第一項第一號ノ規定ニ從ヒテ設定シタル抵當權アルコトヲ知リタルトキハ前項ノ登記ヲ爲スマテ登記簿ニ他ノ登記ヲ爲スコトヲ得ス此場合ニ於テ登記ノ申請アリタルトキハ其登記ハ特別登記簿ニ之ヲ爲スコトヲ要ス

第四十六條 登記官吏カ賃借權ノ登記ヲ完了シタルトキハ登記證書ニ不動産登記法第二百二十七條第一項ニ揭ケタル事項ヲ記載スルコトヲ要ス

第四十七條 既登記ノ船舶ニ關スル未登記ノ抵當權又ハ賃借權ノ變更又ハ成分ノ制限ノ登記ハ之ヲ命スル裁判ニ依リテ自己ノ權利ヲ證スル者ヨリ之ヲ申請スルコトヲ得

第四十八條 此規則ハ商法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

第四十九條 不動産登記法第六十二條ノ規定ハ明治十年第二十八號布告ニ從ヒテ公證ヲ經タル證書面ノ權利ニ之ヲ準用ス

第五十條 不動産登記法第六十三條ノ規定ハ此規則施行前ニ登記シタル船舶ニ付キ此規則施行ノ後登記ノ申請アリタル場合ニ之ヲ準用ス但登記用紙中表示欄ニ移スヘキ船舶ノ表示ハ第十六條ノ規定ニ依リテ之ヲ爲スコトヲ要ス

第五十一條 船舶法第二十條ニ掲ケタル船舶ニ非スシテ此規則施行前ニ登記セザリシ船舶ニ付テハ船舶法第四條ノ規定ニ依リテ其積量ノ測定ヲ受ケルマテハ舊法ノ規定ニ依リテノミ登記ヲ爲スコトヲ得但賃借權ノ登記ニ付テハ舊登記用紙ニ丁區事項欄ヲ追加シ之ニ關シテハ此規則ノ規定ヲ適用ス

第五十二條 船舶法第二十條ニ掲ケタル船舶ニ付キ此規則施行前ニ爲シタル登記アルトキハ此規則施行ノ後ト雖モ舊法ノ規定ニヨリテ其登記ノ變更又ハ抹消ヲ申請スルコトヲ得

前項ノ船舶ノ所有權カ移轉シタルトキハ其船舶ニ付キ此規則施行前ニ爲シタル質入又ハ書入ノ登記アル場合ニ限リ此規則施行ノ後ト雖モ所有權移轉ノ登記ヲ申請スルコトヲ得

前二項ニ定メタル申請アリタルトキハ登記官吏ハ舊法ノ規定ニ依リ舊登記簿ニ其登記ヲ爲スコトヲ要ス

第五十三條 此規則ハ施行ニ關スル細則ハ主務大臣之ヲ定ム

船舶登記取扱手續 (明治三十二年六月司法省令第三十五號)

船舶登記取扱手續左ノ通相定ム

船舶登記取扱手續

- 第一條 船舶登記簿ハ附錄第一號雜形ニ依リ地方裁判所ニ於テ之ヲ調製スヘシ
- 第二條 船舶共同人名簿ハ附錄第二號雜形ニ依リ地方裁判所ニ於テ之ヲ調製スヘシ
- 第三條 船舶特別登記簿ハ附錄第一號雜形ニ準シ船舶特別共同人名簿ハ附錄第二號雜形ニ準シ地方裁判所ニ於テ之ヲ調製スヘシ
- 第四條 船舶登記見出帳ハ附錄第三號雜形ニ依リ之ヲ調製スヘシ
- 第五條 船舶登記見出帳ニハイロハ順ニ依リ豫メイノ部ヨリスノ部マテテ置キ登記用紙ニ登記番號ヲ記載スル毎ニ其船名ノ頭字ニ依リ相當ノ部ニ船舶ノ名稱 登記用紙ヲ綴綴セル登記簿ノ冊數 丁數及ヒ登記番號ヲ記入スヘシ
- 第六條 受附帳ハ附錄第四號雜形ニ依リ毎年之ヲ調製スヘシ
- 第七條 登記證書ハ附錄第五號雜形ノ用紙ヲ以テ之ヲ作ル
- 第八條 船舶所有者ハ其本籍地又ハ所在地ノ市 區 町村長(市 區 町村長ナキ地ニ於テハ其職務ヲ行フ使員)ノ證明ヲ得タル印鑑ヲ船舶港ヲ管轄スル登記所ニ提出スヘシ改印ヲ爲シタルトキ亦同シ但不動産ノ登記ニ關シ其登記所ニ印鑑ヲ提出シタル者ハ此限ニ在ラス

船舶ヲ所有スル法人ノ代表者ハ法人ノ登記ニ關シ印鑑ヲ提出シタル登記所ノ證明ヲ得タル印鑑ヲ船舶港ヲ管轄スル登記所ニ提出スヘシ但法人ノ登記ニ關シ印鑑ヲ提出シタル登記所ト船舶港ヲ管轄スル登記所ト同一ナルトキハ此限ニ在ラス

第九條 印鑑ハ附錄第六號雜形ニ依リ之ヲ調製スヘシ

第十條 第八條ノ規定ハ官廳又ハ公署ニハ之ヲ適用セス

第十一條 登記所ニハ登記簿、共同人名簿、見出帳及ヒ受附帳ノ外左ノ帳簿ヲ備フ

- 一 謄本抄本交付帳
- 二 登記證書交付帳
- 三 申請書囑託書通知書附屬書類綴込帳 (明治三十二年七月司法省令第十五號ヲ以テ本號ヲ改メ)
- 四 受領證原符元帳
- 五 各種通知簿
- 六 登記立會調書綴込帳
- 七 決定原本綴込帳
- 八 登記簿謄本綴込帳
- 九 船舶異動通知書綴込帳
- 十 船舶登記簿通知簿
- 十一 抗告書類綴込帳

十二 本登記簿交付帳

十三 印鑑簿

十四 印鑑證明書綴込帳 (同上法令ヲ以テ本號ヲ加フ)

十五 還納受領證綴込帳 (同上)

第十一條ノ二 前條第一號乃至第十二號第十四號及ヒ第十五號ノ帳簿ハ一ヶ年毎ニ別冊ト爲スヘシ (同上法令ヲ以テ本條ヲ加フ)

第十二條 登記簿謄本ノ交付又ハ登記簿若クハ附屬書類ノ閱覽ヲ請求スル場合ニ於テハ其申請書ニ左ノ事項ヲ記載シ申請人署名捺印スヘシ但閱覽ヲ請求スル申請書ニハ利害ノ關係アル理由ヲ記載シ又ハ其事由ヲ記載シタル書面ヲ添付スヘシ

一 船舶ノ種類及ヒ名稱

二 船籍港

三 手数料ノ金額

四 登記所ノ表示

五 年月日

第十三條 登記簿謄本ノ交付ヲ請求スル場合ニ於テハ其申請書ニ前條ニ掲ケタル事項ノ外抄本ノ交付ヲ請求スル部分ヲ記載シ申請人署名捺印スヘシ

第十四條 登記簿ノ謄本ハ登記簿ト同一様式ノ用紙ヲ以テ之ヲ作り其末尾ニ左ノ認證文ヲ記載シタルモノヲ添付シテ契印ヲ爲シ登記官吏之ニ年月日ヲ記載シテ署名捺印シ且登記所ノ印ヲ押捺スヘシ

此謄本ハ何船籍港ノ登記簿ニ依リ之ヲ作り茲ニ登記簿ト相違ナキコトヲ認證スル前項ノ規定ハ登記簿ノ抄本ニ之ヲ準用ス但抄本用紙ハ美濃紙ヲ用ユヘシ

第十四條ノ二 印鑑簿ハ永久ニ之ヲ保存スヘシ (同上)

受附帳、登記立會調書綴込帳、登記簿謄本綴込帳及ヒ船舶異動通知書綴込帳ハ十年間之ヲ保存スヘシ

決定原本綴込帳、抗告書類綴込帳及ヒ印鑑證明書綴込帳ハ五年間之ヲ保存スヘシ

謄本抄本交付帳、登記證書交付帳、受領證原符元帳、各種通知簿、船舶登記簿通知簿、本登記簿交付帳及ヒ還納受領證綴込帳ハ三年間之ヲ保存スヘシ

前三項ノ帳簿ノ保存期間ハ當該年度ノ翌年ヨリ之ヲ起算ス

第十五條 登記ヲ申請スルニハ申請書ニ其登記ヲ申請スルニ必要ナル事項ノ外登録税額ヲ記載スヘシ但登録税法第三條第一項第一號乃至第十號ノ登記ニ付テハ課税標準ノ價格ヲモ記載スヘシ

第十六條 登記原因及ヒ登記ノ目的カ同一ニシテ且登録税法第三條第一項第七號乃至第十號ノ四號但書及ヒ第十五號但書ノ規定ニ依リ登録税ヲ納付スヘキ場合ニ於テ數箇ノ登記所ノ管轄内ニ在ル數箇ノ船舶ニ關スル權利ノ登記ヲ申請スルトキハ最初ニ登記ヲ申請スル登記所ニ登録税ノ全額ヲ納付スヘシ (明治三十六年十月司法省令第三十六號ヲ以テ本條ヲ改ム)

前項ノ規定ニ從ヒ登録税ヲ納付シタル時ニ登記官吏ハ登記ヲ申請スヘキ登記所ノ數ニ應ジ登録税ノ受領證ヲ申請人ニ交付スヘシ但三通以上ノ受領證ヲ交付スルトキハ各通ニ番號ヲ附スヘシ

申請人カ他ノ登記所ニ登記ヲ申請スルニハ申請書ニ受領證書ヲ添付スヘシ

第十七條 船舶登記規則第十條第一項ノ規定ニ依リ登記證書ノ交付ヲ申請スル場合ニ於テハ申請

書ニ裁判ノ謄本ヲ添附スルハシ
 第十八條 登記證書ヲ交付スルトキハ登記證書交付帳ニ登記番號、船舶ノ種類、名稱並ニ船籍港、交付ノ年月日及ビ申請人ノ氏名ヲ記載シ登記證書ト契印スヘシ
 第十九條 船舶登記規則第三條第一項ノ通知ニハ船舶ノ種類、名稱、積量、船籍港、申請書受附ノ年月日、登記ノ目的及ビ申請人ノ氏名、住所ヲ記載スヘシ
 第二十條 船舶登記規則第三條第二項ノ規定ニ依リ管海官廳ヨリ受ケタル通知書ハ登記簿ヲ分設シタル區畫ニ從ヒ之ヲ編綴シ丁數ヲ附スヘシ假便宜ニ依リ之ヲ合綴スルコトヲ得
 前項ノ手續ヲ爲シタルトキハ見出帳中相當欄ニ其通知書ヲ編綴セル船舶異動通知書綴込帳ノ冊數及ビ丁數ヲ記入スヘシ
 第二十一條 管海官廳ヨリ異動ノ通知ヲ受ケタル船舶ニ付キ其異動ニ關シ變更登記ヲ爲シタルトキハ見出帳中其異動ニ關シ船舶異動通知書ノ冊數、丁數欄ニ爲シタル記入ヲ朱抹スヘシ
 第二十二條 登記番號ハ船舶登記規則施行ノ日ヨリ更ニ新ナル番號ヲ附スヘシ
 第二十三條 船舶登記規則第五十一條第一項但書ノ規定ニ依リ舊登記簿用紙ニ丁區事項欄ヲ追加スル場合ニ於テハ舊登記用紙中丙區ノ左側ニ附錄第一號雛形中丁區事項欄ノ部分ト同一ノ用紙ヲ貼附シ登記官吏契印スヘシ
 第二十四條 不動産登記法施行細則第二條第二項第三項第四條第五條第十條第十二條第十三條第十五條第十七條第十八條第二十條第二十四條第二十七條第二十九條第三十三條第三十四條第三十六條第三十七條第三十九條第四十條第四十五條乃至第四十七條第四十九條第五十一條乃至第六十條第六十四條乃至第六十七條第六十九條乃至第七十六條及ビ商業登記取扱手續第十三條

條第四十六條ノ規定ハ船舶ノ登記ニ之ヲ準用ス
 (附錄第一號乃至第五號ハ之ヲ略ス)
 附錄第六號 (用紙厚紙五寸横一寸)

郡市町村番地	氏名
印	何年何月生

(注意) 法人ノ代表者ナルトキハ氏名ノ肩ニ事務所又ハ營業所ノ所在地、法人ノ名稱並ニ代表者ノ資格ヲ記載スヘシ

船籍港カ數箇ノ登記所ノ管轄地ニ跨カル時船舶登記

ノ事務ヲ取扱フ登記所 (明治三十二年七月司法省令第三十九號)

船籍港カ數箇ノ登記所ノ管轄地ニ跨カルトキハ其船舶登記ノ事務ハ商業登記ニ付委任シタル登記所ニ於テ之ヲ取扱フ

船舶登記簿ノ謄本又ハ抄本ノ請求等ニ關スル手数料

船舶登記簿ノ謄本又ハ抄本ノ請求等ニ關スル手数料左ノ通相定ム
(明治三十二年六月司法省令第三十七號)

第一條 船舶登記簿ノ謄本又ハ抄本ノ交付ヲ請求スル者ハ其用紙一枚ニ付キ手数料金拾錢ヲ納ム
ヘシ但シ一枚ニ滿タサルモノト雖モ仍ホ之ヲ一枚ニ計算ス

第二條 船舶登記簿又ハ其附屬書類ノ閱覽ヲ請求スル者ハ手数料金拾錢ヲ納ムヘシ

第三條 船舶登記規則第十條第二項ノ規定ニ依リ登記證書ノ交付ヲ請求スル者ハ手数料金五拾錢
ヲ納ムヘシ

第四條 特別登記簿ニ船舶ニ關スル登記ナキコトヲ證明ヲ請求スル者ハ每一件手数料金拾錢ヲ納
ムヘシ

第五條 手数料ハ收入印紙ヲ申請書ニ貼附シテ之ヲ納ムヘシ

第六條 第一條乃至第四條ノ規定ハ官吏又ハ公吏ガ政府ノ利益ノ爲メ其職務ヲ以テ請求ヲ爲ス場
合ニハ之ヲ適用セス

第七條 本令ハ船舶登記規則施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

船舶ノ登記ニ關スル件明治三十九年法律第三十一號第一條及第二條ニ依リ勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ公
布ス

船舶ノ所有權、抵當權及賃借權ニ關スル登記ニ付テハ船舶登記規則ニ依リ地方法院其ノ出張所又
ハ登記所ヲシテ之ヲ取扱ハシム

附則
本令ハ明治四十一年十月一日ヨリ之ヲ施行ス

船舶ノ登記ニ關スル取扱手續

(明治四十一年九月臺灣總督府令第四十九號)

明治四十一年律令第十二號ニ依リ船舶ノ登記ニ關スル取扱手續ハ明治三十二年六月司法省令第三
十五號船舶登記取扱手續ニ依ル但シ同手續中地方裁判所ノ職務ハ覆審法院之ヲ行フ
本令ハ船舶ノ登記ニ關スル律令施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

船舶登記簿ノ謄本抄本ノ交附、船舶登記簿ノ閱覽等

ニ關スル手数料ノ件 (明治四十一年九月臺灣總督府令第五十號)

船舶登記簿ノ謄本、抄本ノ交付船舶登記簿又ハ其ノ附屬書類ノ閱覽若ハ登記證書ノ交付及特別登
記簿ニ船舶ニ關スル登記ナキコトノ證明ヲ請求スル者ハ明治三十二年(六月)司法省令第三十七號
船舶登記簿ノ謄本抄本等ノ請求ニ關スル規定ニ依リ手数料ヲ納ムヘシ
本令ハ船舶ニ關スル登記取扱手續施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

民事訴訟法

前 類 卷 第 一 冊

民事訴訟法之研究 第一卷 第一冊
第一章 總論
第二章 訴訟行為
第三章 訴訟標的
第四章 當事人
第五章 訴訟費用
第六章 裁判
第七章 執行
第八章 附屬程序
第九章 特別程序
第十章 終局裁判
第十一章 訴訟上之和解
第十二章 訴訟上之調解
第十三章 訴訟上之調停
第十四章 訴訟上之調解
第十五章 訴訟上之調停
第十六章 訴訟上之調解
第十七章 訴訟上之調停
第十八章 訴訟上之調解
第十九章 訴訟上之調停
第二十章 訴訟上之調解
第二十一章 訴訟上之調停
第二十二章 訴訟上之調解
第二十三章 訴訟上之調停
第二十四章 訴訟上之調解
第二十五章 訴訟上之調停
第二十六章 訴訟上之調解
第二十七章 訴訟上之調停
第二十八章 訴訟上之調解
第二十九章 訴訟上之調停
第三十章 訴訟上之調解
第三十一章 訴訟上之調停
第三十二章 訴訟上之調解
第三十三章 訴訟上之調停
第三十四章 訴訟上之調解
第三十五章 訴訟上之調停
第三十六章 訴訟上之調解
第三十七章 訴訟上之調停
第三十八章 訴訟上之調解
第三十九章 訴訟上之調停
第四十章 訴訟上之調解
第四十一章 訴訟上之調停
第四十二章 訴訟上之調解
第四十三章 訴訟上之調停
第四十四章 訴訟上之調解
第四十五章 訴訟上之調停
第四十六章 訴訟上之調解
第四十七章 訴訟上之調停
第四十八章 訴訟上之調解
第四十九章 訴訟上之調停
第五十章 訴訟上之調解
第五十一章 訴訟上之調停
第五十二章 訴訟上之調解
第五十三章 訴訟上之調停
第五十四章 訴訟上之調解
第五十五章 訴訟上之調停
第五十六章 訴訟上之調解
第五十七章 訴訟上之調停
第五十八章 訴訟上之調解
第五十九章 訴訟上之調停
第六十章 訴訟上之調解
第六十一章 訴訟上之調停
第六十二章 訴訟上之調解
第六十三章 訴訟上之調停
第六十四章 訴訟上之調解
第六十五章 訴訟上之調停
第六十六章 訴訟上之調解
第六十七章 訴訟上之調停
第六十八章 訴訟上之調解
第六十九章 訴訟上之調停
第七十章 訴訟上之調解
第七十一章 訴訟上之調停
第七十二章 訴訟上之調解
第七十三章 訴訟上之調停
第七十四章 訴訟上之調解
第七十五章 訴訟上之調停
第七十六章 訴訟上之調解
第七十七章 訴訟上之調停
第七十八章 訴訟上之調解
第七十九章 訴訟上之調停
第八十章 訴訟上之調解
第八十一章 訴訟上之調停
第八十二章 訴訟上之調解
第八十三章 訴訟上之調停
第八十四章 訴訟上之調解
第八十五章 訴訟上之調停
第八十六章 訴訟上之調解
第八十七章 訴訟上之調停
第八十八章 訴訟上之調解
第八十九章 訴訟上之調停
第九十章 訴訟上之調解
第九十一章 訴訟上之調停
第九十二章 訴訟上之調解
第九十三章 訴訟上之調停
第九十四章 訴訟上之調解
第九十五章 訴訟上之調停
第九十六章 訴訟上之調解
第九十七章 訴訟上之調停
第九十八章 訴訟上之調解
第九十九章 訴訟上之調停
第一百章 訴訟上之調解

目次

第一編 民事訴訟法附同施行條例

民事訴訟法	一
第一編 總則	一
第一章 裁判所	一
第一節 裁判所ノ事物ノ管轄	一
第二節 裁判所ノ土地ノ管轄	三
第三節 管轄裁判所ノ指定	五
第四節 裁判所ノ管轄ニ付テノ合意	六
第五節 裁判所職員ノ除斥及ヒ忌避	六
第六節 檢事ノ立會	八
第二章 當事者	九
第一節 訴訟能力	九
第二節 共同訴訟人	一〇
第三節 第三者ノ訴訟參加	一〇
第四節 訴訟代理人及ヒ輔佐人	一四
第五節 訴訟費用	一七
第六節 保證	二〇

第七節 訴訟上ノ救助.....二二

第三章 訴訟手續.....二三

第一節 口頭辯論及ヒ準備書面.....二三

第二節 送達.....三〇

第三節 期日及ヒ期間.....三四

第四節 懈怠ノ結果及ヒ原狀回復.....三七

第五節 訴訟手續ノ中斷及ヒ中止.....三八

第二編 第一審ノ訴訟手續.....四〇

第一章 地方裁判所ノ訴訟手續.....四〇

第一節 判決前ノ訴訟手續.....四〇

第二節 判決.....四七

第三節 闕席判決.....五一

第四節 計算事件、財産分別及ヒ此ニ類スル訴訟ノ準備手續.....五四

第五節 證據調ノ總則.....五六

第六節 人證.....五八

第七節 鑑定.....六六

第八節 書證.....六八

第九節 檢證.....七三

第十節 當事者本人ノ訊問.....七三

第十一節 證據保全.....七四

第二章 區裁判所ノ訴訟手續.....七六

第一節 通常ノ訴訟手續.....七六

第二節 督促手續.....七七

第三編 上訴.....八〇

第一章 控訴.....八〇

第二章 上告.....八六

第三章 抗告.....九〇

第四編 再審.....九三

第五編 證書訴訟及ヒ爲替訴訟.....九七

第六編 強制執行.....九九

第一章 總則.....九九

第二章 金錢ノ債權ニ付テノ強制執行.....一〇四

第一節 動産ニ對スル強制執行.....一〇五

第一款 通則.....一一五

第二款 有體動産ニ對スル執行.....一一五

第三款 債權及ヒ他ノ財産權ニ對スル強制執行.....一二一

第四款 配當手續.....一二七

第二節 不動産ニ對スル強制執行.....一二九

第一款 通則 一二九

第二款 強制競賣 一三〇

第三款 強制管理 一四四

第三節 船舶ニ對スル強制執行 一四七

第三章 金錢ノ支拂ヲ目的トセサル債權ニ付テノ強制執行 一四九

第四章 假差押及ヒ假處分 一五〇

第七篇 公示催告手續 一五五

第八編 仲裁手續 一五九

民事訴訟法施行條例

一六三

第二編 民事訴訟ニ關スル法規

第一章 訴訟上國ノ代表者

民事訴訟法第十四條ニ因リ國ヲ代表スル者 一六五

同上 一六六

同上 一六六

同上 一六六

同上 一六六

同上 一六六

同上 一六七

同上 一六七

同上 一六七

同上 一六七

同上 一六七

同上 一六八

同上 一六八

同上 一六八

臺灣總督府各官廳ノ民事訴訟ニ關シ國ヲ代表スルノ件 一六八

同上法令ニ依リ國ヲ代表スル官署 一六九

同上 一六九

統監府及所屬官署民事訴訟上國ヲ代表スルノ件 一七〇

同上法令ニ依リ國ヲ代表スル官署 一七〇

關東都督府及所屬官署ノ民事訴訟ニ關シ國ヲ代表スルノ件 一七〇

同上法令ニ依リ國ヲ代表スル官署 一七一

第二章 訴訟用印紙 一七一

民事訴訟用印紙法 一七一

第三章 送達

一七一

訴訟書類郵便送達手續料……………一七六
民事訴訟法第五百三十二條第五百三十三條ニ依リテ爲ス送達ノ囑託手續準備方……………一七七

第四章 上告換納金

民事上告換納金規則……………一七七

第五章 訴訟費用

民事訴訟費用法……………一七八

第六章 特別則

第一節 臺灣ニ於ケル特別則

民事訴訟特別手續……………一八〇

民事上ノ訴ニシテ明治二十八年五月八日以前ニ訴權ノ發生シタルモノノ受理……………一八三

民事訴訟用印紙規則……………一八三

第二款 訴訟用印紙

民事訴訟用印紙規則……………一八三

同 施行細則……………一八六

第三款 爭訟調停

廳長ヲシテ民事爭訟調停等ヲ取扱ハシムル件……………一八八

同 施行細則……………一八九

民事爭訟調停及其執行ヲ取扱ハシムル廳長指定……………一九三

民事爭訟調停費用規則……………一九三

同……………一九三

民事訴訟費用規則……………一九四

同……………一九四

關東州民事訴訟用印紙規則……………一九六

同……………一九六

關東州民事訴訟用印紙規則……………一九六

同……………一九六

第三編 家資分散

家資分散法……………一九七

華族及華族ノ子弟「身代限」處分濟ノ上ハ宮内省華族局へ通牒方……………一九七

裁判所ニ於テ「身代限」又ハ相當物公賣處分ヲ爲ス時及其處分ヲ取消ス時登記所……………一九八

三通知セシム……………一九八

裁判所ニ於テ「身代限」處分又ハ抵當物公賣處分ノ末落札セシキ登記所ニ通知方……一九八

第四編 人事訴訟手續

人事訴訟手續法

一九九

第一章 婚姻事件及養子縁組事件ニ關スル手續……一九九

第二章 親子關係事件、相續人廢除事件及隱居事件ニ關スル手續……二〇四

第三章 禁治產及準禁治產ニ關スル手續……二〇六

第四章 失踪ニ關スル手續……二一〇

附則……二一二

人事訴訟手續法第一條第三項ノ場合ニ於ケル住所ノ件……二一二

同上……二一三

人事訴訟手續法第三章ノ規定ニ依リテ爲スヘキ公告方法……二二三

同上……二二三

同……二二三

同……二二三

第三編 民事訴訟法

第一編 民事訴訟法及同施行條例

民事訴訟法

(明治三十三年三月法律第三十九號)

朕民事訴訟法ヲ裁可シ之レチ公布セシム此法律ハ明治三十四年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命
ス

民事訴訟法

第一編 總則

第一章 裁判所

第一節 裁判所ノ事物ノ管轄

第一條 裁判所ノ事物ノ管轄ハ裁判所構成法ノ規定ニ從フ

第二條 訴訟物ノ價額ニ依リ管轄ノ定マルトキハ以下數條ノ規定ニ從フ

第三條 訴訟物ノ價額ハ起訴ノ日時ニ於ケル價額ニ依リ之ヲ算定ス

果實、損害賠償及ヒ訴訟費用ハ法律上相牽連スル主タル請求ニ附帶シ一ノ訴ヲ以テ請求スルト
キハ之ヲ算入セス

第四條 一ノ訴ヲ以テ數箇ノ請求ヲ爲ストキハ前條第二項ニ掲グルモノヲ除ク外其額ヲ合算ス

本訴ト反訴トノ訴訟物ノ價額ハ之ヲ合算セス

第五條 訴訟物ノ價格ハ左ノ方法ニ依リ之ヲ定ム

第一 債權ノ擔保又ハ債權ノ擔保ヲ爲スタル物權ノ訴訟物ナルトキハ其債權ノ額ニ依ル但物權ノ目的物ノ價額寡キトキハ其額ニ依ル

第二 地役カ訴訟物ナルトキハ要役地ノ地役ニ依リ得ル所ノ價額ニ依ル但地役ノ爲メ承役地ノ價額ノ減シタル額カ要役地ノ地役ニ依リ得ル所ノ價額ヨリ多キトキハ其減額ニ依ル

第三 貸貸借又ハ永貸借ノ契約ノ有無又ハ其時期ノ訴訟物ナルトキハ爭アル時期ニ當ル借賃ノ額ニ依ル但一個年借賃ノ二十倍ノ額カ右ノ額ヨリ寡キトキハ其二十倍ノ額ニ依ル

第四 定時ノ供給又ハ收益ニ付テハ權利カ訴訟物ナルトキハ一個年收入ノ二十倍ノ額ニ依ル但收入權ノ期限定マリタルモノニ付テハ其將來ノ收入ノ總額カ二十倍ノ額ヨリ寡キトキハ其額ニ依ル

第六條 訴訟物ノ價額ハ必要ナル場合ニ於テハ第三條乃至第五條ノ規定ニ從ヒ裁判所ノ意見ヲ以テ之ヲ定ム

裁判所ハ申立ニ因リ證據調ヲ命シ又ハ職權ヲ以テ檢證若クハ鑑定ヲ命スルコトヲ得

第七條 地方裁判所ノ判決ニ對シテハ其事件カ區裁判所ノ事物ノ管轄ニ屬ス可キ理由ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第八條 事物ノ管轄ニ付キ區裁判所又ハ地方裁判所カ管轄違ナリト宣言シ其裁判確定シタルトキハ此裁判ハ後ニ其事件ノ繫屬ス可キ裁判所ヲ羈束ス

第九條 地方裁判所カ事物ノ管轄違ナリト宣言シテ訴ヲ却下スルトキハ原告ハ申立ニ因リ同時ニ判決ヲ以テ原告ノ指定シタル自己ノ管轄内ノ區裁判所ニ其訴訟ヲ移送ス可シ

區裁判所カ事物ノ管轄違ナリト宣言シテ訴ヲ却下スルトキハ同時ニ判決ヲ以テ其訴訟ヲ所屬ノ地方裁判所ニ移送ス可シ

移送ノ申立ハ判決ニ接著スル口頭辯論ノ終結前ニ之ヲ爲ス可シ

移送言渡ノ判決確定シタルトキハ其訴訟ハ移送ヲ受ケタル裁判所ニ繫屬スルモノト看做ス

第十條 人ノ普通裁判籍ハ其住所ニ依リテ定マル普通裁判籍アル地ノ裁判所ハ其人ニ對スル總テノ訴訟ニ付キ管轄ヲ有ス但訴ヲ付キ專屬裁判籍ヲ定メザル場合ニ限ル

第十一條 軍人ノ管轄ハ裁判籍ニ付テハ兵營地若クハ軍艦定繫所ヲ以テ住所トス但此規定ハ豫備後備ノ軍籍ニ在ル者及ヒ兵役義務履行ノ爲メノ三服役スル軍人ノ軍屬ニ之ヲ適用セス

第十二條 外國ニ在ル本邦ノ公使及ヒ公使館ノ官吏並ニ其家族、從者ノ裁判籍上ノ住所ハ本邦ニ於テ本人ノ最後ニ存セシ住所ナリトス此住所ナキモノニ付テハ司法大臣ノ命令ヲ以テ豫メ定ム

第十三條 內國ニ住所有セサル者ハ普通裁判籍ハ本人ハ現在地ニ依リテ定マル若シ其現在地ノ知レサルカ又ハ外國ニ在ルトキハ其最後ニ有セシ內國ノ住所ニ依リテ定マル

第十四條 國ノ普通裁判籍カ訴訟ニ付キ國代表スル官廳ノ所在地ニ依リテ定マル但訴訟ニ付キ國代表スルニ付テハ規定ハ勅令大以テ之ヲ定ム

公又ハ私人及ヒ其資格ニ於テ訴訟ヲ受ルモノト爲テ得ル會社其他ノ社團又ハ財團等ノ普通裁判

籍ハ其所在地ニヨリテ定マル此所在地ハ別段ノ定ナキトキハ事務所所在ノ地トス若シ事務所ナキトキ又ハ數所ニ於テ事務ヲ取扱フトキハ其首長又ハ事務擔當者ノ住所ヲ以テ事務所ト看做ス

第十五條 生徒、雇人、營業使用人、職工、習業者其他性質上一定ノ地ニ永ク寓在スヘキ者ニ對スル財產權上ノ請求ニ付テノ訴ハ其現在地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

兵役義務履行ノ爲メノミニ服役スル軍人、軍屬ニ對シテハ其兵營地若クハ軍艦定鑿所ノ裁判所ニ前項ノ訴ヲ起スコトヲ得

第十六條 製造、商業其他ノ營業ニ付キ直接ニ取引ヲ爲ス店舗ヲ有スル者ニ對シテハ其店舗所在地ノ裁判所ニ營業上ニ關スル訴ヲ起スコトヲ得

前項ノ裁判籍ハ住家及ヒ農業用建物アル地所ヲ利用スル所有者、用益者又ハ貸借人ニ對スル訴ニ付テモ亦之ヲ適用ス但此訴カ地所ノ利用ニ付テノ權利關係ヲ有スルトキニ限ル

第十七條 內國ニ住所ヲ有セサル債務者ニ對スル財產權上ノ請求ニ付テノ訴ハ其財產又ハ訴ヲ爲シテ請求スル物ノ所在地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得債權ニ付テハ債務者(第三債務者)ノ住所ヲ以テ其財產ノ所在地トス又債權ニ付キ物ヲ擔保スル者ノ住所又ハ其物ノ所在地ヲ以テ財產ノ所在地トス

第十八條 契約ノ成立若クハ不成立ノ確定又ハ其履行若クハ銷除、廢罷、解除又ハ其不履行若クハ不十分ノ履行ニ關スル賠償ノ訴ハ其訴訟ニ係ル義務ヲ履行ス可キ地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

第十九條 會社其他ノ社團ヨリ社員ニ對シ又ハ社員ヨリ社員ニ對シ其社員タル資格ニ基ク請求ノ訴ハ其會社其他ノ社團ノ普通裁判籍アル地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

第二十條 不正ノ損害ノ訴ハ責任者ニ對シ其行為ノ有リタル地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

第二十一條 辯護士又ハ執達吏ノ手数料及ヒ立替金ニ付キ其委任者ニ對スル訴ハ訴訟物ノ價額ノ多寡ニ拘ハラズ本訴訟ノ第一審裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

第二十二條 不動産ニ付テハ其所在地ノ裁判所ハ總テ不動産上ノ訴殊ニ本權並ニ占有ノ訴及ヒ分割並ニ境界ノ訴ヲ專ラニ管轄ス

地役ニ付テノ訴ハ承役地所在地ノ裁判所專ラニ之ヲ管轄ス

第二十三條 不動産上ノ裁判籍ニ於テハ債權ノ擔保ヲ爲ス從タル物權ニ基ク不動産上ノ訴ニ附帶シテ同一被告ニ對スル債權ノ訴ヲ起スコトヲ得

不動産上ノ裁判籍ニ於テハ不動産ノ所有者若クハ占有者ニ對スル人權ノ訴又ハ不動産ニ加ヘタル損害ノ訴ヲ起スコトヲ得

第二十四條 相続權、遺贈其他死亡ニ因リテ效果ヲ生スル處分ニ基ク請求ノ訴ハ遺產者死亡ノ時普通裁判籍ヲ有セシ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

相続裁判籍ニ於テハ遺產債權者ヨリ遺產者又ハ相続人ニ對スル請求ノ訴ヲ起スコトヲ得但遺產ノ全部又ハ一分カ其裁判所ノ管轄區内ニ存在スルトキニ限ル

第二十五條 第二十二條ノ規定ヲ除ク外原告ハ數箇ノ管轄裁判所ノ中ニ就キ選擇ヲ爲スコトヲ得

第三節 管轄裁判所ノ指定

第二十六條 管轄裁判所ノ指定ハ裁判所構成法ニ定メタル場合ノ外尙ホ不動産上ノ裁判籍ニ訴ヲ起ス可キ場合ニ於テ不動産カ數箇ノ裁判所ノ管轄區内ニ散在スルトキモ亦之ヲ爲ス

第二十七條 管轄裁判所ノ指定ニ付キ申請ヲ爲ス場合及ヒ其決定ヲ爲ス裁判所ハ裁判所構成法第

十條ノ規定ニ從フ
第二十八條 管轄裁判所ノ指定ニ付テノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ其申請ニ付キ管轄權ヲ有スル裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得

右裁判所ハ口頭辯論ヲ經スシテ其申請ヲ決定ス
管轄裁判所ヲ決定メタル決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第四節 裁判所ノ管轄ニ付テノ合意

第二十九條 第一審裁判所ハ當然管轄權ヲ有セサルモ當事者ノ合意ニ因リ管轄權ヲ有ス但書面ヲ以テ合意ヲ爲シ且其合意ガ一定ノ權利關係及ヒ其權利關係ヨリ生スル訴訟ニ係ルトキニ限ル
第三十條 被告カ管轄違ノ申立ヲ爲サスシテ本案ノ口頭辯論ヲ爲ストキハ亦前條ト同一ノ效力ヲ生ス

第三十一條 左ノ場合ニ於テハ第二十九條及ヒ第三十條ノ規定ヲ適用セス
第一 財産權上ノ請求ニ非サル訴訟ニ係ルトキ

第二 專屬管轄ニ屬スル訴訟ナルトキ

第五節 裁判所職員ノ除斥及ヒ忌避

第三十二條 判事ハ左ノ場合ニ於テ法律ニ依リ其職務ノ執行ヨリ除斥セラル可シ

第一 判事又ハ其婦カ原告若クハ被告タルトキ又ハ訴訟ニ係ル請求ニ付キ當事者ノ一方若クハ雙方ト共同權利者ノ共同義務者若クハ償還義務者タル關係ヲ有スルトキ

第二 判事又ハ其婦カ當事者ノ一方若クハ雙方又ハ其配偶者ノ親族ナルトキ但姻族ニ付テハ婚姻ノ解除シタルトキト雖モ亦同シ

第三 判事カ同一ノ事件ニ付キ證人若クハ鑑定人ト爲リテ訊問ヲ受ルトキ又ハ訴訟代理人タル任ヲ受クルトキ若クハ受ケタルトキ又ハ法律上代理人ト爲ル權利ヲ有スルトキ若クハ之ヲ有シタルトキ

第四 判事カ不服ノ申立アル裁判ヲ前審又ハ仲裁ニ於テ爲スニ當リ判事又ハ仲裁人トシテ干與シタルトキ但此場合ニ於テ判事ハ受命判事又ハ受託判事トシテハ職務ノ執行ヨリ除斥セラルルコト無シ

第三十三條 判事カ法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除斥セララルトキ及ヒ偏頗ノ恐アルトキハ總テノ場合ニ於テ各當事者ヨリ之ヲ忌避スルコトヲ得
偏頗ノ忌避ハ判事ノ不公平ナル裁判ヲ爲スコトヲ疑フニ足ル可キ事情アルトキ之ヲ爲スコトヲ得

第三十四條 判事カ法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除斥セララルル場合ニ於ケル判事ノ忌避ハ其訴訟ノ如何ナル程度ニ在ルヲ問ハス之ヲ爲スコトヲ得
偏頗ノ恐アル場合ニ於テハ原告若クハ被告其覺知シタル忌避ノ原因ヲ主張セスシテ判事ノ面前ニ於テ申立ヲ爲シ又ハ相手方ノ申立ニ對シ陳述ヲ爲シタル後ハ其判事ヲ忌避スルコトヲ得ス

第三十五條 忌避ノ申請ハ判事所屬ノ裁判所ニ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得
忌避ノ原因ハ之ヲ説明スルコトヲ要ス忌避セララルル判事ノ職務上ノ陳述ハ其説明ノ用ニ充ツルコトヲ得
原告若クハ被告カ判事ノ面前ニ於テ申立ヲ爲シ又ハ相手方ノ申立ニ對シ陳述ヲ爲シタル後其判事ニ對シ偏頗ノ忌避ヲ爲ストキハ忌避ノ原因其後ニ生シ又ハ之ヲ其後ニ覺知シタルコトヲ説明

第三十六條 忌避セラレタル判事合議裁判所ニ屬スルトキハ其裁判所忌避ノ申請ヲ裁判ス但忌避セラレタル判事ハ其裁判ニ參與スルコトヲ得ス
若シ其裁判所右判事ノ退去ニ因リ決定ヲ爲スコト能ハサルトキハ直近上級ノ裁判所其申請ヲ裁判ス

區裁判所判事忌避セラレタルトキハ上級ノ地方裁判所其申請ヲ裁判ス若シ區裁判所判事カ忌避ノ申請ヲ正當ナリト爲ストキハ裁判ヲ要セス

第三十七條 忌避ノ申請ニ付テノ裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得忌避セラレタル判事ハ先ツ申請ノ理由ニ付キ職務上意見ヲ述フ可シ

第三十八條 忌避ノ申請ヲ正當ナリト宣言スル決定ニ對シテハ上訴ヲ爲スコトヲ得ス其申請ヲ不當ナリト宣言スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第三十九條 忌避セラレタル判事ハ忌避申請ノ完結スルマテ總テノ行爲ヲ避ク可シ然レトモ偏頗ノ爲ニ忌避セラレタル判事ハ猶豫ス可カラサル行爲ヲ爲スコトヲ得

第四十條 忌避申請ノ管轄裁判所ハ其申請アラサルモ忌避ノ原因タル事情ニ付キ判事ヨリ申出アルトキ又ハ他ノ事由ヨリシテ判事カ法律ニ依リ除斥セララルル疑アルトキモ亦裁判ヲ爲ス此裁判ハ豫メ當事者ヲ審訊セスシテ之ヲ爲ス又其裁判ハ之ヲ當事者ニ送達スルコトヲ要セス

第四十一條 本節ノ規定ハ裁判所書記ニモ之ヲ準用ス但其裁判ハ書記所屬ノ裁判所之ヲ爲ス

第六節 檢事ノ立會
第四十二條 檢事ハ左ノ訴訟ニ付キ意見ヲ述フル爲メ其口頭辯論ニ立會フ可シ

第一章 公法上ノ關係ニ關スル訴訟

第一節 婚姻ニ關スル訴訟

第三 夫婦間ノ財産ニ關スル訴訟

第四 親子若クハ養親子ノ分限其他總テ人ノ分限ニ關スル訴訟

第五 無能力者ニ關スル訴訟

第六 養料ニ關スル訴訟

第七 失踪者及ヒ相續人虧缺ノ遺產ニ關スル訴訟

第八 證書ノ偽造若クハ變造ノ訴訟

第九 再審

檢察官陳述ハ當事者ノ辯論終リタルトキ之ヲ爲ス
當事者ハ檢察官意見ニ對シ事實ノ更正ノミニ付キ陳述ヲ爲スコトヲ得

第二章 當事者

第一節 訴訟能力

第四十三條 原告若クハ被告カ自ら訴訟ヲ爲シ又ハ訴訟代理人ヲシテ之ヲ爲サシムル能力ハ法律上代理人ニ依レル訴訟無能力者ノ代表ト法律上代理人カ訴訟ヲ爲シ又ハ一ノ訴訟行爲ヲ爲スニ付テノ特別授權ノ必要トハ民法ノ規定ニ從フ

第四十四條 外國人ハ自國ノ法律ニ從ヒ訴訟能力ヲ有セサルモ本邦ノ法律ニ從ヒ訴訟能力ヲ有スルモノナルトキハ之ヲ有スルモノト看做ス

第四十五條 裁判所ハ訴訟ノ如何ナル程度ニ在ルヲ問ハズ職權ヲ以テ訴訟能力、法律上代理人ヲ

ル資格及ヒ訴訟ヲ爲スニ必要ナル授權ニ欠缺ナキ時否ヤヲ調査シ得ル可シ
 裁判所ハ遲滞ノ爲メ原告若クハ被告ニ危害アリ且其欠缺ノ補正ヲ爲シ得ルモノト認ムルトキハ
 原告若クハ被告又ハ其法律上代理人ニ其欠缺ノ補正ヲ爲ス條件以テ一時訴訟ヲ爲スヲ許スコ
 トナ得此場合ニ於テ裁判所ハ欠缺補正ノ爲メ相當ノ期間ヲ定メ其期間ノ滿了前ニ判決ヲ爲スコ
 トナ得ス但其欠缺ノ補正ハ判決ニ接著スル口頭辯論ノ終結マテ之ヲ追完スルコトヲ得
 第四十六條 訴訟無能力者又ハ相續人ノ未定ノ遺産又ハ不分明ナル相續人ニ對シ訴ヲ起ス可キ場
 合ニ於テ法律上代理人アラサルトキハ其事件ノ繫屬スヘキ裁判所ノ裁判長ハ申立ニ因リ遲滞ノ
 爲ニ危害ノ恐アル場合ニ限リ特別代理人ヲ任ス可シ

右申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得
 此裁判所口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲シ其裁判ハ申請人ニ之ヲ送達シ又申請ヲ認許シタルトキハ
 其任セラレタル特別代理人ニモ亦之ヲ送達ス可シ
 申請ヲ却下スル裁判ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得
 裁判長自ラ任セラレタル特別代理人ハ法律上代理人又ハ相續人ノ出頭スルマテ訴訟行爲ニ付キ
 法律上代理人ノ權利及義務ヲ有ス

第四十七條 第十五條ニ掲ケタル場合ニ於テ訴訟無能力者カ其現在地又ハ兵營地若クハ軍艦定繫
 所ハ裁判所ニ訴ヲ受ク可キ場合ニ於テ其法律上代理人他ノ地ニ居住スルトキハ遲滞ノ爲メ危害ナ
 シト雖モ前條ノ規定ニ從ヒ特別代理人ヲ任スルコトヲ得
 此他裁判所對シ抗告ヲ許ス規定ヲ除ク外總テ前條ノ規定ヲ適用ス

第七節 共同訴訟人

第四十八條 左ノ場合ニ於テハ共同訴訟人トシテ數人カ共ニ訴ヲ爲シ又ハ訴ヲ受クルコトヲ得

第一 數人カ訴訟物ニ付キ權利共通若クハ義務共通ノ地位ニ立ツトキ

第二 同一ナル事實上及ヒ法律上ノ原因ニ基ク請求又ハ義務カ訴訟ノ目的物タルトキ

第三 性質ニ於テ同種類ナル事實上及ヒ法律上ノ原因ニ基ク同種類ナル請求又ハ義務カ訴訟ノ
 目的物タルトキ

第四十九條 共同訴訟人ハ其資格ニ於テハ各別ニ相手方ニ對立シ其一人ノ訴訟行爲及ヒ懈怠又ハ
 相手方ヨリ其一人ニ對スル訴訟行爲及ヒ懈怠ハ他ノ共同訴訟人ニ利害ヲ及ボサス

第五十條 然レトモ總テノ共同訴訟人ニ對シ訴訟ニ係ル權利關係カ合一ニノミ確定スヘキトキニ
 限リ左ノ規定ヲ適用ス

共同訴訟人中ノ或ル人ノ攻撃及ヒ防禦ノ方法(證據方法ヲ包含ス)ハ他ノ共同訴訟人ノ利益ニ於
 テ效ヲ生ス

共同訴訟人中ノ或ル人カ争ヒ又ハ認諾セサルトキト雖モ總テノ共同訴訟人カ悉ク争ヒ又ハ認諾
 セサルモノト看做ス

共同訴訟人中ノ或ル人ノミカ期日又ハ期間ヲ懈怠シタルトキハ其懈怠シタル者ハ懈怠セサル者
 ニ代理ヲ任シタルモノト見做ス

然レトモ懈怠シタル共同訴訟人ニハ其懈怠セサリシ場合ニ於テ爲ス可キ總テノ送達及ヒ呼出等
 爲スコトヲ要ス其懈怠シタル共同訴訟人ハ何時タリトモ其後ノ訴訟手續ニ再ヒ加ハルコトヲ得

第三節 第三者ノ訴訟參加

第五十一條 他人ノ間ニ權利拘束ト爲リタル訴訟ノ目的物ノ全部又ハ一部分ヲ自己ノ爲ニ請求スル

第三者ハ本訴訟ノ權利拘束ノ終ニ至ルマテ其訴訟カ第一審ニ於テ繫屬シタル裁判所ニ當事者雙方ニ對スル訴(主參加)ヲ爲シテ其請求ヲ主張スルコトヲ得

第五十二條 本訴訟ハ第一審ニ繫屬スルト上級審ニ繫屬スルトヲ問ハス原告、被告若クハ主參加人ノ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ主參加ニ付テノ權利拘束ノ終リニ至ルマテ之ヲ中止スルコトヲ得

中止ノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ本訴訟ノ繫屬スル裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得
決定ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得
中止ヲ命スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第五十三條 他人ノ間ニ權利拘束ト爲リタル訴訟ニ於テ其一方ノ勝訴ニ依リ權利上利害ノ關係ヲ有スル者ハ訴訟ノ如何ナル程度ニ在ルヲ問ハス權利拘束ノ繼續スル間ハ其一方ヲ補助(從參加)スル爲メ之ニ附隨スルコトヲ得

第五十四條 從參加人ハ其附隨スル時ニ於ケル訴訟ノ程度ヲ妨ケサル限リハ其主タル原告若クハ被告ノ爲ニ攻撃及ヒ防禦ノ方法ヲ施用シ且總テノ訴訟行爲ヲ有效ニ行ヒ殊ニ主タル原告若クハ被告ノ爲ニ存スル期間内ニ故障、支拂命令ニ對スル異議又ハ上訴ヲ爲ス權利ヲ有ス

從參加人ノ陳述及ヒ行爲ト主タル原告若クハ被告ノ陳述及ヒ行爲ト相牴觸スル場合ニ於テハ主タル原告若クハ被告ノ陳述及ヒ行爲ヲ以テ標準ト爲ス但民法ニ於テ此ニ異ナル規定アルトキハ此限ニ在ラス

第五十五條 從參加人ハ訴訟ヨリ脱退シタルトキト雖モ其補助シタル原告若クハ被告トノ關係ニ

於テハ其訴訟ノ確定裁判ヲ不當ナリト主張スルコトヲ得

從參加人ハ其附隨ノ時ノ訴訟ノ程度ニ因リ又ハ主タル原告若クハ被告ノ所爲ニ因リ攻撃及ヒ防禦ノ方法ヲ施用スルコトヲ妨ケラレルトキ又ハ主タル原告若クハ被告カ從參加人ノ當時知ラザリシ攻撃及ヒ防禦ノ方法ヲ故意又ハ重過失ニ因リ施用セザリシトキニ限り其補助シタル原告若クハ被告カ訴訟ヲ不十分ニ爲シタリト主張スルコトヲ得

第五十六條 從參加人ハ本訴訟ノ繫屬スル裁判所ニ申請ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

申請ニハ當事者及ヒ訴訟ヲ表示シ又一定ノ利害關係及ヒ附隨セントスル陳述ヲ開示ス可シ
申請ハ當事者ニ之ヲ送達ス可シ

從參加人ハ故障、異議又ハ上訴ト併合シテ之ヲ爲スコトヲ得

第五十七條 原告若クハ被告カ從參加ニ付キ異議ヲ述フルトキハ當事者及ヒ從參加人ヲ審訊シタル後決定ヲ以テ參加ノ許否ヲ裁判ス其裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

利害關係ノ存否ニ付キ争アルトキハ從參加人其關係ヲ疏明スルノミチヲ以テ參加ヲ許スニ足ル右ノ決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

參加ヲ許ササル裁判確定セサル間ハ從參加人本訴訟ニ立會ハシメ殊ニ總テノ期日ニ之ヲ呼出シ又本訴訟ニ關係アル裁判ヲ爲シタルトキハ從參加人ニ其裁判ヲ送達ス可シ

第五十八條 從參加人ハ當事者雙方ノ承諾ヲ得テ其附隨シタル原告若クハ被告ニ代リ訴訟ヲ擔任スルコトヲ得此場合ニ於テハ其原告若クハ被告ノ申立ニ因リ判決ヲ以テ訴訟ヨリ其原告若クハ被告ヲ脱退セシム可シ

第五十九條 原告若クハ被告若シ敗訴スルトキハ第三者ニ對シ擔保又ハ賠償ノ請求ヲ爲シ得ヘシ

通知シ又ハ第三者ヨリ請求ヲ受ケ可キコトヲ恐レル場合ニ於テハ訴訟ノ權利拘束間第三者ニ訴訟ヲ告知スルコトヲ得

第六十條 訴訟ノ告知ヲ受ケタル者ハ更ニ訴訟ヲ告知スルコトヲ得

第六十條 訴訟告知ハ訴訟ノ繫屬スル裁判所ニ其訴訟告知ノ理由及ヒ訴訟ノ程度ヲ記載シタル書

面ヲ提出シテ之ヲ爲スルコトヲ得

此書面ハ第三者ニ送達スルコトヲ要ス又訴訟ヲ告知スル原告若クハ被告ノ相手方ニハ其謄本ヲ

送付ス可シ

第六十一條 訴訟ハ訴訟告知ニ拘ハラス之ヲ續行ス

第六十二條 第三者ノ名ヲ以テ物ヲ占有スルコトヲ主張スル者其物ノ占有者トシテ被告ト爲リ

ハ陳述ヲ爲シ又ハ之ヲ爲ス可キ期日マテ本案ノ辯論ヲ拒ムコトヲ得

第三者カ被告ノ主張ヲ争フ事キ又ハ陳述ヲ爲サザルコトキハ被告ハ原告以テ申立ニ應スルコトヲ

得

第三者カ被告ノ主張ヲ正當申認ムルコトキハ被告ノ承諾ヲ得テ之ニ代リ訴訟ヲ引受クルコトヲ

得

第三者カ訴訟ヲ引受ケタルトキハ裁判所ハ被告ノ申立ニ因リ其被告ヲ訴訟ヨリ脱退シ得

其物ニ付テハ裁判所ハ被告ニ對シテ之ヲ執行スルコトヲ得

第四節 訴訟代理人及ヒ補佐人

第六十三條 原告若クハ被告自ラ訴訟ヲ爲サザルトキハ辯護士ヲ以テ訴訟代理人トシ之ヲ爲ス

辯護士ニ在ラザル場合ニ於テハ訴訟能力者タル親族若クハ雇人ヲ以テ訴訟代理人ト爲シ若シ此

等ノ者ノ在ラザルトキハ他ノ訴訟能力者ヲ以テ訴訟代理人ト爲スコトヲ得

區裁判所ニ於テハ辯護士ノ在ルトキト雖モ訴訟能力者タル親族若クハ雇人ヲ以テ訴訟代理人ト

爲スコトヲ得

第六十四條 訴訟委任ハ裁判所ノ記録ニ備フ可キ書面委任ヲ以テ之ヲ證ス可シ

私署證書ハ相手方ノ求ニ因リ之ヲ認證ス可シ其認證ハ公證人之ヲ爲シ又相當官吏之ヲ爲スコト

ヲ得

口頭辯論ノ期日又ハ受命判事若クハ受託判事ノ面前ニ於テ口頭委任ヲ爲シ其陳述ヲ調査ニ記載

セシムルコトキハ書面委任ト同一ナリトス

第六十五條 訴訟委任ハ反訴ノ主參加ノ故障ノ假差押若クハ假處分又ハ強制執行ニ因リ生スル訴訟

行爲ヲ併セ訴訟ニ關スル總テノ訴訟行爲ヲ爲シ及ヒ相手方ヨリ辨濟スル費用ノ領收ヲ爲ス權ヲ

授與ス

訴訟代理人ハ特別ノ委任ヲ受クルニ非サレバ控訴若クハ上告ヲ爲シ、再審ヲ求メ、代人ヲ任シ、

和解ヲ爲シ、訴訟物ヲ拋棄シ又ハ相手方ヨリ主張シタル請求ヲ認諾スル權ヲ有セズ

第六十六條 訴訟委任ハ法律上ノ範圍(第六十五條第一項)ヲ制限スルモ其制限ハ相手方ニ對シテ

効力ナシ

然レドモ辯護士ニ依レル代理ヲ除ク外ハ各箇ノ訴訟行爲ニ付キ委任ヲ爲スコトヲ得

第六十七條 訴訟代理人數人ヲ以下キハ共同若クハ各別ニテ代理スルコトヲ得但委任ニ此ト異ナ

ル定アルモ相手方ニ對シ其效力ナシ
第六十八條 訴訟代理人カ委任ノ範圍内ニ於テ爲シタル訴訟上ノ行爲及ヒ不行爲ハ原告若クハ被告ニ對シテハ此本人ノ行爲又ハ不行爲ト同一ナリトス

然レドモ代理人ノ事實上ノ陳述ハ其代理人ト共ニ裁判所ニ出頭シタル原告若クハ被告ヨリ即時ニ之ヲ取消シ又ハ更正シタルトキニ限り其效力ヲ失フ

第六十九條 委任者ノ死亡、訴訟能力若クハ法律上代理ノ變更、委任ノ廢罷及ヒ代理ノ謝絶ニ因ル委任ノ消滅ハ其消滅ヲ通知スルマテ相手方ニ對シ其效力ナシ

此通知書ハ原告若クハ被告ヨリ受訴裁判所ニ之ヲ差出シ裁判所ハ相手方ニ之ヲ送達ス可シ
代理人ハ謝絶ヲ爲スモ委任者他ノ方法ヲ以テ自己ノ權利ノ防衛ヲ爲ササル間ハ其委任者ノ爲ニ行爲ヲ爲スコトヲ得

第七十條 委任ノ欠缺ハ原告若クハ被告ノ爲メ其代理人ナキモノト看做ス

裁判所ハ職權ヲ以テ委任ノ欠缺ヲ調査シ委任ナク又ハ適式ノ委任ナク代理人トシテ出頭スル者ノ事情ニ從ヒ費用及ヒ損害ノ保證ヲ立テシメ又ハ之ヲ立テシメスシテ假ニ訴訟ヲ爲スヲ許スコトヲ得

判決ハ欠缺ヲ補正シ又ハ之ヲ補正スル爲メ裁判所ノ適宜ニ定ムル期間ノ滿了後ニ限り之ヲ爲スコトヲ得但欠缺ノ補正ハ判決ニ接著スル口頭辯論ノ終結マテ追完スルコトヲ得

第七十一條 原告若クハ被告ハ辯護士ヲ輔佐人ト爲シ又ハ何時ニテモ裁判所ノ取消シ得ヘキ許可ヲ得テ他ノ訴訟能力者ヲ輔佐人ト爲シテ共ニ出頭スルコトヲ得其輔佐人ハ口頭辯論ニ於テ權利ヲ伸張シ又ハ防禦スル爲メ原告若クハ被告ヲ補助スルモノトス

輔佐人ハ演述ハ原告若クハ被告即時ニ之ヲ取消シ又ハ更正セサルトキニ限り原告若クハ被告自ラ演述者タルモノト看做ス

第七十二條 敗訴ノ原告若クハ被告ハ訴訟ノ費用ヲ負擔シ殊ニ訴訟ニ因リ生シタル費用ヲ相手方共ニ負擔ス但其實用ハ裁判所ノ意見ニ於テ相當ナル權利伸張又ハ權利防禦ニ必要ナリト認め

訴訟中ニ訴ヲ取下ケ、請求ヲ拋棄シ又ハ相手方ノ請求ヲ認諾スル原告若クハ被告ハ敗訴ノ原告若クハ被告ニ同シ

第七十三條 當事者ノ各方一分ハ勝訴ト爲リ一分ハ敗訴ト爲ルトキハ其費用ヲ相消シ又ハ割合ヲ以テ之ヲ分擔ス可シ第一ノ場合ニ於テハ各當事者ハ其支出シタル費用ヲ自ラ負擔シ他ノ一方ニ對シ辨濟ヲ請求スルコトヲ得ス

然レドモ裁判所ハ相手方ノ要求格外ニ過分ナルニ非ス且別段ノ費用ヲ生セザリトキ又ハ判事ノ意見、鑑定人ノ鑑定若クハ相互ノ計算ニ依リ要求額ヲ定ムルニ非サレハ容易ニ過分ノ要求ヲ避ケルモノトヲ得サリトキハ當事者ノ一方ニ訴訟費用ノ全部ヲ負擔セシムルコトヲ得

第七十四條 被告直チニ請求ヲ認諾シ且其作爲ニ因リ訴ヲ起スニ至ラシメタルニ非サルトキハ訴訟費用ハ原告ノ勝訴ト爲リタルニ拘ハラズ其負擔ニ歸ス

第七十五條 期日若クハ期間ヲ懈怠シ又ハ自己ノ過失ニ因リ期日ノ變更、辯論ノ延期、辯論續行ノ爲ニスル期日ノ指定、期間ノ延長其他訴訟ノ遲滯ヲ生セシメタル原告若クハ被告ハ本案ノ勝訴者ト爲リタルニ拘ハラズ此ガ爲ニ生シタル費用ヲ負擔ス可シ

第七十六條 裁判所ハ無益ナル攻撃又ハ防禦ノ方法(證據方法ヲ包含ス)ヲ主張シタル原告若クハ被告ヲシテ本案ノ勝訴者ト爲リタルニ拘ハラス其方法ノ費用ヲ負擔セシムルコトヲ得

第七十七條 無益ナル上訴又ハ取下ケタル上訴ノ費用ハ之ヲ提出シタル原告若クハ被告ノ負擔ニ歸ス

第七十八條 上訴ニ因リ裁判ノ全部又ハ一分ヲ廢棄若クハ破毀スルトキハ訴訟ノ總費用(上訴ノ費用ヲ包含ス)ノ裁判ハ本案ノ終局裁判ト併合シテ更ニ之ヲ爲ス可シ

原告若クハ被告カ前審ニ於テ主張スルコトヲ得ベカリシ事實又ハ攻撃若クハ防禦ノ方法ヲ新ニ提出スルニ因リ勝訴者ト爲ルトキハ其原告若クハ被告ニ上訴費用ノ全部又ハ一分ヲ負擔セシムルコトヲ得

第七十九條 當事者カ訴訟物ニ付キ和解ヲ爲ストキハ其訴訟ノ費用及ヒ和解ノ費用ハ共ニ相消シタルモノト看做ス但當事者別段ノ合意ヲ爲シタルトキハ此限ニ在ラズ

第八十條 法律ノ規定ニ從ヒ費用ニ付キ共同訴訟人ノ連帶義務ノ生セサルトキニ限り其共同訴訟人ハ相手方ニ對シ平等ニ費用ヲ負擔ス然レトモ共同訴訟人ノ訴訟ニ於ケル利害ノ關係者シク相異ナルトキハ裁判所ハ其利害關係ノ割合ニ從ヒ費用ヲ負擔セシムルコトヲ得

共同訴訟人中ノ或ル人カ特別ノ攻撃又ハ防禦方法ヲ主張シタルトキハ他ノ共同訴訟人ハ此方爲ニ生シタル費用ヲ負擔セス

第八十一條 從參加ニ對シ原告若クハ被告カ異議ヲ述フルトキハ其異議ノ決定ニ於テ從參加人ト其原告若クハ被告トノ中間訴訟ノ費用ニ付キ第七十二條乃至第七十八條ノ規定ニ從ヒテ裁判ヲ爲ス可シ

從參加ヲ許シタルトキ又ハ異議ヲ述ヘサルトキハ本訴訟ノ判決ニ於テ從參加人ト相手方ナラズ若クハ被告トノ間ニ從參加ニ因リ生シタル費用ニ付テモ亦前數條ノ規定ニ從ヒテ裁判ヲ爲ス可シ

第八十二條 費用ノ點ニ限リタル裁判ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得然レトモ本案ノ裁判ニ對シ許ス可キ上訴ヲ提出シ且追行スルコトキニ限リ費用ノ點ニ付キ不服ヲ申立ツルコトヲ得

費用ノ點ニ限リタルトキト雖モ相手方ヨリ提出シタル上訴ニ附帶スル場合ニ於テハ不服ヲ申立ツルコトヲ得

第八十三條 裁判所書記、法律上代理人、辯護士其他ノ代理人及ヒ執達吏ノ過失又ハ懈怠ニ因リ費用ノ生シタルトキハ受訴裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其費用ノ辨濟ヲ負擔セシムル決定ヲ爲スコトヲ得但此決定前關係人ニ口頭又ハ書面ニテ陳辯ヲ爲ス機會ヲ與フ可シ

此裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得其決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第八十四條 辨濟ス可キ費用額ノ確定ハ申請ニ因リ訴訟ノ第一審ニ繫屬シタル裁判所ノ決定ヲ以テ之ヲ爲ス

申請ハ第七十二條第二項又ハ上訴取下ノ場合ヲ除ク外執行シ得ベキ裁判ニ依ルトキニ限リ之ヲ爲スコトヲ得

申請ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

申請ニハ費用計算書、相手方ニ付與ス可キ計算書ノ原本及ヒ各箇費用額ノ疏明ニ必用ナル證書ヲ添附ス可シ

第八十五條 費用額確定ノ裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

第八十六條 費用額確定ノ裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

第八十七條 費用額確定ノ裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

第八十八條 費用額確定ノ裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

裁判所ハ裁判所書記ニ費用計算書ノ請求上ノ検査ヲ命スルコトヲ得

裁判所ハ費用額確定ノ決定ヲ爲ス前相手方ニ計算書ヲ付與シテ裁判所ノ定ムル期間内ニ前述ヲ爲ス可キ旨ヲ之ニ備告スルコトヲ得此決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第八十六條 當事者ハ訴訟費用ノ全部又ハ一分ヲ割合ニ從ヒ分擔ス可キトキハ裁判所ハ費用額確定ノ決定ヲ爲ス前相手方ニ裁判所ノ定ムル期間内ニ其費用ノ計算書ヲ差出ス可キ旨ヲ備告ス可シ其期間ヲ徒過シタル後ハ費用額確定ノ決定ハ相手方ノ費用ヲ願ミス之ヲ爲ス可シ但相手方ハ後ニ自己ノ費用ヲ以テ其費用額確定ノ申請ヲ爲ス妨ト爲ルコト無シ

第六節 保證

第八十七條 訴訟上ノ保證ハ當事者方別段ノ合意ヲ爲ス場合又ハ此法律ニ於テ保證ヲ定ムルコトヲ裁判所ノ自由ナル意見ニ任スル場合ヲ除ク外裁判所ノ意見ニ於テ擔保ニ十分ナリトスル現金又ハ有價證券ヲ供託シテ之ヲ爲ス

第八十八條 原告又ハ原告ノ從參加人タル外國人ハ被告ニ對シ其求ニ因リ訴訟費用ニ付保證ヲ立

左ノ場合ニ於テハ保證ヲ立ツル義務ヲ生ゼス

第一 國際條約又ハ原告ノ屬スル國ノ法律ニ依リ本邦人カ同一ノ場合ニ於テ保證ヲ立ツル義務ナキトキ

第二 反訴ノ場合

第三 證書訴訟及ヒ爲替訴訟ノ場合

第四 公示催告ニ基キ起シタル訴訟ノ場合

第八十九條 裁判所ハ前條第一項ノ場合ニ於テハ保證ヲ立ツ可キ數額ヲ確定ス可シ

此數額ヲ確定スルニハ被告ハ訴ヲ受ケタルカ爲メ各審級ニ於テ支出ス可キ訴訟費用ノ額ヲ標準ト爲ス可シ

第九十條 裁判所ハ保證ヲ立ツ可キ期間ヲ定ム可シ

此期間ノ經過後裁判アルマテニ保證ヲ立テサル場合ニ於テハ被告ノ申立ニ因リ判決ヲ以テ訴ヲ取下ケタル以宣言シ又原告ガ上訴ヲ爲シタルトキハ其上訴ヲ取下ケタルト宣言ス可シ

第七節 訴訟上ノ救助

第九十一條 何人ヲ問ハス自己及ヒ其家族ノ必要ナル生活ヲ害スルニ非サレハ訴訟費用ヲ出タスコト能ハサル者ハ訴訟上ノ救助ヲ求ムルコトヲ得但其目的トスル權利ノ伸張又ハ防禦ノ輕忽ヲナス又ハ見込キニ非スト見ユルトキニ限ル

第九十二條 外國人ハ國際條約又ハ其屬スル國ノ法律ニ依リ本邦人カ同一ノ場合ニ於テ訴訟上ノ救助ヲ求ムルコトヲ得ルコトキニ限リ之ヲ求ムルコトヲ得

第九十三條 訴訟上救助ノ申請ハ訴訟ノ關係ヲ表明シ且證據方法ヲ開示シテ其救助ヲ求ムル審級ノ裁判所ニ之ヲ提出ス可シ其申請ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

原告若クハ被告ハ申請ノ提出ト共ニ管轄市町村長ヨリ發シタル證書ヲ出タスコトヲ要ス其證書ニハ原告若クハ被告ノ身分、職業、財産並ニ家族ノ實況及ヒ其納ム可キ直税ノ額ヲ開示シテ訴訟費用支拂ノ無資力ヲ證ス可シ

第九十四條 訴訟上ノ救助ハ各審ニ於テ各別ニ之ヲ付與ス第一審ニ於テハ強制執行ニ付テモ之ヲ付與スルモハトス

前審ニ於テ訴訟上ノ救助ヲ受ケタルトキハ上級審ニ於テハ無資力ヲ證スルコトヲ要セス相手方

上訴ヲ提出シタルトキハ上級審ニ於テハ訴訟上ノ救助ヲ求ムル原告若クハ被告ノ權利ノ伸張又

ハ防禦ノ輕忽ヲナス又ハ見込ナキニ非スト見ユルヤ其調查スルコトヲ要セス

第九十五條 訴訟上ノ救助ハ之ヲ受ケタル條件ノ存セザリシトキ又ハ消滅シタルトキハ何時タリ

トモ之ヲ取消スコトヲ得

第九十六條 訴訟上ノ救助ハ之ヲ受ケタル原告若クハ被告ノ死亡ト共ニ消滅ス

第九十七條 訴訟上ノ救助ハ之ヲ受ケタル原告若クハ被告ノ爲ニ左ノ效力ヲ生ス

第一 裁判費用(國庫ノ立替金ヲ包含ス)ヲ濟清スルコトノ假免除

第二 訴訟費用ノ保證ヲ立ツルコトノ免除

第三 送達及口執行行為ヲ爲サシムル爲メ一時無報酬ニテ執達吏ノ附添ヲ求ムル權利

受訴裁判所ハ必要ナル場合ニ於テハ訴訟上ノ救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ノ申立ニ因リ又ハ

職權ヲ以テ一時無報酬ニテ辯護士ノ附添ヲ命ズルコトヲ得

第九十八條 訴訟上ノ救助ハ相手方ニ生シタル費用ヲ辨濟スル義務ニ影響ヲ及ボサス

第九十九條 救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ノ爲メ假ニ濟清ヲ免除シタル裁判費用ハ訴訟費用ニ

付キ確定裁判ヲ受ケタル相手方又ハ訴若クハ上訴ノ取下、拋棄、認諾若クハ和解ニ因リ訴訟費

用ヲ負擔ス可キ相手方ヨリ之ヲ取立ツルコトヲ得

救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ニ附添ヒタル執達吏又ハ辯護士ハ同一ノ條件アルトキハ亦自己

ノ權利ニ依リ費用確定ノ方法ヲ以テ其手数料及立替金ヲ取立ツルコトヲ得

第一百條 救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ハ自己及ヒ其家族ノ必要ナル生活ヲ害セスシテ費用ノ濟

清ヲ爲シ得ルニ至ル限キハ假免除ヲ得タル數額(第九十七條第一號)ヲ直チニ追拂ヒスル義務ヲ

負フ

第一百一條 裁判所ハ檢事ノ意見ヲ聽キタル後訴訟上救助ノ付與並ニ辯護士附添ノ命令ニ付テノ申

請 訴訟上救助ノ取消及ヒ數額追拂ノ義務ニ付キ決定ヲ爲ス

此裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

第一百二條 訴訟上ノ救助ヲ付與シ又ハ其取消ヲ拒ミ若クハ費用追拂ヲ命スルコトヲ拒ム決定ニ對

シテハ檢事ニ限リ抗告ヲ爲スコトヲ得

辯護士ノ附添ヲ命スル決定ニ對シテハ上訴ヲ爲スコトヲ得

訴訟上ノ救助ヲ拒ミ若クハ取消シ又ハ辯護士ノ附添ヲ拒ミ又ハ費用ノ追拂ヲ命スル決定ニ對シ

テハ原告若クハ被告ハ抗告ヲ爲スコトヲ得

第三章 訴訟手續

第一節 口頭辯論及ヒ準備書面

第一百三條 判決裁判所ニ於ケル訴訟ニ付テノ當事者ノ辯論ハ口頭ナリトス但此法律ニ於テ口頭辯

論ヲ經スシテ裁判ヲ爲スコトヲ決定メタルトキハ此限ニ在ラス

第一百四條 口頭辯論ハ書面ヲ以テ之ヲ準備ス

第一百五條 準備書面ニハ左ノ諸件ヲ掲ク可シ

第一 當事者及ヒ其法律上代理人ノ姓名、身分、職業、住所、裁判所、訴訟物及ヒ附屬書類ノ表示

第二 原告若クハ被告が法廷ニ於テ爲サント欲スル申立
 第三 申立有原因タル事實上ノ關係
 第四 相手方ノ事實上ノ主張ニ對スル陳述
 第五 原告若クハ被告が事實上主張ノ證明又ハ攻撃ノ爲メ用キントスル證據方法及ヒ相手方ノ申出テタル證據方法ニ對スル陳述
 第六 原告若クハ被告又ハ其訴訟代理人ノ署名及ヒ捺印
 第七 年月日

第六條 準備書面ニ於テ提出ス可キ事實ハ簡明ニ之ヲ記載ス可シ
 此他事實上ノ關係ノ說明並ニ法律上ノ討論ハ書面ニ之ヲ掲グルコトヲ得ス

第七條 準備書面ニハ訴訟ヲ爲ス可キ資格ニ付テノ證書ノ原本、正本又ハ謄本其他總テ原告若クハ被告ノ手申ニ存スル證書ニシテ書面中ニ申立ノ原因トシテ引用シタルモノノ謄本ヲ添附ス可シ

證書ノ一部分ヲミテ要用トスルトキハ其冒頭ニ事件ニ屬スル部分、終尾、日附、署名及ヒ印章ヲ謄寫シタル抄本ヲ添附スルヲ以テ足ル

證書方既ニ相手方ニ知レタルトキ又ハ大部タルトキハ其證書ヲ表示シ且相手方ニ之ヲ閱覽セシメント欲スル旨ヲ附記スルヲ以テ足ル

第八條 當事者ハ準備書面及ヒ其附屬書類並ニ相手方ニ付與スル爲メ必要ナル謄本ヲ裁判所書記課ニ差出ス可シ

第九條 裁判長ハ口頭辯論ヲ開キ且之ヲ指揮ス

裁判長ハ發言ヲ許シ又其命ニ從ハサル者ニ發言ヲ禁スルコトヲ得

裁判長ハ事件ニ付キ十分ナル說明ヲ爲サシメ且間斷ナク辯論ノ終了スルコトニ注意ス又必要ナル場合ニ於テ直チニ辯論續行ノ期日ヲ定ム

裁判所ニ於テ事件ニ付キ十分ナル說明ヲ爲セリト認ムルトキハ裁判長ハ口頭辯論ヲ閉チ及ヒ裁判所ノ判決並ニ決定ヲ宣渡ス

第十條 口頭辯論ハ當事者ノ申立ヲ爲スニ因リテ始マル
 當事者ノ演述ハ事實上及法律上ノ點ニ於ケル訴訟關係ヲ包括ス可シ

口頭演述ニ換ヘテ書類ヲ援用スルコトヲ許サス文字上ノ旨趣ヲ要用トスルトキハ其要用ナル部分ニ限リ之ヲ朗讀スルコトヲ得

第十一條 各當事者ハ相手方ノ主張シタル事實ニ對シ陳述ヲ爲ス可シ
 明カニ争ハサル事實ハ原告若クハ被告ノ他ノ陳述ヨリ之ヲ争ハントスル意思カ顯ハレサルトキハ各自シタル如クト看做ス

不知ノ陳述ハ原告若クハ被告ノ自己ノ行爲ニ非ス又自己ノ實驗シタルモノニモ非サル事實ニ限リ之ヲ許ス此場合ニ於テ不知ヲ以テ答ヘタル事實ハ争ヒタルモノト看做ス

第十二條 裁判長ハ職權上調査ス可キ點ニ關シ相手方ヨリ起ササル疑ノ存スルトキハ其疑ニ付キ注意ヲ爲スコトヲ得

裁判長ハ問ヲ發シテ不明瞭ナル申立ヲ釋明シ主張シタル事實ノ不十分ナル證明ヲ補充シ證據方法ヲ申立テ其他事件ノ關係ヲ定ムルニ必要ナル陳述ヲ爲サシム可シ

陪席判事ハ裁判長ニ告ケテ問ヲ發スルコトヲ得

當事者ハ相手方ニ對シ自ラ問ヲ發スルコトヲ得ス然レトモ其間ヲ發ス可キ旨ヲ裁判長ニ求ムルコトヲ得
若シ其間ニ對シテ答ヘス又ハ判然答ヘザルトキハ相手方シ利益ト爲ル可キ答ヲ爲シタルモノト看做スコトヲ得

第百十三條 事件ニ指揮ニ關スル裁判長以命又ハ裁判長若クハ陪席判事ノ發シタル問ニ對シ辯論ニ與カル者ヨリ不適法ナリトシテ異議ヲ述ヘタルトキハ裁判所ハ其異議ニ付キ直チニ裁判ヲ爲ス

第百十四條 裁判所ハ事件ノ關係ヲ明瞭ナラシムル爲メ原告若クハ被告ノ自身出頭ヲ命スルコトヲ得

第百十五條 裁判所ハ原告若クハ被告ノ採用シタル證書ニシテ其手中ニ存スルモノヲ提出ス可キヲ命スルコトヲ得

裁判所ハ外國語ヲ以テ作リタル證書ニ付テハ其譯書ヲ添附ス可キヲ命スルコトヲ得
第百十六條 裁判所ハ當事者ノ所持スル訴訟記録ニシテ事件ノ辯論及ヒ裁判ニ關スルモノヲ提出ス可キヲ命スルコトヲ得

第百十七條 裁判所ハ檢證及ヒ鑑定ヲ命スルコトヲ得
此手續ハ申立ニ因リ命スル檢證及ヒ鑑定ニ付テノ規定ニ從フ

第百十八條 裁判所ハ一箇ノ訴ニ於テ爲シタル數箇ノ請求又ハ本訴及ヒ反訴ニ付テノ辯論ヲ分離シテ爲ス可キヲ命スルコトヲ得

第百十九條 同一ノ請求ニ關シ數箇ノ獨立ナル攻撃及ヒ防禦ノ方法ヲ提出シタルトキハ裁判所ハ

先ツ辯論ヲ其二ニ制限ス可キヲ命スルコトヲ得
第百二十條 裁判所ハ同一ノ人又ハ別異人ノ數箇ノ訴訟ニシテ其裁判所ニ繫屬スルモノノ辯論及ヒ裁判ヲ併合ス可キヲ命スルコトヲ得但し其訴訟ノ目的物タル請求ヲ元來一箇ノ訴ニ於テ主張シ得ヘキトキニ限ル

第百二十一條 裁判所ハ訴訟ノ全部又ハ一部分ノ裁判力他ノ繫屬スル訴訟ニ於テ定マル可キ權利關係ノ成立又ハ不成立ニ繫ルトキハ他ノ訴訟ノ完結ニ至ルマテ辯論ヲ中止ス可シ

第百二十二條 裁判所ハ民事訴訟中罰ス可キ行爲ノ嫌疑生スルトキハ刑事訴訟手續ノ完結ニ至ルマテ辯論ヲ中止ス可シ但し其罰ス可キ行爲ガ訴訟ノ裁判ニ影響ヲ及ホス下キニ限ル

第百二十三條 裁判所ハ分離若クハ併合ニ關シ發シタル命ヲ取消スコトヲ得

第百二十四條 裁判所ハ閉テタル辯論ノ再開ヲ命スルコトヲ得

第百二十五條 裁判所ハ辯論ニ與カル者日本語ニ通セサルトキハ通事ヲ立會ハシム但し裁判所構成法第百十八條ノ場合ハ此限ニ在ラス

第百二十六條 裁判所ハ辯論ニ與カル者聾又ハ啞ナルトキ之ニ文字ヲ以テ理會セシムルコトヲ得サル場合ニ限リ通事ヲ立會ハシムルコトヲ得

第百二十七條 裁判所ハ相當ノ演述ヲ爲ス能力ノ缺ケタル原告若クハ被告又ハ訴訟代理人若クハ輔佐人ニ其後ノ演述ヲ禁シ且新期日ヲ定メ辯護士ヲシテ演述セシム可キコトヲ命ス可シ
裁判所ハ裁判所ニ於テ辯論ヲ業トスル訴訟代理人若クハ輔佐人ヲ退斥セシムルコトヲ得此場合ニ於テハ新期日ヲ定メ且退斥ノ決定ヲ原告若クハ被告ニ送達ス可シ
本條ノ規定ニ從ヒ爲シタル命ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

辯護士ニハ本條ノ規定ヲ適用セス
 第二百二十八條 辯論ニ與カル者秩序維持ノ爲メ辯論ノ場所ヨリ退斥セラレタルトキハ申立ニ因リ本人ノ任意ニ退去シタルト同一ノ方法ヲ以テ之ヲ取扱フコトヲ得但裁判所構成法第一百十條ニ依リ中止シタル場合ハ此限ニ在ラス
 前條ノ場合ニ於テ禁止又ハ退斥ノ命ヲ受ケタル者再ヒ出頭スルトキハ前項ノ方法ヲ以テ之ヲ取扱フコトヲ得

第二百二十九條 口頭辯論ニ付テハ調書ヲ作ル可シ

調書ニハ左ノ諸件ヲ掲ク可シ

第一 辯論ノ場所、年月日

第二 判事、裁判所書記及ヒ立會ヒタル檢事若クハ通事ノ氏名

第三 訴訟物及ヒ當事者ノ氏名

第四 出頭シタル當事者、法律上代理人、訴訟代理人及ヒ輔佐人ノ氏名若シ原告若クハ被告關席シタルトキハ其關席シタルコト

第五 公ニ辯論ヲ爲シ又ハ公開ヲ禁シタルコト

第三百十條 辯論ノ進行ニ付テハ其要領ノミヲ調書ニ記載ス可シ

調書ニ記載シテ明確ニス可キ諸件ハ左ノ如シ

第一 自白、認諾、拋棄及ヒ和解

第二 明確ニス可キ規定アル申立及ヒ陳述

第三 證人及ヒ鑑定人ノ供述但其供述ハ以前聽カサルモノナルトキ又ハ以前ノ供述ニ異ナルト

第四百一 檢證ノ結果
 第四百二 檢證ノ結果
 第四百三 檢證ノ結果

第五 書面ニ作リ調書ニ添附セサル裁判(判決、決定及ヒ命令)

第六 裁判ノ言渡

附録トシテ調書ニ添附シ且調書ニ附録トシテ表示シタル書類ニ於ケル記載ハ調書ニ於ケル記載ニ同シ

第三百三十一條 前條第一號乃至第四號ニ掲ケタル調書ノ部分ハ法廷ニ於テ之ヲ關係人ニ讀聞カセ

又ハ隨覽ノ爲メ之ヲ關係人ニ示ス

調書ニハ前項ノ手續ヲ履ミタルコト及ヒ承諾ヲ爲シタルコト又ハ承諾ヲ拒ミタル理由ヲ附記ス可シ

第三百三十二條 調書ニハ裁判長及ヒ裁判所書記署名捺印ス可シ

裁判長差支アルトキハ官等最モ高キ陪席判事之ニ代リ署名捺印ス區裁判所判事差支アルトキハ

其裁判所書記ノ署名捺印ヲ以テ足ル

第三百三十三條 受命判事若クハ受託判事又ハ區裁判所判事法廷外ニ於テ爲ス審問ニモ亦裁判所

書記ヲ立會ハシム

前四條ノ規定ハ右ノ審問調書ニ之ヲ適用ス

第三百三十四條 口頭辯論ノ爲メ規定シタル方式ノ遵守ハ調書ヲ以テ之ヲ證スルコトヲ得

第三百三十五條 此法律ニ從ヒ口頭ヲ以テ訴、抗告、申立、申請及ヒ陳述ヲ爲シ又ハ證書ヲ拒ム場合

ニ於テハ裁判所書記ハ其調書ヲ作ル可シ

第二節 送達

第三百三十六條 送達ハ裁判所書記職權ヲ以テ之ヲ爲サシムルコトヲ得。裁判所書記職權ニ送達ノ施行ヲ委任シ又ハ送達ヲ施行ス可キ地ヲ管轄スル區裁判所ノ書記ニ送達ノ施行ヲ執達吏ニ委任ス可キコトヲ囑託ス。

裁判所ノ書記ハ郵便ニ依リテハ亦送達ヲ爲サシムルコトヲ得。第二項ノ場合ニ於テハ執達吏又第三項ノ場合ニ於テハ郵便配達人ヲ以下ニ規定スル送達吏ト爲ス。

第三百三十七條 送達ハ其送達ス可キ書類ノ正本又ハ認證シタル謄本ヲ交付ス可キ規定アルトキハ其正本又ハ其謄本ノ交附ヲ以テ之ヲ爲シ其他ノ場合ニ於テハ謄本ノ交付ヲ以テ之ヲ爲ス。

原告若クハ被告數人ノ代理人ニ爲シ又ハ同一ナル原告若クハ被告ノ代理人數人中ノ一人ニ爲ス可キ送達ハ謄本又ハ正本ノ一通ヲ交付スルヲ以テ足ル。

第三百三十八條 訴訟能力ヲ有セサル原告若クハ被告ニ對スル送達ハ其法律上代理人ニ之ヲ爲ス。公又ハ私ノ法人及ヒ其資格ニ於テ訴ヘ又ハ訴ヘラレルコトヲ得ル會社又ハ社團ニ對スル送達ハ其首長又ハ事務擔當者ニ之ヲ爲スヲ以テ足ル。

數人ノ首長若クハ事務擔當者アル場合ニ於テハ送達ハ其一人ニ之ヲ爲スヲ以テ足ル。第三百三十九條 豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル下士以下ノ軍人、軍屬ニ對スル送達ハ其所屬ノ長官又ハ隊長ニ之ヲ爲ス。

第四百十條 囚人ニ對スル送達ハ監獄署ノ首長ニ之ヲ爲ス。第四百十一條 送達ハ財産權上ノ訴訟ニ付テハ總代理人ニ之ヲ爲シ又商業上ヨリ生シタル訴訟ニ

付テハ代理人ニ之ヲ爲スヲ以テ原告若クハ被告ノ本人ニ爲シタルト同一ノ效力ヲ有ス。

第四百十二條 訴訟代理人アルトキハ送達ハ其代理人委任ノ旨趣ニ依リ原告若クハ被告ノ代理ヲ爲ス權ヲ有スルトキニ限リ其代理人ニ之ヲ爲ス。

然レトモ原告若クハ被告ノ本人ニ爲シタル送達ハ其訴訟代理人アルトキト雖モ效力ヲ有ス。

第四百十三條 受訴裁判所ノ所在地ニ住居ヲモ事務所ヲモ有セサル原告若クハ被告ハ其所在地ニ假住所ヲ選定シテ之ヲ届出ツ可シ。

假住所選定ノ届出ハ遅クモ最近ノ口頭辯論ニ於テ之ヲ爲シ又其前ニ書面ヲ差出ストキハ其書面ヲ以テ爲ス可シ。

前項ノ届出ヲ爲サザルトキハ裁判所書記又ハ其委任ヲ受ケタル吏員交付ス可キ書類ヲ原告若クハ被告ノ名宛ニテ郵便ニ付シテ送達ヲ爲スコトヲ得此送達ハ其書類ノ原告若クハ被告ニ到達スルト否トヲ問ハス又何時ニ到達スルトヲ問ハス郵便ニ付シタル時ヲ以テ之ヲ爲シタルモノト看做ス。

第四百十四條 送達ハ何レノ地ヲ問ハス送達ヲ受ク可キ人ニ出會ヒタル地ニ於テ之ヲ爲スコトヲ得然レトモ其人カ其地ニ住居又ハ事務所ヲ有スルトキ其住居又ハ事務所ノ外ニ於テ爲シタル送達ハ其受取ヲ拒マザリシトキニ限リ效力ヲ有ス。

第三百三十八條第二項ノ場合ニ於テ特別ノ事務所アルトキハ其事務所ノ外ニ於テ法律上代理人又ハ首長若クハ事務擔當者ニ爲シタル送達ハ其受取ヲ拒マザリシ時ニ限リ效力ヲ有ス。

第四百十五條 送達ヲ受ク可キ人ニ住居ニ於テ出會ハザルトキハ其住居ニ於テスル送達ハ成長シタル同居ノ親族又ハ雇人ニ之ヲ爲スコトヲ得。

此規定ニ從ヒ送達ヲ施行スルコトヲ得サルトキハ其送達ハ交付ス可キ書類ヲ其地ノ市町村長ニ預置キ送達ノ告知書ヲ作りテ住居ノ戸ニ貼附シ且近隣ニ住居スル者二人ニ其旨ヲ口頭ヲ以テ通知シテ之ヲ爲スコトヲ得

第四百四十六條 住居ノ外ニ事務所ヲ有スル人ニ對スル送達ハ事務所ニ於テ之ニ出會ハサルトキハ其事務所ニアル營業使用人ニ之ヲ爲スコトヲ得此規定ハ辯護士ニモ亦之ヲ適用ス但此場合ニ於ケル送達ハ筆生ニモ亦之ヲ爲スコトヲ得

第四百四十七條 第三百三十八條第二項ノ場合ニ於テ法律上代理人又ハ首長若クハ事務擔當者ニ事務所ニ於テ出會ハス又ハ此等ノ者受取ニ付キ差支アルトキハ送達ハ事務所ニ在ル他ノ役員又ハ雇人ニ之ヲ爲スコトヲ得

第四百四十八條 前二條ノ規定ニ從ヒ送達ヲ施行スルコトヲ得サルトキハ第四百四十五條第二項ニ準テ送達ヲ爲ス可シ但住居ニ於ケル送達ヲ施行スルヲ得サルコトノ明白ナルトキニ限ル

第四百四十九條 法律上ノ理由ナクシテ送達ノ受取ヲ拒ムトキハ交付ス可キ書類ヲ送達ノ場所ニ差置ク可シ

第五百十條 日曜日及ヒ一般ノ祝祭日ニハ執達吏ノ爲ス可キ送達ハ裁判官ノ許可ヲ得ルトキニ限リ之ヲ施行スルコトヲ得

前項ノ規定ハ郵便ニ付シテ爲ス送達ヲ除ク外ハ夜間ニ爲ス可キ送達ニ之ヲ適用ス夜間トハ日没ヨリ日出ヌテノ時間ヲ謂フ

右ノ許可ハ受訴裁判所ノ裁判長又ハ送達ヲ爲ス可キ地ヲ管轄スル區裁判所ノ判事之ヲ與ヘ又ハ受命判事若クハ受託判事ノ完結ス可キ事件ニ在テハ其判事之ヲ與フ

第五百一十條 送達ニ付テハ之ヲ施行スル吏員ハ送達ノ場所、年月日時、方法及ヒ受取人ノ受取證並ニ送達吏ノ署名捺印ヲ具備スル證書ヲ作りテ送達ノ要ス

受取人受取ヲ拒ミ若クハ受取證ヲ出タスコトヲ拒ミタルトキ又ハ受取證ヲ作ルコト能ハサル旨ヲ述フルトキハ之ヲ送達證書ニ記載ス可シ

第五百四十三條 第三項ノ場合ニ於テハ郵便ニ付シタル吏員ノ報告書ヲ以テ送達ノ證ト爲スニ足ル

第五百五十二條 外國ニ在ル本邦ノ公使及ヒ公使館ノ官吏並ニ其家族ニ對スル送達ハ外務大臣ニ囑託シテ之ヲ爲ス

第五百五十三條 前條ノ場合ヲ除ク外外國ニ於テ施行ス可キ送達ハ外國ノ管轄官廳又ハ外國ニ駐在スル帝國ノ公使又ハ領事ニ囑託シテ之ヲ爲ス

第五百五十四條 出陣ノ軍隊又ハ役務ニ服シタル軍艦ノ乗組員ニ屬スル人ニ對スル送達ハ上班司令官廳ニ囑託シテ之ヲ爲スコトヲ得

第五百五十五條 前三條ノ場合ニ於テ必要ナル囑託書ハ受訴裁判所ノ裁判長之ヲ發ス

第五百五十六條 原告若クハ被告ノ現在地知レザルトキ又ハ外國ニ於テ爲ス可キ送達ニ付テハ其規定ニ從フコト能ハス若クハ之ニ從フモ其效ナキコトヲ豫知スルトキハ其送達ハ公ノ告示ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第五百五十七條 公示送達ハ原告若クハ被告ノ申立ニ因リ裁判所ノ命ヲ以テ裁判所書記之ヲ取扱
此送達ハ交付ス可キ書類ヲ裁判所ノ掲示板ニ貼附シテ之ヲ爲ス判決及ヒ決定ニ在テハ其裁判ノ
部分ノミヲ貼附ス可シ

右ノ外裁判所ハ送達ス可キ書類ノ抄本ヲ一箇又ハ數箇ノ新聞紙ニ一回又ハ數回掲載ス可キヲ命
スルコトヲ得其抄本ニハ裁判所ハ當事者並ニ訴訟物及ヒ送達ス可キ書類ノ要旨ヲ掲グルコトヲ
要ス

第五百五十八條 公示送達ハ書類ノ貼附ヨリ十四日ヲ經過シタル日ヲ以テ之ヲ爲シタルモノト看做
ス然レトモ裁判所ハ公示送達ヲ命スルニ際シ此ヨリ長キ期間ヲ必要トスルトキハ相當ナル期間
ヲ定ムルコトヲ得

同一ノ事件ニ付キ同一ノ原告若クハ被告ニ對シテ爲ス其後ハ公示送達ハ貼附ヲ以テ之ヲ爲シタ
ルモノト看做ス

第三百節 期日及ヒ期間
第五百十九條 期日ハ裁判長日及ヒ時ヲ以テ之ヲ定ム
第六十條 期日ハ已メテ得サル場合ニ限リ日曜日及ヒ一般ノ祝祭日ニ之ヲ定ムルコトヲ得

第六十一條 期日ニ付テハ呼出シ裁判長ノ命ニ從ヒ裁判所書記正本ノ送達ヲ以テ之ヲ爲ス但在
延シタル者ニ期日ヲ定メ出頭ヲ命シタルトキハ之ヲ送達スルコトヲ要セス
第六十二條 期日ハ裁判所内ニ於テ之ヲ去開ク但臨檢又ハ裁判所ニ出頭スルニ差支アル人ノ審問
其他裁判所内ニ於テ爲スコトヲ得サル行爲ヲ要スルトキハ此限ニ在ラス

第六十三條 期日ハ事件ヲ呼上テ以テ始マル

原告若クハ被告カ期日ノ終ニ至ルマテ辯論ヲ爲ササルトキハ期日ヲ怠リタルモノト看做ス
第六十四條 裁判所又ハ裁判長ノ定ムル期間ノ進行ハ期間ヲ定メタル書類ノ送達ヲ以テ始マリ
又其送達ヲ要セサル場合ニ於テハ期間ノ言渡ヲ以テ始マル但期間指定ノ際此ヨリ遅キ起期ヲ定
メタルトキハ此限ニ在ラス

第六十五條 期間ヲ計算スルニ時ヲ以テスルモノハ即時ヨリ起算シ又日ヲ以テスルモノハ初日
ヲ算入セス

第六十六條 一日ノ期間ハ二十四時トシ一個月ノ期間ハ三十日トシ一年ノ期間ハ曆ニ從フ
期間ノ終カ日曜日又ハ一般ノ祝祭日ニ當ルトキハ其日ヲ期間ニ算入セス

第六十七條 法律上ノ期間ハ裁判所ノ所在地ニ住居セサル原告若クハ被告ノ爲メ其住居地ト裁
判所所在地トノ距離ノ割合ニ應シ海陸路八里毎ニ一日ヲ伸長ス八里以外ノ端數三里ヲ超ユルト
キ亦同シ

裁判所ハ外國又ハ島嶼ニ於テ住所ヲ有スル原告若クハ被告ノ爲メ特ニ附加期間ヲ定ムルコトヲ
得

第六十八條 期間ノ進行ハ裁判所ノ休暇ニ依リテ停止ス其期間ノ殘餘ノ部分ハ休暇ノ終ヲ以テ
其進行ヲ始ム期間ノ初カ休暇ニ當ルトキハ其期間ノ進行ハ休暇ノ終ヲ以テ始マル
前項ノ規定ハ不變期間及ヒ休暇事件ノ期間ニハ之ヲ適用セス
不變期間ハ此法律ニ於テ不變期間トシテ掲ケタル期間ニ限ル
休暇事件ハ裁判所構成法第二百二十八條第二百二十九條ニ掲ケタル事件ヲ謂フ

第六十九條 期日之變更、辯論ノ延期、辯論續行ノ期日ノ指定ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得但申立ニ因ルル期日ノ變更ハ合意ノ場合ヲ除ク外顯著ナル理由アルトキニ限り之ヲ許ス

第七十條 期間ハ不變期間ヲ除ク外當事者ノ合意ノ申立ニ因リ之ヲ短縮シ又ハ伸長スルコトヲ得

第六十八條 裁判所又ハ裁判長ノ定ムル期間及ヒ法律上ノ期間ハ合意ナキモ申立ニ因リ顯著ナル理由アルトキハ之ヲ短縮シ又ハ伸長スルコトヲ得然レトモ法律上ノ期間ノ短縮又ハ伸長ハ此法律ニ特定シタル場合ニ限り之ヲ許ス

伸長ニ係ル新期間ハ前期間ノ満了ヨリ之ヲ起算ス

第七十一條 期日ノ變更又ハ期間ノ短縮若クハ伸長ニ付テハ申請ノ理由ハ之ヲ説明ス可シ其申請ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

申請ノ裁判ハ口頭辯論ヲ經スルコトヲ得

同一期日ノ再度ノ變更又ハ同一期間ノ再度ノ伸長ハ相手方ノ承諾書ヲ提出セサルトキハ相手方ハ審訊シ終ル後ニ限り之ヲ許スコトヲ得又相手方ハ異議ヲ述フルトキハ顯著ナル差支ノ理由及ヒ其差支ヲ除去スルコトノ特別ナル困難ヲ生シタルコトヲ證スルトキニ限り之ヲ許スコトヲ得

訴訟代理人ノ差支ニ原因スル期日ノ再度ノ變更又ハ期間ノ再度ノ伸長ハ相手方ノ承諾アルニ非ズ

期日ノ變更又ハ期間ノ伸長ニ付テハ申請ヲ却下シ裁判ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得

第七十二條 本節ニ於テ裁判所及ヒ裁判長ニ與ヘタル權ハ受命判事又ハ受託判事モ亦其定ム可

第七十三條 訴訟行爲ヲ怠ラシメ原告若クハ被告其訴訟行爲ヲ爲ス權利ヲ失フ但此法律ニ於テ追完ヲ許ストキハ此限ニ在ラズ

法律上懈怠ノ結果ハ當然生ズルモノトス但此法律ニ於テ失權ヲ爲サシムルコトニ付キ相手方ハ申立ヲ要スルヲ限リ此限ニ在ラズ

第七十四條 天災其他避け得カラサル事變ノ爲ニ不變期間ヲ遵守スルコトヲ得サル原告若クハ被告ニハ申立ニ因リ原狀回復ヲ許ス

原告若クハ被告ハ故障期間ヲ懈怠シタルトキハ其過失ニ非スシテ關席判決ヲ送達ヲ知ラザリシ場合ニ於テ亦之ニ原狀回復ヲ許ス

第七十五條 原狀回復ハ十四日ノ期間内ニ之ヲ申立ツルコトヲ要ス

右期間ハ障碍ノ止マレヨリ以テ始マル此期間ハ當事者ノ合意ニ因リ之ヲ伸長スルコトヲ得

懈怠シタル不變期間ノ終ヨリ起算シテ一年ノ満了後ハ原狀回復ヲ申立ツルコトヲ得

第七十六條 原狀回復ハ追完スル訴訟行爲ニ付キ裁判ヲ爲ス權ハ必裁判所ニ書面ヲ差出シテ之ヲ申立ツ可シ

此書面ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

- 第一 原狀回復ノ原因タル事實
- 第二 原狀回復ノ疏明方法

第三 懈怠シタル訴訟行為ノ追完

即時抗告ヲ提出シテ懈怠シタルトキハ原狀回復ノ申立ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ抗告裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得

第百七十七條 原狀回復ノ申立ニ付テノ訴訟手續ハ追完スル訴訟行為ニ付テノ訴訟手續ト之ヲ併合ス然レドモ裁判所ガ先ツ申立ニ付テノ辯論及ヒ裁判ノミニ其訴訟手續ヲ制限スルコトヲ得

申立ノ許否ニ關シテ裁判及ヒ其裁判ニ對スル不服ノ申立ニ付テハ追完スル訴訟行為ニ於テ行ハルヘキ規定ヲ準用ス然レドモ申立ヲ爲シタル原告若クハ被告ハ故障ヲ爲スコトヲ得ス

原狀回復ノ費用ハ申立人ノ負擔ス但相手方ノ不當ナル異議ニ因リ生シタルモノハ此限ニ在ラズ

第五節 訴訟手續ノ中斷及ヒ中止

第百七十八條 原告若クハ被告ノ死亡シタル場合ニ於テハ承繼人カ訴訟手續ヲ受繼クマテ之ヲ中斷ス

受繼ヲ遲滞シタルトキハ裁判所ハ申立ニ因リ受繼及ヒ本案辯論ノ爲メ其承繼人ヲ呼出ス

承繼人期日ニ出頭セザルトキハ申立ニ因リ相手方ノ主張シタル承繼ヲ自白シタルモノト看做シ且裁判所ガ欠席判決ヲ以テ承繼人訴訟手續ヲ受繼キタリト言渡ス又本案ノ辯論ハ故障期間ニ滿了後始メテ之ヲ爲シ又其期間内ニ故障ヲ申立テタルトキハ其完結後始メテ之ヲ爲ス

第百七十九條 原告若クハ被告ノ財産ニ付キ破産ノ開始シタル場合ニ於テ訴訟手續ハ破産財團ニ關スルトキハ破産ニ付テテ規定ニ從ヒ手續ヲ受繼キ又ハ破産手續ヲ解止スルマテ之ヲ中斷ス

第百八十條 原告若クハ被告カ訴訟能力ヲ失ヒ又ハ其法律上代理人カ死亡シ又ハ其代理權カ原告

若クハ被告カ訴訟能力ヲ得以前ニ消滅シタルトキハ訴訟手續ハ法律上代理人又ハ新法律上代理人カ其任設ヲ相手方ニ通知シ又ハ相手方カ訴訟手續ヲ續行セントスルコトヲ其代理人ニ通知ス

第百八十一條 原告若クハ被告カ死亡ニ因リ訴訟手續ヲ中斷スル場合ニ於ケル訴訟手續ノ受繼ニ關シ遺産ニ付キ管理人任設スルトキハ前條ノ規定又遺産ニ付キ破産ヲ開始スルトキハ第百七十九條ノ規定ヲ適用ス

第百八十二條 戦争其他ノ事故ニ因リ裁判所ノ行務ヲ止メタルトキハ此事情ノ繼續間訴訟手續ヲ中斷ス

第百八十三條 訴訟代理人カ以テ訴訟ヲ爲ス場合ニ於テ原告若クハ被告カ死亡シ又ハ訴訟能力ヲ失ヒ又ハ法律上代理人カ死亡シ又ハ其代理權カ消滅スルトキハ委任消滅ノ通知ニ因リ訴訟手續ヲ中斷ス

訴訟手續ノ受繼ニ付テハ第百七十八條第百八十條等百八十一條ノ規定ニ從フ

第百八十四條 原告若クハ被告カ戦時兵役ニ服スルトキ又ハ官廳ノ布令、戦争其他ノ事變ニ因リ受訴裁判所ト交通ノ絶エタル地ニ在ルトキハ受訴裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ障碍ノ消滅スルマテ訴訟手續ヲ中止シ命スルコトヲ得

第百八十五條 訴訟手續中止ノ申請ハ受訴裁判所ニ之ヲ提出ス其申請ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

此裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

第百八十六條 訴訟手續ノ中斷及ヒ中止ハ各期間ノ進行ヲ止メ及ヒ中斷又ハ中止ノ終リタル後更

三全期間ノ進行ヲ始メル效力ヲ有スルハ其期間ノ進行ニ依リテハ其效力ハ中斷及ヒ中止ノ間本案ニ付キ爲シタル原告若クハ被告ノ訴訟行爲ハ他ノ一方ニ對シ其效力ナシ

口頭辯論ノ終結後ニ生シタル中斷ハ其辯論ニ基キ爲ス可キ裁判ノ言渡ヲ妨クルコト無シ

第百八十七條 中斷シ又ハ中止シタル訴訟手續ノ受繼及ヒ本節ニ定メタル通知ハ原告若クハ被告ヨリ其書面ヲ受訴裁判所ニ差出シ裁判所ハ相手方ニ之ヲ送達スヘシ

第百八十八條 當事者ハ訴訟手續ヲ休止ス可キ合意ヲ爲スコトヲ得其合意ハ不變期間ノ進行ニ影響ヲ及ボサス

口頭辯論ノ期日ニ於テ當事者雙方出頭セサルトキハ訴訟手續ハ其一方ヨリ更ニ口頭辯論ノ期日ヲ定ム可キコトヲ申立ツルマテ之ヲ休止ス

第二年内ニ前項ノ申立ヲ爲ササルトキハ本訴及ヒ反訴ヲ取下ケタルモノト看做ス

第百八十九條 本節ノ規定其他此法律ノ規定ニ基キ訴訟手續ノ中止ヲ命スル裁判ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得又其中止ヲ拒ム裁判ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第二章 第一審ノ訴訟手續

第百九十條 第一節 判決前ノ訴訟手續

第一 當事者及ヒ裁判ノ表示

第三十 提起シタル請求ノ一定ノ目的物及ヒ其請求ノ一定ノ原因

第三十一 一定ノ申立

此他訴狀ハ準備書面ニ關スル一般ノ規定ニ從ヒ之ヲ作リ且裁判所ノ管轄カ訴訟物ノ價格ニ依リ定マル場合ニ於テ訴訟物カ一定ノ金額ニ非サルトキハ其價格ヲ掲ケ可シ

第百九十二條 同一ノ被告ニ對スル原告ノ請求數箇アル場合ニ於テ其各請求ニ付キ受訴裁判所カ管轄權ヲ有シ且法律ニ於テ同一種類ノ訴訟手續ヲ許ストキハ原告ハ其請求ヲ一箇ノ訴ニ併合スルコトヲ得但民法ノ規定ニ反スルトキハ此限ニ在ラズ

第百九十二條 訴狀カ第百九十條第一號乃至第三號ノ規定ニ適セサルトキハ相當ノ期間ヲ定メ裁判長ノ命令ヲ以テ其期間内ニ欠缺ヲ補正ス可キコトヲ命ス若シ原告此命ニ從ハサルトキハ其期間ノ滿了後訴狀ヲ差戻ス可シ

此差戻ノ命令ニ對シテハ即時抗告ヲナスコトヲ得

第百九十三條 訴狀カ第百九十條第一號乃至第三號ノ規定ニ適スルトキハ口頭辯論ノ期日ヲ定メテ之ヲ被告ニ送達ス可シ

第百九十四條 訴狀ノ送達ト口頭辯論ノ期日トノ間ニハ少ナクトモ二十日ノ時間ヲ存スルコトヲ要ス

外國ニ於テ送達ヲ施行ス可キトキハ裁判長相當ノ時間ヲ定ム

第百九十五條 訴訟物ノ權利拘束ハ訴狀ノ送達ニ因リテ生ス

第一 權利拘束ノ繼續中原告若クハ被告ヨリ同一ノ訴訟物ニ付キ他ノ裁判所ニ於テ本訴又ハ反

訴ヲ以テ請求ヲ爲シタルトキハ相手方ハ權利拘束ノ抗辯ヲ爲スコトヲ得
第三 受訴裁判所ノ管轄ハ訴訟物ノ價格ノ増減、住所ノ變更其他管轄ヲ定ムル事情ノ變更ニ因
リ變換スルコト無シ

第三 原告ハ訴ノ原因ヲ變更スル權利ナシ但變更シタル訴ニ對シ本案ノ口頭辯論前被告カ異議
ヲ述ヘサルトキハ此限ニ在ラス

第九十六條 原告カ訴ノ原因ヲ變更セズシテ左ノ諸件ヲ爲ストキハ被告ハ異議ヲ述ズルコトヲ
得ス

第一 事實上又ハ法律上ノ申述ヲ補充シ又ハ更正スルコト
第二 本案又ハ附帶請求ニ付キ訴ノ申立ヲ擴張シ又ハ減縮スルコト

第三 最初求メタル物ノ滅盡又ハ變更ニ因リ賠償ヲ求ムルコト

第九十七條 訴ノ原因ニ變更ナシトスル裁判ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得

第九十八條 訴ノ全部又ハ一分ハ本案ニ付キ被告ノ第一口頭辯論ノ始マルマテハ被告ノ承諾
クシテ之ヲ取下ク又其後口頭辯論ノ終結ニ至ルマテハ被告ノ承諾ヲ得テ之ヲ取下クルコトヲ
得

訴ノ取下ハ口頭辯論ニ於テ之ヲ爲サザルトキハ書面ヲ以テ之ヲ爲ス可シ
訴狀ヲ既ニ送達シタル場合ニ於テハ訴取下ノ書面ハ之ヲ被告ニ送達ス可シ

適法ナル取下ハ權利拘束ノ總テノ效力ヲ消滅セシムル結果ヲ生ズ

第九十九條 訴訟送達ノ際十四日ノ期間内ニ答辯書ヲ差出スコトヲ被告ニ催告ス可シ

答辯書ニハ準備書面ニ關スル一般ノ規定ヲ適用ス

第二百條 訴カ管轄裁判所ニ於テ權利拘束ト爲リタルトキハ被告ハ原告ニ對シ其裁判所ニ反訴ヲ
起スコトヲ得

然レトモ財產權上ノ請求ニ非サル請求ニ係ル反訴又ハ目的物ニ付キ專屬管轄ノ規定アル反訴ハ
若シ其反訴カ本訴ナルトキ其裁判所ニ於テ管轄權ヲ有スコトキ場合ニ限り之ヲ爲スコトヲ許ス

反訴ニ對シテハ更ニ反訴ヲ爲スコトヲ得ス

第二百一條 反訴ハ答辯書若クハ特別ノ書面ヲ以テ又ハ口頭辯論中相手方ノ面前ニ於テ口頭ヲ以
テ之ヲ爲スコトヲ得

然レトモ答辯書差出ノ期間内ニ差出シタル書面ヲ以テ起ササル反訴ハ被告ノ請求ノ全部又ハ一
分ニ相殺ヲ爲スコトキ場合ニ於テ同時ニ被告カ自己ノ過失ニ因ラスシテ其以前反訴ヲ起サ得サ
リシコトヲ説明スルトキニ限り之ヲ爲スコトヲ許ス

第二百二條 訴ニ關スル此法律ノ規定ハ反訴ニ之ヲ適用ス但其規定ニ因リ差異ノ生スコトキハ
此限ニ在ラス

第二百三條 裁判長ハ申立ニ因リ其命令ヲ以テ第九十九條ニ定メタル期間ヲ相當ニ短縮若クハ
伸長シ又第九十四條ニ定メタル時間ヲ切迫ナル危險ノ場合ニ限り二十四時マテニ短縮スルコ
トヲ得

前項時間ノ短縮ハ此カ爲メ答辯書ヲ差出スコトヲ得サルトキト雖モ亦之ヲ爲スコトヲ得

本條ノ規定ハ第六十七條ニ掲ケタル規定ヲ妨グス

第二百四條 各當事者ハ訴訟又ハ答辯書ニ掲ケサリシ事實上ノ主張若クハ證據方法又ハ申立ニ付

相手方カ豫メ穿鑿ヲ爲スニ非サレバ陳述ヲ爲ス能ハズ上豫知スル事項アル時ハ口頭辯論ノ前ニ書面ニテ差出ス可シ但其書面ヲ相手方ニ送達スル時間及ヒ相手方ヲシテ必要ナル穿鑿ヲ爲ス時間ヲ得セシム可シ

口頭辯論ノ延期ヲ爲ストキハ裁判所ハ爾後必要ナル準備書面ヲ差出ス可キ期間ヲ定ムルコトヲ得

第二百五條 口頭辯論ハ一般ノ規定ニ從ヒテ之ヲ爲ス

第二百六條 妨訴ノ抗辯ハ本案ニ付テノ被告ノ辯論前同時ニ之ヲ提出ス可シ

左ニ掲グルモノヲ妨訴ノ抗辯トス

第一 無訴權ノ抗辯

第二 裁判所管轄違ノ抗辯

第三 權利拘束ノ抗辯

第四 訴訟能力ノ欠缺又ハ法律上代理ノ欠缺ノ抗辯

第五 訴訟費用保認ノ欠缺ノ抗辯

第六 再訴ニ付キ前訴訟費用未済ノ抗辯

第七 延期ノ抗辯

本案ニ付キ被告ノ口頭辯論ヲ始メタル後ハ妨訴ノ抗辯ハ被告ノ有效ニ拋棄スルコトヲ得サルモノナルトキ又ハ被告ノ過失ニ非スシテ本案ノ辯論前ニ其抗辯ヲ主張スル能ハサリシコトヲ證明スルトキニ限リ之ヲ主張スルコトヲ得

第二百七條 被告カ妨訴ノ抗辯ニ基キ本案ノ辯論ヲ拒ムトキ又ハ裁判所カ申立ニ因リ若クハ職權

ヲ以テ別ニ辯論ヲ命スルトキハ其抗辯ニ付キ別ニ辯論ヲ爲シ及ヒ判決ヲ以テ裁判ヲ爲ス可シ

妨訴ノ抗辯ヲ棄却スル判決ハ上訴ニ關シテハ終局判決ト看做ス但裁判所ハ申立ニ因リ本案ニ付キ辯論ヲ爲ス可キヲ命スルコトヲ得

第二百八條 裁判所ハ計算事件、財産分別及ヒ此ニ類スル訴訟ニ於テハ口頭辯論ヲ延期シ準備手續ヲ命スルコトヲ得但妨訴ノ抗辯アリタルトキハ其完結後之ヲ爲ス

第二百九條 攻撃及ヒ防禦ノ方法(反訴、抗辯、再抗辯等)ハ第二百一一條ニ規定スル制限ヲ以テ判決ニ接著スル口頭辯論ノ終結ニ至ルマテ之ヲ提出スルコトヲ得

第三百十條 被告ヨリ時機ニ後レテ提出シタル防禦ノ方法ハ裁判所カ若シ之ヲ許スニ於テハ訴訟ヲ遅延ス可ク且被告ハ訴訟ヲ遅延セシメントスル故意ヲ以テ又ハ甚シキ怠慢ニ因リ早ク之ヲ提出セザリシコトノ心證ヲ得タルトキハ申立ニ因リ之ヲ却下スルコトヲ得

第三百十一條 訴訟ノ進行中ニ争ト爲リタル權利關係ノ成立又ハ不成立カ訴訟ノ裁判ノ全部又ハ一分ニ影響ヲ及ボストキハ判決ニ接著スル口頭辯論ノ終結ニ至ルマテ原告ハ訴ノ申立ノ擴張ニ依リ又被告ハ反訴ノ提起ニ依リ判決ヲ以テ其權利關係ヲ確定セシムコトヲ申立ルコトヲ得

第三百十二條 訴狀其他ノ準備書面ニ於テ主張セサル請求ノ權利拘束ハ口頭辯論ニ於テ其請求ヲ主張シタル時ヲ以テ始マル

第三百十三條 各當事者ハ事實上ノ主張ヲ證明シ又ハ之ヲ辯駁セン爲ニ用キントスル證據方法ヲ開示シ且相手方ヨリ開示シタル證據方法ニ付キ陳述ス可シ

各箇ノ證據方法ニ付テノ證據申出及ヒ之ニ關スル陳述ハ第六節乃至第十節ノ規定ニ從フ

第二百十四條 證據方法及ヒ證據抗辯ハ判決ニ接著スル口頭辯論ノ終結ニ至ルマテ之ヲ主張スル

コトヲ得

證據方法及ヒ證據抗辯ノ時機ニ後レタル提出ニ付テハ第二百十條ノ規定ヲ準用ス

第二百十五條 證據調査ニ證據決定ヲ以テスル特別ノ證據調手續ノ命令ハ第五節乃至第十節ノ規定ニ從フ

第二百十六條 當事者ハ訴訟ノ關係ヲ表明シ證據調ノ結果ニ付キ辯論ヲ爲ス可シ

受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ於テ證據調ヲ爲シタルトキハ當事者ハ證據調ニ關スル密問證書ニ基キ其結果ヲ演述ス可シ

第二百十七條 裁判所ハ民法又ハ此法律ノ規定ニ反セサル限りハ辯論ノ全旨趣及ヒ或ル證據調ノ結果ヲ斟酌シ事實上ノ主張ヲ眞實ナリト認ム可キヤ否ヤヲ自由ナル心證ヲ以テ判斷ス可シ

第二百十八條 裁判所ニ於テ顯著ナル事實ハ之ヲ證スルコトヲ要セス

第二百十九條 地方慣習法、商慣習及ヒ規約又ハ外國ノ現行法ハ之ヲ證ス可シ裁判所ハ當事者カ其證明ヲ爲スト否トニ拘ハラズ職權ヲ以テ必要ナル取調ヲ爲スコトヲ得

第二百二十條 此法律ノ規定ニ依リ事實上ノ主張ヲ疏明ス可キトキハ裁判官チシテ其主張ヲ眞實ナリト認メシム可キ證據方法ヲ申出ツルヲ以テ足ル但即時ニ爲スコトヲ得サル證據調ノ疏明ノ方法トシテハ之ヲ許サス

第二百二十一條 裁判所ハ事件ノ如何ナル程度ニ在ルチ間ハス自ラ又ハ受命判事若クハ受託判事ニ依リ訴訟又ハ或ル争點ノ和解ヲ試ムル權アリ和解ヲ試ムル爲ニハ當事者ノ自身出頭ヲ命スルコトヲ得

第二百二十二條 判決ヲ受ク可キ事項ノ申立ハ書面ニ基キ之ヲ爲スコトヲ要ス

書面ニ掲ケサル申立アルトキハ調書ニ附録トシテ添附ス可キ書面ヲ差出シテ之ヲ爲スコトヲ要ス

重要ノ點ニ於テ以前申立テタルモノト異ナル申立ニ付テモ亦同シ

本條ノ規定遵守セサルトキハ申立ナキモノト看做ス

第二百二十三條 前條ノ申立ヲ除ク外書面ニ掲ケサル重要ナル陳述又ハ其書面ノ旨趣ト重要ノ點ニ於テ差異ノ存スル事項ハ其差異ヲ附加、削除其他ノ變更ニ係ルチ間ハ申立ニ因リ又ハ職權

ヲ以テ調書若クハ其附録トシテ添附ス可キ爲メ差出シタル書面ニ依リテ之ヲ明確ニス可シ

第二百二十四條 當事者ハ訴訟記録ヲ閱覽シ且裁判所書記チシテ其正本、抄本及ヒ謄本ヲ付與セシムルコトヲ得

裁判長ハ第三者ガ權利上ノ利害ヲ疏明スルトキニ限り當事者ノ承諾ナクシテ訴訟記録ノ閱覽及ヒ其抄本並ニ謄本ノ付與ヲ許スコトヲ得

判決、決定、命令ノ草案及ヒ其準備ニ供シタル書類並ニ評議又ハ處罰ニ關スル書類ハ其原本ナルト謄本ナルトチ間ハス之ヲ閱覽スルコトヲ許サス

第二節 判決

第二百二十五條 訴訟カ裁判ヲ爲スニ熟スルトキハ裁判所ハ終局判決ヲ以テ裁判ヲ爲ス

同時ニ辯論及ヒ裁判ヲ爲ス爲メ併合シタル數箇ノ訴訟中ノ一ノミ裁判ヲ爲スニ熟スルトキモ亦同シ

第二百二十六條 一ノ訴ヲ以テ起シタル數箇ノ請求中ノ一箇又ハ一箇ノ請求中ノ二分又ハ反訴ヲ起シタル場合ニ於テ本訴若クハ反訴ノミ裁判ヲ爲スニ熟スルトキハ裁判所ハ終局判決ハ一分

判決)ヲ以テ裁判ヲ爲ス
 然レトモ裁判所ノ事件ノ事情ニ從ヒテ一分判決ヲ相當トセサルトキハ之ヲ爲サザルコトヲ得
 第二百二十七條 各箇ノ獨立ナル攻撃若クハ防禦ノ方法又ハ中間ノ争カ裁判ヲ爲スニ熟スルトキ
 ハ中間判決ヲ以テ裁判ヲ爲スコトヲ得
 第二百二十八條 請求ノ原因及ヒ數額ニ付キ争アルトキハ裁判所ハ先ツ其原因ニ付キ裁判ヲ爲ス
 コトヲ得
 請求ノ原因ナ正當ナリトスル判決ハ上訴ニ關シテハ終局判決ト看做シ其判決確定ニ至ルマテ爾
 後ノ手續ヲ中止ス然レトモ裁判所ハ申立ニ因リ其數額ニ付キ辯論ヲ爲ス可キヲ命スルコトヲ得
 第二百二十九條 口頭辯論ノ際原告其訴ヘタル請求ヲ拋棄シ又ハ被告之ヲ認諾スルトキハ裁判所
 ハ申立ニ因リ其拋棄又ハ認諾ニ基キ判決ヲ以テ却下又ハ敗訴ノ言渡ヲ爲ス可シ
 第二百三十條 判決ハ辯論ヲ經タル總テノ攻撃及ヒ防禦ノ方法ヲ包括ス
 然レトモ數箇ノ獨立ナル攻撃又ハ防禦ノ方法中其一箇ヲ適切ナリトスルトキハ裁判所ハ他ノ方
 法ニ付キ判斷スル義務ナシ
 第二百三十一條 裁判所ハ申立テサル事物ヲ原告若クハ被告ニ歸セシムル權ナシ
 裁判所ハ終局判決ヲ爲ス場合ニ於テハ訴訟費用ノ負擔ニ限リ申立アラサルモ判決ヲ爲ス可シ然
 レトモ一分判決ヲ爲ス場合ニ於テハ費用ノ裁判ヲ後ノ判決ニ讓ルコトヲ得
 第二百三十二條 判決ハ其基本タル口頭辯論ニ隨席シタル判事ニ限り之ヲ爲ス
 第二百三十三條 判決ハ口頭辯論ノ終結スル期日又ハ直チニ指定スル期日ニ於テ之ヲ言渡ス但其
 期日ハ七日ヲ過ケルコトヲ得ス

第二百三十四條 判決ノ言渡ハ判決主文ノ朗讀ニ因リ之ヲ爲ス爾後判決ノ言渡ハ其主文ヲ作ラサ
 ル前ト雖モ之ヲ爲スコトヲ得
 裁判ノ理由ヲ言渡スコトヲ至當ト認ムルトキハ判決ノ言渡ト同時ニ其理由ヲ朗讀シ又ハ口頭ニ
 テ其要領ヲ告ケ可シ

第二百三十五條 判決ノ言渡ハ當事者又ハ其一方ノ在廷スルト否トニ拘ハラズ其效力ヲ有ス
 言渡アリタル判決ニ基キ訴訟手續ヲ續行シ又ハ他ニ其判決ヲ使用スル原告若クハ被告ノ權ハ此
 法律ニ特定シタル場合ヲ除ク外相手方ニ其判決ヲ送達スルト否トニ拘ハラサルモノトス

第二百三十六條 判決ニハ左ノ諸件ヲ掲ケ可シ
 第一 當事者及ヒ其法律上代理人ノ氏名、身分、職業及ヒ住所
 第二 事實及ヒ争點ノ摘示但其摘示ハ當事者ノ口頭演述ニ基キ殊ニ其提出シタル申立ヲ表示シ
 テ之ヲ爲ス

第三 裁判ノ理由
 第四 判決主文

第五 裁判所ノ名稱、裁判ヲ爲シタル判事ノ官氏名

第二百三十七條 判決ノ原本ニハ裁判ヲ爲シタル判事署名捺印ス若シ陪席判事署名捺印スルニ邊
 支アルトキハ其理由ヲ開示シテ裁判長其旨ヲ附記シ裁判長差支アルトキハ官等最モ高キ陪席判
 事之ヲ附記ス

判決ノ原本ノ言渡ノ日ヨリ起算シテ七日内ニ裁判所書記ニ之ヲ交付ス可シ
 裁判所書記ハ言渡ノ日及ヒ原本領收ノ日ヲ原本ニ附記シ且其附記ニ署名捺印ス可シ

第二百三十八條 各當事者ハ判決ノ送達アラシキコトヲ申立ツルコトヲ得其申立アリタルトキハ判決ノ正本ヲ送達ス可シ

第二百三十九條 未タ判決ヲ言渡サス又ハ未タ判決ノ原本ニ署名捺印セサル間ハ裁判所書記ハ其正本、抄本及ヒ謄本ヲ付與スルコトヲ得ス

裁判所書記ハ判決ノ正本、抄本及ヒ謄本ニ署名捺印シ且裁判所ノ印ヲ捺シテ之ヲ認證ス可シ
第二百四十條 裁判所ハ其言渡シタル終局判決及ヒ中間判決ノ中ニ包含シタル裁判ニ羈束セラルル
第二百四十一條 裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ何時ニテモ判決中ノ違算、書損及ヒ此ニ類スル著シキ誤謬ヲ更正ス

此更正ニ付テハ口頭辯論ヲ經スシテ裁判ヲ爲スコトヲ得
右更正ノ申立ヲ却下スル決定ニ對シテハ上訴ヲ爲スコトヲ得ス更正ヲ宣言スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第二百四十二條 主タル請求若クハ附帶ノ請求又ハ費用ノ全部若クハ一分ノ裁判ヲ爲スニ際シ脱漏シタルトキハ申立ニ因リ追加ノ裁判ヲ以テ判決ヲ補充ス可シ
判決ノ言渡後直チニ追加裁判ノ申立ヲ爲ササルトキハ遅クモ判決ノ正本ヲ送達シタル日ヨリ起算シテ七日ノ期間内ニ之ヲ爲スコトヲ要ス

追加裁判ノ申立アルトキハ即時ニ又ハ新期日ヲ定メテ口頭辯論ヲ爲サシム可シ其辯論ハ訴訟ノ完結セサル部分ニ限リ之ヲ爲ス
第二百四十三條 判決ヲ更正シ又ハ補充スル裁判ハ判決ノ原本及ヒ正本ニ之ヲ追加シ若シ正本ニ之ヲ追加スルコトヲ得サルトキハ更正又ハ補充ノ裁判ノ正本ヲ作ル可シ

第二百四十四條 判決ハ其主文ニ包含スルモノニ限リ確定力ヲ有ス

第二百四十五條 口頭辯論ニ基キ爲ス裁判所ノ決定ハ之ヲ言渡スコトヲ要ス

第二百三十三條、第二百三十四條ノ規定ハ裁判所ノ決定ニ之ヲ準用シ又第二百三十五條、第二百三十九條及ヒ第二百四十條ノ規定ハ裁判所ノ決定及ヒ裁判長並ニ受命判事又ハ受託判事ノ命令ニ之ヲ準用ス
言渡ヲ爲ササル裁判所ノ決定及ヒ言渡ヲ爲ササル裁判長並ニ受命判事又ハ受託判事ノ命令ハ職權ヲ以テ之ヲ當事者ニ送達ス可シ

第三節 關席判決
第二百四十六條 原告若クハ被告口頭辯論ノ期日ニ出頭セサル場合ニ於テハ出頭シタル相手方ノ申立ニ因リ關席判決ヲ爲ス

第二百四十七條 出頭セサル一方カ原告アルトキハ裁判所ハ關席判決ヲ以テ其訴ノ却下ヲ言渡ス可シ

第二百四十八條 出頭セサル一方カ被告ナルトキハ裁判所ハ被告方原告ノ事實上ノ口頭供述ヲ自白シタルモノト看做シ原告ノ請求ヲ正當ト爲ストキハ關席判決ヲ以テ被告ノ敗訴ヲ言渡シ又其請求ヲ正當ト爲ササルトキハ其訴ノ却下ヲ言渡ス可シ

第二百四十九條 延期シタル口頭辯論ノ期日又ハ口頭辯論ヲ續行スル爲ニ定ムル期日モ亦第二百四十六條ノ辯論期日ニ同シ

第二百五十條 原告若クハ被告出頭スルモ辯論ヲ爲ササルトキ又ハ辯論ヲ爲サスシテ任意ニ退廷シタルトキハ出頭セサルモノト看做ス

第二百五十一條 原告若クハ被告が本案ノ辯論ヲ爲シタルトキハ各箇ノ事實、證書又ハ發問ニ付キ陳述ヲ爲サス又ハ任意ニ退廷スルモ本節ノ規定ヲ適用セス

第二百五十二條 左ノ場合ニ於テハ闕席判決ノ申立ヲ却下ス然レトモ出頭シタル原告若クハ被告ハ口頭辯論ノ延期ヲ申立ツルコトヲ得

第一 出頭シタル原告若クハ被告が裁判所ノ職權上調査ス可キ事情ニ付キ必要ナル證明ヲ爲ス能ハサルトキ

第二 出頭セサル原告若クハ被告ニ口頭上事實ノ供述又ハ申立ヲ適當ナル時期ニ書面ヲ以テ通知セサルトキ

辯論ヲ延期シタルトキハ出頭セサル原告若クハ被告ヲ新期日ニ呼出ス可シ

第二百五十三條 闕席判決ノ申立ヲ却下スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得又其決定ヲ取消シタルトキハ出頭セサル原告若クハ被告ヲ新期日ニ呼出サスシテ闕席判決ヲ爲ス

第二百五十四條 裁判所ハ左ノ場合ニ於テハ職權ヲ以テ闕席判決ノ申立ニ付テノ辯論ヲ延期スルコトヲ得

第一 出頭セサル原告若クハ被告が合式ニ呼出サレザリシトキ

第二 出頭セサル原告若クハ被告が天災其他避ク可カラサル事變ノ爲ニ出頭スル能ハサルコトノ眞實ト認ム可キ事情アルトキ

出頭セザリシ原告若クハ被告ハ新期日ニ之ヲ呼出ス可シ

第二百五十五條 闕席判決ヲ受ケタル原告若クハ被告其判決ニ對シテ故障ヲ申立ツルコトヲ得故障申立ノ期間ハ十四日トス此期間ハ不變期間ニシテ闕席判決ノ送達ヲ以テ始マル

故障申立ハ判決ノ送達前ト雖モ之ヲ爲スコトヲ得

外國ニ於テ送達ヲ爲スコトキ又ハ公ノ告示ヲ以テ之ヲ爲スコトキハ裁判所ノ闕席判決ニ於テ故障期間ヲ定メ又ハ後日決定ヲ以テ之ヲ定ム其決定ハ口頭辯論ヲ經スシテ爲スコトヲ得

第二百五十六條 故障申立ハ闕席判決ヲ爲シタル裁判所ニ書面ヲ差出シテ之ヲ爲ス

此書面ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 故障ヲ申立テラレタル闕席判決ノ表示也

第二 判決ニ對スル故障ノ申立

此書面ニハ本案ニ付テノ口頭辯論準備ノ爲メ必要ナル事項アルトキモ亦之ヲ掲ク可シ

第二百五十七條 判然許ス可カラサル故障又ハ判然法律上ノ方式ニ適セス若クハ其期間ノ經過後ニ起シタル故障ハ裁判長ノ命令ヲ以テ之ヲ却下ス可シ

此却下ノ命令ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第二百五十八條 前條ノ場合ヲ除ク外裁判所ハ故障申立ノ書面ヲ相手方ニ送達シ且故障ニ付キ口頭辯論ノ新期日ヲ定メ當事者ノ雙方ヲ呼出ス可シ

第二百五十九條 裁判所ハ職權ヲ以テ故障ヲ許ス可キヤ否ヤ又法律上ノ方式ニ從ヒ若クハ其ノ期間ニ於テ故障ヲ申立テタルヤ否ヤヲ調査ス可シ

若シ此要件ノ一ヲ缺クトキハ判決ヲ以テ故障ヲ不適法トシテ棄却ス

第二百六十條 故障ヲ適法トスルトキハ訴訟ハ闕席前ノ程度ニ復ス

第二百六十一條 新辯論ニ基キ爲スコキ判決ハ闕席判決ト符合スルトキハ闕席判決ヲ維持スルコトヲ言渡シ其符合セサル場合ニ於テハ新判決ニ於テ闕席判決ヲ廢棄ス

第二百六十二條 法律ニ從ヒ關席判決ヲ爲シタルトキ關席ニ因リテ生シタル費用ハ相手方ノ不當ナル異議ニ因リ生セサルモノニ限リ故障ノ爲メ關席判決ヲ變更スル場合ニ於テモ其關席シタル原告若クハ被告ニ之ヲ負擔セシム

第二百六十三條 故障ヲ申立テタル原告若クハ被告口頭辯論ノ期日又ハ辯論延期ノ期日ニ出頭セサルトキハ第二百五十二條及ヒ第二百五十四條ニ規定シタル場合ヲ除ク外出頭シタル相手方ノ申立ニ因リ故障ヲ棄却スル新關席判決ヲ言渡ス

新關席判決ニ對シテハ故障ヲ申立ツルコトヲ得ス
第二百六十四條 故障ノ拋棄及ヒ其取下ニ付テハ控訴ノ拋棄及ヒ其取下ニ付テノ規定ヲ準用ス
第二百六十五條 本節ノ規定ハ反訴又ハ既ニ原因ノ確定シタル請求ノ數額ノ定テ目的物トスル訴訟手續ニ之ヲ準用ス

中間訴訟ノ辯論ノ爲メ期日ヲ定メタルトキハ其關席訴訟手續及ヒ關席判決ハ其中間訴訟ヲ完結スルニ止マリ本節ノ規定ヲ之ニ準用ス

第四節 計算事件、財産分別及ヒ此ニ類スル訴訟ノ準備手續

第二百六十六條 計算ノ當否、財産ノ分別又ハ此ニ類スル關係ヲ目的トスル訴訟ニ於テ計算書又ハ財産目錄ニ對シ許多ノ爭アル請求ノ生シ又ハ許多ノ爭アル異議ノ生シタルトキハ受訴裁判所ハ受命判事ノ面前ニ於ケル準備手續ヲ命スルコトヲ得

第二百六十七條 準備手續ヲ命スル決定ヲ言渡スニ際シ裁判長ハ受命判事ヲ指定シ決定施行ノ期日ヲ定ム可シ若シ裁判長此期日ヲ定メサルトキハ受命判事之ヲ定ム又受命判事其委任ヲ施行スルニ差支アルトキハ裁判長更ニ他ノ判事ヲ任ス

第二百六十八條 準備手續ニ於テハ調書ヲ以テ左ノ諸件ヲ明確ニス可シ

第一 如何ナル請求ヲ爲スヤ及ヒ如何ナル攻撃、防禦ノ方法ヲ主張スルヤ

第二 如何ナル請求及ヒ如何ナル攻撃、防禦ノ方法ヲ爭フヤ又ハ之ヲ爭ハサルヤ

第三 爭ト爲リタル請求及ヒ爭トナリタル攻撃、防禦ノ方法ニ付テハ其事實上ノ關係及ヒ當事者ノ表示シタル證據方法、主張シタル證據抗辯、證據方法並ニ證據抗辯ニ關シテ爲シタル陳述及ヒ提出シタル申立

此手續ハ受訴裁判所ニ於テ訴訟又ハ中間訴訟カ判決又ハ證據決定ヲ爲スニ熟スルマテ之ヲ續行ス可シ

第二百六十九條 原告若クハ被告カ期日ニ於テ受命判事ノ面前ニ出頭セサルトキハ受命判事ハ前條ノ規定ニ依リ調書ヲ以テ出頭シタル原告若クハ被告ノ提供ヲ明確ニシ且新期日ヲ定メ出頭セサル原告若クハ被告ニハ調書ノ謄本ヲ付與シテ新期日ニ之ヲ呼出ス可シ

原告若クハ被告カ新期日ニモ亦出頭セサルトキハ送達セシ調書ニ掲ケタル相手方ノ事實上ノ主張ヲ明白シタリト看做シ其主張ニ付テノ準備手續ハ完結シタルモノトス

第二百七十條 受訴裁判所ハ準備手續ノ終結後ニ口頭辯論ノ期日ヲ定メ之ヲ當事者ニ通知ス可シ

第二百七十一條 當事者ハ口頭辯論ニ於テ準備手續ノ結果ヲ調書ニ基キ演述ス可シ
原告若クハ被告カ出頭セサルトキハ準備手續ニ於テ爭ハサル請求ハ一分判決ヲ以テ之ヲ完結ス

其他ニ付テハ申立ニ因リテ關席判決ヲ爲ス可シ

第二百七十二條 受命判事ノ調書ヲ以テ明確ニス可キ事實又ハ證書ニ付キ陳述ヲ爲サス又ハ之ヲ

拒ミタルトキハ口頭辯論ニ於テ之ヲ追完スルコトヲ得ス
請求、攻撃若クハ防禦ノ方法、證據方法及ヒ證據抗辯ニシテ受命判事ノ調書ヲ以テ之ヲ明確ニセ
サルモノニ付テハ後日ニ至リ始メテ生シ又ハ後日ニ至リ始メテ原告若クハ被告ノ知りタルコト
ヲ疏明スルトキニ限リ口頭辯論ニ於テ之ヲ主張スルコトヲ得

第五節 證據調ノ總則

第二百七十三條 證據調ハ受訴裁判所ニ於テ之ヲ爲スヲ以テ通例トス

證據調ハ此法律ニ定メタル場合ニ限リ受訴裁判所ノ部員一名ニ之ヲ命シ又ハ區裁判所ニ之ヲ囑
託スルコトヲ得

此證據調ヲ命スル決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第二百七十四條 當事者ノ申立テタル數多ノ證據中其調フ可キ限度ハ裁判所之ヲ定ム

當事者ノ演述ニ引續キ直チニ證據調ヲ爲サスシテ受訴裁判所ニ於テ新期日ニ之ヲ爲シ又ハ受命
判事若クハ受託判事ノ面前ニ於テ之ヲ爲ス可キトキハ證據決定ニ因リ之ヲ命ス可シ

第二百七十五條 證據調ニ付キ不定時間ノ障礙アルトキハ申立ニ因リ相當ノ期日ヲ定ム可シ此期
間ノ滿了後ト雖モ訴訟手續ヲ遲滞セシメサル限リハ其證據方法ヲ用キルコトヲ得

第二百七十六條 證據決定ニハ左ノ諸件ヲ掲ク可シ

第一 證ス可キ係爭事實ノ表示

第二 證據方法ヲ表示殊ニ證人又ハ鑑定人ヲ訊問ス可キトキハ其表示

第三 證據方法ヲ申立テタル原告若クハ被告ノ表示

第二百七十七條 證據決定ノ變更ハ其決定ノ施行完結前ニ在リテ新ナル辯論ニ基クトキニ限リ之

チ申立ツルコトヲ得

證據決定ノ施行ハ職權ヲ以テ之ヲ爲ス

第二百七十八條 受訴裁判所ノ部員カ證據調ヲ爲ス可キトキハ裁判長證據決定言渡ノ際受命判事
ヲ指名シ且證據調ノ期日ヲ定ム若シ其期日ヲ定メサルトキハ受命判事之ヲ定ム

受命判事其命ヲ施行スルニ差支アルトキハ裁判長更ニ他ノ部員ヲ命ス

第二百七十九條 他ノ裁判所ニ於テ證據調ヲ爲ス可キトキハ裁判長ハ其囑託書ヲ發ス可シ
證據調ニ關スル書類ハ原本ヲ以テ受託判事ヨリ受訴裁判所書記ニ之ヲ送致シ其書記ハ之ヲ受領
シタルコトヲ當事者ニ通知ス可シ

第二百八十條 受命判事又ハ受託判事カ證據調ノ期日ヲ定メタルトキハ其期日及ヒ場所ヲ當事者
ニ通知ス可シ

第二百八十一條 外國ニ於テ爲ス可キ證據調ハ外國ノ管轄官廳又ハ其國駐在ノ帝國ノ公使若クハ
領事ニ囑託シテ之ヲ爲ス其囑託ニ付テハ第五百二十二條及ヒ第五百十五條ノ規定ヲ準用ス

第二百八十二條 受命判事又ハ受託判事ハ他ノ裁判所ニ於テ證據調ヲ爲ス可キコトヲ至當ナル原
因ノ爾後ニ生シタルトキハ其裁判所ニ證據調ヲ囑託スルコトヲ得此ノ囑託ヲ爲シタルトキハ當
事者ニ之ヲ通知ス可シ

第二百八十三條 受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ於テ證據調ノ際ニ爭ヲ生シ其爭ノ完結スルニ非
サレハ證據調ヲ續行スルコトヲ得且其判事之ヲ裁判スル權ヲキトキハ其完結ハ受訴裁判所之
ヲ爲ス

第二百八十四條 當事者ノ一方又ハ雙方證據調ノ期日ニ出頭セサルトキハ事件ノ程度ニ因リ爲シ

得ヘキ限リハ證據調ヲ爲ス可シ
原告若クハ被告ノ出頭セサルカ爲ニ證據調ノ全部又ハ一分ヲ爲スコトヲ得サル場合ニ於テハ其道完又ハ補充ハ此カ爲メ訴訟手續ノ遲滞セサルトキ又ハ舉證者其過失ニ非スシテ前期日ニ出頭スル能ハサリシコトヲ疏明スルコトニ限リ判決ニ接著スル口頭辯論ノ終結ニ至ルマテ申立ニ因リ之ヲ命ス

第二百八十五條 裁判所ハ事件ノ未タ判決ヲ爲スニ熟セスト認ムルトキハ證據調ノ補充ヲ決定スルコトヲ得

第二百八十六條 證據調又ハ其續行ノ爲メ新期日ヲ定ムル必要アルトキハ舉證者又ハ當事者雙方前期日ニ出頭セサリシトキト雖モ職權ヲ以テ之ヲ定ム

第二百八十七條 受訴裁判所ニ於テ證據調ヲ爲ストキハ其期日ハ同時ニ口頭辯論ヲ續行スル期日ナリトス

受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ於テ證據調ヲ爲スコトヲ命シタルトキハ受訴裁判所ハ證據決定中ニ併セテ口頭辯論續行ノ期日ヲ定ムルコトヲ得若シ之ヲ定メサルトキハ證據調ノ終結後職權ヲ以テ其期日ヲ定メ之ヲ當事者ニ通知ス可シ

第二百八十八條 舉證者ハ裁判所ノ定ムル期間内ニ證據調ノ費用ヲ豫納ス可シ若シ其期間内ニ豫納セサルトキハ證據調ヲ爲サス但期間ノ滿了後ト雖モ豫納シタルトキハ訴訟手續ノ遲滞ヲ生セサル場合ニ限リ證據調ヲ許ス

第六節 人 證

第二百八十九條 何人ヲ問ハス法律ニ別段ノ規定ナキ限リハ民事訴訟ニ關シ裁判所ニ於テ證言ス

ル義務アリ

第二百九十條 官吏、公吏ハ退職ノ後ト雖モ其職務上默秘ス可キ義務アル事情ニ付テハ其所屬廳又ハ其最後ノ所屬廳ノ許可ヲ得タルトキニ限リ證人トシテ之ヲ訊問スルコトヲ得大臣ニ付テハ勅許ヲ得ルコトヲ要ス

此許可ハ證言カ國家ノ安寧ヲ害スル恐アルトキニ限リ之ヲ拒ムコトヲ得
右許可ハ受訴裁判所ヨリ之ヲ求メ且證人ニ之ヲ通知ス可シ

第二百九十一條 入證ノ申出ハ證人ヲ指名シ及ヒ證人ノ訊問ヲ受ク可キ事實ヲ表示シテ之ヲ爲ス

第二百九十二條 證人ノ呼出狀ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 證人及ヒ當事者ノ表示

第二 證據決定ノ旨趣ニ依リ訊問ヲ爲スコキ事實ノ表示

第三 證人ノ出頭ス可キ場所及ヒ日時

第四 出頭セサルトキハ法律ニ依リ處罰ス可キ旨

第五 裁判所ノ名稱

第二百九十三條 豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍屬ヲ證人トシテ呼出スニハ其所屬ノ長官又ハ隊長ニ囑託シテ之ヲ爲ス其長官又ハ隊長ハ期日ヲ遵守セシムル爲ニ其呼出ヲ受ケタル者ノ關勤ヲ許スコシ若シ軍務上之ヲ許ス能ハサルトキハ其旨ヲ裁判所ニ通知シ且他ノ期日ヲ定ムル求ヲ爲ス義務アリ

第二百九十四條 合式ニ呼出サレタル證人ニシテ正當ノ理由ナク出頭セサル者ニ對シテハ申立ナシト雖モ決定ヲ以テ其不參ニ因リ生シタル費用ノ賠償及ヒ二十圓以上ノ罰金ヲ言渡スコシ

證人カ再度出頭セサル場合ニ於テハ更ニ費用ノ賠償及ヒ罰金ヲ言渡ス可シ又其勾引ヲ命スルコトヲ得

證人ハ右ノ決定ニ對シテ抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停止スル效力ヲ有ス

豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍屬ニ對スル罰金ノ言渡及ヒ執行ハ軍事裁判所又ハ所屬ノ長官又ハ隊長ニ囑託シテ之ヲ爲ス其勾引ニ付テモ亦同シ

第二百九十五條 證人其出頭セザリシコトヲ後日ニ正當ノ理由ヲ以テ辯解スルトキハ罰金及ヒ倍償ノ決定ヲ取消ス可シ

證人ノ不參届及ヒ決定取消ノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第二百九十六條 皇族證人ナルトキハ受命判事又ハ受託判事其所在ニ就キ訊問ヲ爲ス

各大臣ニ付テハ其官廳ノ所在地ニ於テ之ヲ訊問ス若シ其所在地外ニ滞在スルトキハ其現在地ニ於テ之ヲ訊問ス

帝國議會ノ議員ニ付テハ開會期間其議會ノ所在地ニ滞在中ハ其所在地ニ於テ之ヲ訊問ス

第二百九十七條 左ニ掲ケル者ハ證言ヲ拒ムコトヲ得

第一 原告若クハ被告又ハ其配偶者ト親族ナルトキ但姻族ニ付テハ婚姻ノ解除シタルトキト雖亦同シ

第二 原告若クハ被告ノ後見ヲ受ケル者

第三 原告若クハ被告ト同居スル者又ハ雇人トシテ之ニ任フル者

裁判長ハ訊問前ニ前項ノ者ニ證言ヲ拒ム權利アル旨ヲ告ケ可シ

第二百九十八條 左ノ場合ニ於テハ證言ヲ拒ムコトヲ得

第一 官吏、公吏又ハ官吏、公吏タリシ者カ其職務上默秘ス可キ職務アル事情ニ關スルトキ

第二 醫師、藥商、橋婆、辯護士、公證人、神職及ヒ僧侶カ其身分又ハ職業ノ爲メ委託ヲ受ケタル

第三 因テ知リタル事實ニシテ默秘ス可キモノニ關スル刑罰ノ規定ニ基テシテ其事實ヲ知ル

第三 刑罰ノ規定ニ基テシテ其事實ヲ知ル者又ハ前條ニ掲ケタル者ノ耻辱ニ歸スルカ又ハ其刑事上ノ訴追ヲ招

第四 問ニ付テノ答辯カ證人又ハ前條ニ掲ケタル者ノ爲メ直接ニ財產權上ノ損害ヲ生セシム可

第五 證人カ其技術又ハ職業ノ秘密ヲ公ニスルニ非サレハ答辯スルコト能ハサルトキ

第二百九十九條 證人ハ第三百九十七條第一號及ヒ第三百九十八條第四號ノ場合ニ於テ左ノ事項

ニ付テハ證言ヲ拒ムコトヲ得

第一 家族ノ財産、婚姻又ハ死亡ニ關スル事情ニ關シテ其秘密ニ關スル事項ニ付テハ其秘密ヲ洩

第二 家族ノ關係ニ因リ生スル財產事件ニ關スル事實ニ關シテ其秘密ニ關スル事項ニ付テハ其秘密ヲ洩

第三 證人トシテ立命時タル場合ニ於テハ權利行為ノ成立及ヒ其關係ニ關シテ其秘密ヲ洩

第四 原告若クハ被告ノ前主又ハ代理人トシテ係争ノ權利關係ニ關シテ其秘密ヲ洩

前條第一號、第二號ニ掲ケタル者其默秘ス可キ義務ヲ免除セラレタルトキハ證言ヲ拒ムコトヲ

得

第三百條 證言ヲ拒ム證人ハ其訊問ノ期日前ニ書面又ハ口頭ヲ以テ又ハ其期日ニ於テ其拒絕ノ原因

ヲ示シ且之ヲ説明ス可シ

期日前ニ證言ヲ拒ム證人ハ其期日ニ出頭スル義務ニ關シテ其秘密ヲ洩

期日前ニ證言ヲ拒ム證人ハ其期日ニ出頭スル義務ニ關シテ其秘密ヲ洩

期日前ニ證言ヲ拒ム證人ハ其期日ニ出頭スル義務ニ關シテ其秘密ヲ洩

期日前ニ證言ヲ拒ム證人ハ其期日ニ出頭スル義務ニ關シテ其秘密ヲ洩

期日前ニ證言ヲ拒ム證人ハ其期日ニ出頭スル義務ニ關シテ其秘密ヲ洩

期日前ニ證言ヲ拒ム證人ハ其期日ニ出頭スル義務ニ關シテ其秘密ヲ洩

期日前ニ證言ヲ拒ム證人ハ其期日ニ出頭スル義務ニ關シテ其秘密ヲ洩

期日前ニ證言ヲ拒ム證人ハ其期日ニ出頭スル義務ニ關シテ其秘密ヲ洩

期日前ニ證言ヲ拒ム證人ハ其期日ニ出頭スル義務ニ關シテ其秘密ヲ洩

期日前ニ證言ヲ拒ム證人ハ其期日ニ出頭スル義務ニ關シテ其秘密ヲ洩

期日前ニ證言ヲ拒ム證人ハ其期日ニ出頭スル義務ニ關シテ其秘密ヲ洩

裁判所書記が拒絕ノ書面ヲ受領シ又ハ其陳述ニ付キ調書ヲ作りタルトキハ之ヲ當事者ニ通知ス可シ

第三百一十條 拒絕ノ當否ニ付テハ受訴裁判所當事者ヲ審訊シタル後決定ヲ以テ其裁判ヲ爲ス但第二百九十八條第一號ノ場合ニ於テ爲シタル拒絕ノ當否ニ付テハ所屬廳又ハ最後ノ所屬廳ノ裁定ニ任ズ

原告若クハ被告カ出頭セザルトキハ出頭シタル者ノ申述ヲ斟酌シテ決定ヲ爲ス
右決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停止スル效力ナラス

第三百二條 原因ヲ開示セスシテ證言ヲ拒ミ又ハ開示シタル原因ノ棄却確定シタル後ニ之ヲ拒ミタルトキハ申立ヲ要セスシテ決定ヲ以テ證人ニ對シ其拒絕ニ因リテ生シタル費用ノ賠償及ヒ四十圓以下ノ罰金ヲ言渡ス

證人ハ費用ノ賠償及ヒ罰金ヲ言渡シ對抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停止スル效力ナラス
豫備ノ後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍屬ニ對スル罰金ノ言渡及ヒ執行ハ軍事裁判所ニ囑託シテ之ヲ爲ス
第三百三條 原告若クハ被告ハ相手方ト相手方ノ證人トノ間ニ第二百九十七條第一號乃至第三號ノ關係アルトキハ其證人ヲ忌避スルコトヲ得

忌避ノ原因ハ之ヲ疏明ス可シ

第三百五條 忌避ノ申請ニ付テハ裁判所ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得
忌避ノ原因アルトキハ宣言スル決定ニ對シテハ上訴ヲ爲スコトヲ得ス忌避ノ原因ナシト宣言スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第三百六條 各證人ニハ其携帶ス可キ呼出狀其他適當ノ方法ヲ以テ人違ナラサルコトヲ別然ナラシメタル後訊問前各別ニ宣誓ヲ爲サシム可シ

然レトモ宣誓ハ特別ノ原因アルトキ殊ニ之ヲ爲サシム可キヤ否ヤニ付キ疑ノ存スルトキハ訊問ノ終ルマテ之ヲ延ワルコトヲ得

第三百七條 證人ハ訊問前ニ宣誓ヲ爲ス可キ場合ニ於テハ良心ニ從ヒ眞實ヲ述ヘ何事ヲ默秘セス又何事ヲ附加セザル旨ノ誓ヲ宣フ可シ

又訊問後ニ宣誓ヲ爲ス可キ場合ニ於テハ良心ニ從ヒ眞實ヲ述ヘ何事ヲ默秘セス又何事ヲ附加セザル旨ノ誓ヲ宣フ可シ

第三百八條 裁判所ハ宣誓前ニ相當ナル方法ヲ以テ宣誓者ニ偽證ノ罰ヲ諭示ス可シ

第三百九條 宣誓ヲ拒ム證人ニ付テハ第三百條乃至第三百二條ノ規定ヲ適用ス

第三百十條 左ノ者ハ宣誓ヲ爲サシムスシテ參考ノ爲メ之ヲ訊問スルコトヲ得
第一 訊問ノ時未タ滿十六歳ニ達セザル者

第二 宣誓ノ何物タルヲ了解スルニ必要ナル精神上ノ發達ノ缺クル者
第三 刑事上ノ判決ニ因公權ヲ剝奪又ハ停止セラレタル者
第四 第二百九十七條及第二百九十八條第三號並ニ第四號ノ規定ニ依リ證書ヲ拒絕スル權利

アリテ之ヲ行使セサル者但第二百九十八條第三號並ニ第四號ノ場合ニ於テハ拒絕ノ權利ニ關
スル事實ニ付キ證言ヲ爲ス可キコトヲ申立テラレタルト時ニ限ル

第五 訴訟ノ成績ニ直接ノ利害關係ヲ有スル者

第三百十一條 證人訊問ノ後ニ訊問ス可キ證人ノ在ラサル場合ニ於テ各別ニ之ヲ爲ス

證人ノ供述互ニ齟齬シタルトキハ之ヲ對質セシムルコトヲ得

第三百十二條 證人訊問ハ證人ニ其姓名、年齢、身分、職業及ヒ住居ヲ問フヲ以テ始マル又必要ナ
ル場合ニ於テハ其事件ニ於テ證言ノ信用ニ關スル事情殊ニ當事者トノ關係ニ付テノ問ヲ爲ス可

シ

第三百十三條 證人ニハ其訊問事項ニ付キ知リタルモノヲ牽連シテ供述セシム可シ

證人ノ供述ヲ明白及ヒ完全ナラシメ且其知り得タル原因ヲ穿鑿スル爲メ必要ナル場合ニ於テハ

尙ホ他ノ問ヲ發ス可シ

第三百十四條 證人ハ其供述ニ換ヘテ書類ヲ朗讀シ其他覺書ヲ用キルコトヲ得ス但算數ノ關係ニ
限リ覺書ヲ用キルコトヲ得

第三百十五條 陪席判事ハ裁判長ニ告ケテ證人ニ問ヲ發スルコトヲ得

當事者ハ證人ニ對シ自ラ發スルコトヲ得然レトモ當事者ハ證人ノ供述ヲ明白ナラシムル爲ニ
其必要ナルコトヲ訊問ヲ發セシムルコトヲ得

發問ノ許否ニ付キ異議アルトキハ裁判所ハ直チニ之ヲ裁判ス

第三百十六條 調書ニハ證人カ其訊問ノ前若クハ後ニ宣誓シタルヤ又ハ宣誓セシテ訊問ヲ受ケ
タルヤヲ記載ス可シ

第三百十七條 受訴裁判所ハ左ノ場合ニ於テ證人ノ再訊問ヲ命ヘルコトヲ得

第一 證人訊問ガ法律上ノ規定ニ違ヒタルトキ

第二 證人訊問ノ完全ナラサルトキ

第三 證人ノ供述ガ明白ナラス又ハ兩義ニ涉ルトキ

第四 證人カ其供述ノ補充又ハ更正ヲ申立ツルトキ

第五 此他裁判所カ再訊問ヲ必要トスルトキ

第三百十八條 左ノ場合ニ於テ證人ニ依ル證據調ハ受訴裁判所ノ部員一名ニ之ヲ命シ又ハ區裁
判所ニ之ヲ囑託スルコトヲ得

第一 眞實ヲ探知スル爲メ現場ニ就キ證人ヲ訊問スルノ必要ナルトキ

第二 證人カ疾病其他ノ事由ノ爲メ受訴裁判所ニ出頭スル能ハサルトキ

第三 證人カ受訴裁判所ノ所在地ヨリ遠隔ノ地ニ在リテ其裁判所ニ出頭スルニ付キ不相應ノ時
日及ヒ費用ヲ要スルトキ

第三百十九條 第二百九十四條第二百九十五條第三百二條及ヒ第三百九條ニ掲ケタル證人ニ對ス
ル受訴裁判所ノ權ハ受命判事又ハ受託判事ニモ屬ス

證人カ受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ於テ理由ヲ開示シテ證言ヲ拒ミ又ハ宣誓ヲ拒ミ又ハ職權
若クハ申立ニ因リ發シタル問ニ答フルコトヲ拒ムトキハ此拒絕ノ當否ニ付キ裁判ヲ爲ス權ハ受
訴裁判所ニ屬ス

受命判事又ハ受託判事カ原告若クハ被告ヨリ申立テタル問ヲ發スルコトヲ否ムトキハ原告若ク
ハ被告ハ其當否ニ付キ受訴裁判所ノ裁判ヲ求ムルコトヲ得

受命判事又ハ受託判事カ原告若クハ被告ヨリ申立テタル問ヲ發スルコトヲ否ムトキハ原告若ク
ハ被告ハ其當否ニ付キ受訴裁判所ノ裁判ヲ求ムルコトヲ得

受命判事又ハ受託判事カ原告若クハ被告ヨリ申立テタル問ヲ發スルコトヲ否ムトキハ原告若ク
ハ被告ハ其當否ニ付キ受訴裁判所ノ裁判ヲ求ムルコトヲ得

受命判事又ハ受託判事カ原告若クハ被告ヨリ申立テタル問ヲ發スルコトヲ否ムトキハ原告若ク
ハ被告ハ其當否ニ付キ受訴裁判所ノ裁判ヲ求ムルコトヲ得

受命判事又ハ受託判事カ原告若クハ被告ヨリ申立テタル問ヲ發スルコトヲ否ムトキハ原告若ク
ハ被告ハ其當否ニ付キ受訴裁判所ノ裁判ヲ求ムルコトヲ得

受命判事又ハ受託判事カ原告若クハ被告ヨリ申立テタル問ヲ發スルコトヲ否ムトキハ原告若ク
ハ被告ハ其當否ニ付キ受訴裁判所ノ裁判ヲ求ムルコトヲ得

受命判事又ハ受託判事カ原告若クハ被告ヨリ申立テタル問ヲ發スルコトヲ否ムトキハ原告若ク
ハ被告ハ其當否ニ付キ受訴裁判所ノ裁判ヲ求ムルコトヲ得

受命判事又ハ受託判事カ原告若クハ被告ヨリ申立テタル問ヲ發スルコトヲ否ムトキハ原告若ク
ハ被告ハ其當否ニ付キ受訴裁判所ノ裁判ヲ求ムルコトヲ得

受命判事又ハ受託判事カ原告若クハ被告ヨリ申立テタル問ヲ發スルコトヲ否ムトキハ原告若ク
ハ被告ハ其當否ニ付キ受訴裁判所ノ裁判ヲ求ムルコトヲ得

受命判事又ハ受託判事カ原告若クハ被告ヨリ申立テタル問ヲ發スルコトヲ否ムトキハ原告若ク
ハ被告ハ其當否ニ付キ受訴裁判所ノ裁判ヲ求ムルコトヲ得

受命判事又ハ受託判事カ原告若クハ被告ヨリ申立テタル問ヲ發スルコトヲ否ムトキハ原告若ク
ハ被告ハ其當否ニ付キ受訴裁判所ノ裁判ヲ求ムルコトヲ得

受命判事又ハ受託判事カ原告若クハ被告ヨリ申立テタル問ヲ發スルコトヲ否ムトキハ原告若ク
ハ被告ハ其當否ニ付キ受訴裁判所ノ裁判ヲ求ムルコトヲ得

受命判事又ハ受託判事カ原告若クハ被告ヨリ申立テタル問ヲ發スルコトヲ否ムトキハ原告若ク
ハ被告ハ其當否ニ付キ受訴裁判所ノ裁判ヲ求ムルコトヲ得

受命判事又ハ受託判事カ原告若クハ被告ヨリ申立テタル問ヲ發スルコトヲ否ムトキハ原告若ク
ハ被告ハ其當否ニ付キ受訴裁判所ノ裁判ヲ求ムルコトヲ得

受命判事又ハ受託判事カ原告若クハ被告ヨリ申立テタル問ヲ發スルコトヲ否ムトキハ原告若ク
ハ被告ハ其當否ニ付キ受訴裁判所ノ裁判ヲ求ムルコトヲ得

受命判事又ハ受託判事カ原告若クハ被告ヨリ申立テタル問ヲ發スルコトヲ否ムトキハ原告若ク
ハ被告ハ其當否ニ付キ受訴裁判所ノ裁判ヲ求ムルコトヲ得

受命判事又ハ受託判事カ原告若クハ被告ヨリ申立テタル問ヲ發スルコトヲ否ムトキハ原告若ク
ハ被告ハ其當否ニ付キ受訴裁判所ノ裁判ヲ求ムルコトヲ得

受命判事又ハ受託判事カ原告若クハ被告ヨリ申立テタル問ヲ發スルコトヲ否ムトキハ原告若ク
ハ被告ハ其當否ニ付キ受訴裁判所ノ裁判ヲ求ムルコトヲ得

受命判事又ハ受託判事カ原告若クハ被告ヨリ申立テタル問ヲ發スルコトヲ否ムトキハ原告若ク
ハ被告ハ其當否ニ付キ受訴裁判所ノ裁判ヲ求ムルコトヲ得

受命判事又ハ受託判事カ原告若クハ被告ヨリ申立テタル問ヲ發スルコトヲ否ムトキハ原告若ク
ハ被告ハ其當否ニ付キ受訴裁判所ノ裁判ヲ求ムルコトヲ得

受命判事又ハ受託判事カ原告若クハ被告ヨリ申立テタル問ヲ發スルコトヲ否ムトキハ原告若ク
ハ被告ハ其當否ニ付キ受訴裁判所ノ裁判ヲ求ムルコトヲ得

證人ノ再訊問ハ受命判事又ハ受託判事ノ意見ヲ以テ之ヲ命スルコトヲ得
 第三百二十條 證人ヲ申出テタル原告若クハ被告ハ其訊問ノ開始マテハ此證據方法ヲ拋棄スルコトヲ得其後ハ相手方ノ承諾ヲ得ルトキニ限り之ヲ拋棄スルコトヲ得
 第三百二十一條 各證人ハ日當ノ辨濟及ヒ其出頭ノ爲ニ旅行ヲ要スルトキハ旅費ノ辨濟ヲ請求スルコトヲ得

此金額ノ拂渡ハ訊問期日ノ終リタル後直チニ之ヲ求ムルコトヲ得
 舉證者ノ豫納シタル金額不足スルトキハ職權ヲ以テ其不足額ヲ取立ツ可シ

第七節 鑑定

第三百二十二條 鑑定ニ付テハ以下數條ニ於テ別段ノ規定ヲ設ケサル限りハ人證ニ付テノ規定ヲ準用ス

第三百二十三條 鑑定ハ申出バ鑑定ス可キ事項ヲ表示シテ之ヲ爲ス

第三百二十四條 立會フ可キ鑑定人ノ選定及ヒ其員數ノ指定ハ受託裁判所之ヲ爲ス其裁判所ハ鑑定人ノ任命ヲ一名マテニ制限シ又ハ何時ニテモ既ニ任命シタル者ニ代ヘ他ノ鑑定人ヲ任命スルコトヲ得

裁判所ハ鑑定人トシテ訊問ヲ受ケルニ適當ナル者ヲ指名ス可キ旨ヲ當事者ニ催告スルコトヲ得

當事者カ一定ノ者ヲ鑑定人ニ爲スコトヲ合意シタルトキハ裁判所ハ其合意ニ從フ可シ然レトモ裁判所ハ當事者ノ爲スコキ選定ヲ一定ノ員數ニ制限スルコトヲ得

第三百二十五條 各國ノ書類又ハ產物ノ審査ヲ要スル場合ニ於テ必要ナル能力ヲ有スル本邦人ノ

在在者トシテハ裁判所ハ外國人ヲ鑑定人ニ任命スルコトヲ得

第三百二十六條 左ニ掲ケル者鑑定ヲ命セズルコトヲキハ之ヲ爲ス義務アリ

第一 必要ナル種類ノ鑑定ヲ爲ス爲ニ公ニ任命セラレタル者

第二 鑑定ヲ爲スニ必要ナル學術、技藝若クハ職業ニ常ニ從事スル者又ハ學術、技藝若クハ職業ニ從事スル爲ニ公ニ任命セラレ若クハ授權セラレタル者

在外ノ鑑定ヲ爲スコキ旨ヲ裁判所ニ於テ述ベタル者ハ鑑定人タル義務カキトキト雖モ鑑定ヲ爲ス義務アリ

第三百二十七條 鑑定人ハ證人カ證言ヲ拒ムコトヲ得ルト同ノ原因ニ依リ鑑定ヲ拒ム權利アリ

官吏、公吏ハ其所屬廳ニ於テ異議アルトキハ之ヲ鑑定人トシテ訊問スルコトヲ得ス

第三百二十八條 鑑定ヲ爲ス義務アル鑑定人出頭セス又ハ鑑定ヲ拒ミタル場合ニ於テハ其者ニ對シ此カ爲ニ生シタル費用ノ賠償及ヒ罰金ヲ言渡ス可シ但其鑑定人ヲ拘引スルコトヲ得ス

第三百二十九條 鑑定人ハ其鑑定ヲ爲ス前ニ其鑑定人タル義務ヲ公平且誠實ニ履行スヘキ旨ノ誓ヲ宣フヘシ

第三百三十條 受託裁判所ハ其意見ヲ以テ左ノ諸件ヲ定ムヘシ

第一 鑑定人ノ意見ハ口頭又ハ書面ニテ之ヲ述ヘシム可キヤ

第二 數名ノ鑑定人ヲ訊問ス可キ場合ニ於テ各意見カ異ナルトキハ共同ニ鑑定書ヲ作ラシム可キヤ又ハ各別ニ之ヲ作ラシム可キヤ

第三 口頭辯論ノ際鑑定人ノ總員又ハ其一名ヲシテ鑑定書ヲ説明セシム可キヤ

第四 鑑定ノ結果カ不十分ナルトキハ同一又ハ他ノ鑑定人ヲシテ再ヒ鑑定ヲ爲サシム可キヤ
第三百三十一條 受訴裁判所ハ鑑定人ノ任命ヲ受命判事又ハ受託判事ニ委任スルコトヲ得此場合
ニ於テハ受命判事又ハ受託判事ハ第三百二十四條及ヒ第三百三十條第一號並ニ第二號ノ規定ニ
依リ受訴裁判所ニ屬スル權ヲ有ス

第三百三十二條 鑑定人ハ日當、旅費及ヒ立替金ノ辨濟ヲ請求スルコトヲ得
此場合ニ於テハ第三百二十一條ノ規定ヲ準用ス

第三百三十三條 特別ノ智識ヲ要セシ過去ノ事實又ハ事情ニシテ其實驗アル者ノ訊問ニ因リテ確
定スヘキトキハ人證ニ付テノ規定ヲ適用ス

第八節 書證

第三百三十四條 書證ノ申出ハ證書ヲ提出シテ之ヲ爲ス

第三百三十五條 舉證者其使用セントスル證書カ相手方ノ手ニ存スル旨ヲ主張スルトキハ書證ノ
申立ハ相手方ニ其證書ノ提出ヲ命センコトヲ申立テテ之ヲ爲スヘシ

第三百三十六條 相手方ハ右ノ場合ニ於テ證書ヲ提出スル義務アリ

第一 舉證者カ民法ノ規定ニ從ヒ訴訟外ニ於テモ證書ノ引渡又ハ其提出ヲ求ムルコトヲ得ルト
キ

第二 證書カ其旨趣ニ因リ舉證者及ヒ相手方ニ共通ナルトキ

第三百三十七條 相手方ハ其手ニ存スル證書ニシテ其訴訟ニ於テ舉證ノ爲メ引用シタルモノヲ提
出スル義務アリ準備書面中ニ引用シタルトキト雖モ亦同シ

第三百三十八條 證書ノ提出ヲ命センコトノ申立ニハ左ノ事件ヲ掲グヘシ

第一 證書ヲ表示

第二 證書ニ依リ證不可キ事實ノ表示

第三 證書ノ旨趣

第四 證書ヲ相手方ノ手ニ存スル旨ヲ主張スル理由タル事情

第五 證書ヲ提出ス可キ義務ノ原因ヲ表示

第三百三十九條 裁判所ハ證書ニ依リ證不可キ事實ノ重要ニシテ且申立ヲ正當ナル承認ムル場合
ニ於テ相手方ハ證書ヲ其手ニ存スル旨ヲ申立テ且申立ニ對シ陳述セサルトキハ證據

決定ヲ以テ證書ヲ提出ヲ命ス

第三百四十條 相手方ハ證書ヲ所持セザル旨ヲ申立ツルトキハ此申立ノ眞實ナルヲ否ヤチ決定ムル

若クハ又ハ證書ノ所在ヲ穿鑿スル爲メ又ハ舉證者ノ使用ヲ妨クル目的ヲ以テ故意ニ證書ヲ隱匿シ

若クハ使用ニ耐ヘサルシメタルニヤ否ヤチ穿鑿スル爲メ本章第十節ノ規定ニ從ヒテ相手方本人ヲ

訊問スヘシ

第三百四十一條 相手方官廳ナルトキハ證書カ其官廳ノ保藏ニ係ラス又ハ其所在ヲ開示スルコトヲ得サル旨ノ

長官ノ證明書ヲ以テ訊問ニ換フ裁判所ハ此證明書ヲ差出サシムル爲メ相當ノ期間ヲ定ムルコトヲ得

第三百四十二條 證書ヲ所持スル旨ヲ自白シ又ハ之ヲ所持セス申立テタル相手方カ其證書ヲ

提出ス可シトノ命ニ從ハズ又ハ相手方カ所持セズ申立テタル證書ニ付キ訊問ヲ受ケテ供述ヲ

爲ス可ト拒ミタルトキ又ハ舉證者ノ使用ヲ妨クル目的ヲ以テ故意ニ證書ヲ隱匿シ若クハ使用

ニ耐ヘサルシメタルコトハ明確ナルハ舉證者以テ差出シタル證書ヲ原本ヲ差出シタルモノトシ

做ス若シ原本ヲ差出ササルトキハ裁判所ハ其意見ヲ以テ證書ノ性質及ヒ旨趣ニ付キ舉證者ノ主

此場合ニ於テハ裁判所ハ其證書ノ眞否ニ付キ中間判決ヲ以テ裁判ヲ爲ス可シ
第三百五十二條 私署證書ノ眞否ニ付キ争アルトキハ裁判所ハ舉證者ノ申立ニ因リ檢眞ヲ爲ス可トナ得

第三百五十三條 私署證書ノ檢眞ハ總テノ證據方法及ヒ手跡若クハ印章ノ對照ニ因リテ之ヲ爲ス

證書ノ眞否ヲ證セシトスル當事者ハ裁判所ノ定ムル期間内ニ手跡若クハ印章ヲ對照スル爲ニ適當ナル書類ヲ提出ス可シ

眞正ナリトノ自白又ハ證明シタル適當ノ對照書類ナキトキハ對照ノ爲メ原告若クハ被告ニ對シ裁判所ニ於テ一定ノ語辭ノ手記ヲ命スルコトヲ得其手記シタル語辭ハ調書ノ附録トシテ之ニ添附ス可シ

裁判所ハ手跡若クハ印章ヲ對照シタル結果ニ付キ自由ナル心證ヲ以テ裁判ヲ爲シ又必要ナル場合ニ於テハ鑑定ヲ爲サシメタル後之ヲ爲ス

原告若クハ被告ハ裁判所ノ定メタル期間内ニ對照書類ヲ提出セサルトキ又ハ對照ス可キ語辭ヲ手記ス可キ裁判所ノ命ニ對シ十分ナル辯解ヲ爲サシテ之ニ從ハサルトキ又ハ書様ヲ變シテ手記シタルトキハ證書ノ眞否ニ付テノ相手方ノ主張ハ其他ノ證據ヲ要セスシテ之ヲ眞正ナリト看做ス可トナ得

第三百五十四條 提出シタル證書ハ直チニ之ヲ還付シ又適當ナル場合ニ於テハ其原本ヲ記録ニ留メテ之ヲ還付ス可シ然レトモ證書ノ偽造又ハ變造ナリト争フトキハ檢事ノ意見ヲ聽キタル後ニ非サレハ之ヲ還付スルコトヲ得

ルコトヲ得

第三百五十五條 公正證書ノ偽造若クハ變造ナルコトヲ眞實ニ反キテ主張シタル原告若クハ被告ニ惡意若クハ重過失ノ責アルトキハ五十圓以下ノ過料ヲ言渡ス

又私署證書ノ眞正ナルコトヲ眞實ニ反キテ争フトキハ前項ト同一ナル條件ヲ以テ二十圓以下ノ過料ヲ言渡ス

第三百五十六條 本節ノ規定ハ事件ノ性質ニ於テ許ス限リハ事跡ノ紀念又ハ權利ノ證徴ノ爲メ作リタル割符、界標等ノ如キモノニ之ヲ準用ス

第九節 檢 證

第三百五十七條 檢證ノ申出ハ檢證物ヲ表示シ及ヒ證ス可キ事實ヲ開示シテ之ヲ爲ス

第三百五十八條 受訴裁判所ハ檢證ヲ爲スニ際シ鑑定人ノ立會ヲ命スルコトヲ得

受訴裁判所ハ檢證及ヒ鑑定人ノ任命ヲ其部員一名ニ命シ又ハ區裁判所ニ囑託スルコトヲ得

第三百五十九條 檢證ヲ爲ス際發見シタル事項ハ調書ニ記載シテ之ヲ明確ナラシメ又必要ナル場合ニ於テハ調書ノ附録トシテ添附ス可キ圖面ヲ作り之ヲ明確ナラシム可シ
若シ既ニ記録ニ圖面ノ存スルトキハ之ヲ檢證物ニ對照シ必要ナル場合ニ於テハ之ヲ更正ス可シ

第十節 當事者本人ノ訊問

第三百六十條 當事者ノ提出シタル許ス可キ證據ヲ調ヘタル結果ニ因リ生ス可キ事實以眞否ニ付キ裁判所カ心證ヲ得ルニ足ラサルトキハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ原告若クハ被告ノ本人ヲ訊問スルコトヲ得

第三百六十一條 裁判所ハ原告若クハ被告ヲ訊問スルコトヲ決定シ且原告若クハ被告ノ自身カ決

定言渡ノ際在廷スルトキハ直チニ其訊問ヲ爲スヲ以テ通例トス
 第三百六十二條 訊問ヲ受クル原告若クハ被告ハ供述ニ換ヘテ書類ヲ朗讀シ其他覺書ヲ用キルコトヲ得ズ但覺書ノ關係ニ限リ覺書ヲ用キルコトヲ得
 第三百六十三條 原告若クハ被告カ十分ナル理由ナクシテ供述スルコトヲ拒ミ又ハ訊問期日ニ出頭セサルトキハ裁判所ハ其意見ヲ以テ訊問ニ因リテ舉證ス可キ相手方ノ主張ヲ正當ナリト認ムルコトヲ得

第三百六十四條 訴訟無能力者ノ法律上代理人カ訴訟ヲ爲ストキハ法律上代理人若クハ訴訟無能力者ヲ訊問ス可キ又ハ此等ノ者ヲ共ニ訊問ス可キヲ裁判所ノ意見ヲ以テ之ヲ決定ス
 法律上代理人アルトキハ其一人ヲ訊問ス可キ又ハ數人ヲ訊問ス可キ亦前項ニ同シ

第十一節 證據保全

第三百六十五條 證據ヲ紛失スル恐アリ又ハ之ヲ使用シ難キ恐アルトキハ證據保全ノ爲メ證人若クハ鑑定人ノ訊問又ハ檢證ヲ申立ツルコトヲ得
 第三百六十六條 訴訟カ既ニ繫屬シタルトキハ此申請ハ受訴裁判所ニ之ヲ爲ス可シ

切迫ナル危險ノ場合ニ於テハ訊問ヲ受ク可キ者ノ現在地又ハ檢證ス可キ物ノ所在地ヲ管轄スル區裁判所ニ申請ヲ爲スコトヲ得
 訴訟ノ未タ繫屬セサルトキハ前項ニ記載シタル區裁判所ニ申請ヲ爲スコトヲ要ス

右申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得
 第三百六十七條 申請ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス
 第一 相手方ノ表示

第二 證據調ヲ爲ス可キ事實ノ表示
 第三 證據方法殊ニ證人若クハ鑑定人ノ訊問ヲ爲ス可キトキハ其表示
 第四 證據ヲ紛失スル恐アリ又ハ之ヲ使用シ難キ恐アル理由此理由ハ之ヲ疏明ス可シ

第三百六十八條 申請ニ就テノ決定ハ口頭辯論ヲ經シテ之ヲ爲スコトヲ得
 申請ヲ許容スル決定ニハ證據調ヲ爲ス可キ事實及ヒ證據方法殊ニ訊問ス可キ證人若クハ鑑定人ノ氏名ヲ記載ス可シ此決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第三百六十九條 證據調ノ期日ニハ申立人ヲ呼出シ又決定及ヒ申請ノ謄本ヲ送達シテ其權利防衛ノ爲ニ相手方ヲ呼出ス可シ

切迫ナル危險ノ場合ニ於テハ適當ナル時間ニ相手方ヲ呼出スコトヲ得
 第三百七十條 證據調ハ本章第六節第七節及ヒ第九節ノ規定ニ從ヒテ之ヲ爲ス

證據調ノ調査ハ證據調ヲ命シタル裁判所ニ之ヲ保存ス可シ各當事者ハ證據調ノ調査ヲ訴訟ニ於テ使用スル權利ヲ有ス
 受訴裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ再度ニ證據調ヲ命シ又ハ既に調ヘタル證據ノ補充ヲ命スルコトヲ得

第三百七十一條 證據調ハ第三百六十五條ノ條件ナキトキト雖モ相手方ノ承諾ニ因リ之ヲ許スコトヲ得

第三百七十二條 申立人カ相手方ヲ指定セサルトキハ申立人自己ノ過失ニ非スシテ相手方ヲ指定スル能ハザルコトヲ疏明スル場合ニ限リ其申請ヲ許ス

第三百七十二條 申立人カ相手方ヲ指定セサルトキハ申立人自己ノ過失ニ非スシテ相手方ヲ指定スル能ハザルコトヲ疏明スル場合ニ限リ其申請ヲ許ス

申請ヲ許容シタルトシテハ裁判所ハ其知ル可ク相手方ノ權利防衛ノ爲ニ臨時代理人ヲ任スルコト
 得ルモノトシテ
 第二章 區裁判所ノ訴訟手續

第三百七十三條 區裁判所ノ通常ノ訴訟手續ニ付テハ區裁判所ノ構成又ハ第一編及ヒ本節ノ規定
 ニ依リ差異ノ生レサル限リハ地方裁判所ノ訴訟手續ニ付テハ規定ヲ適用ス

第三百七十四條 區裁判所ノ書面又ハ口頭ヲ以テ裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得
 第三百七十五條 起訴書ヲ以テ裁判所書記外訴狀ヲ被告ニ送達スル手續ヲ爲スルニ當リ
 第三百七十六條 原告若クハ被告ハ其中立及ヒ事實上ノ主張ニシテ豫メ通知スルニ非サレハ相手
 方ニ於テ之ニ對シ陳述ヲ爲シ得ルカラサルモ以テ口頭辯論ノ前直接ニ相手方ニ通知スル辯論
 得ルモノトシテ

第三百七十七條 口頭辯論ノ期日ト訴狀送達ノ間ニ少ナクトモ三日ノ時間ヲ存スルコトヲ要
 ス
 急迫ナル場合ニ於テハ此時間ヲ二十四時ヲ三短縮スルコトヲ得
 第三百七十八條 當事者ノ通常ノ裁判日ニ於テ豫メ期日ヲ指定シテ之ヲ裁判所ニ由頭シ訴訟ニ
 付キ辯論ヲ爲スコトヲ得
 此場合ニ於テ訴訟提起ノ口頭ノ演述ヲ以テ之ヲ爲ス

第三百七十九條 數箇ノ妨訴ヲ抗辯シ本案ノ辯論前同時ニ提出ス可キ規定ハ裁判所管轄違ノ抗辯
 限リ之ヲ適用ス

被告ノ妨訴ヲ抗辯シ基キ本案ノ辯論ヲ拒ム權利ヲ然レトモ裁判所ハ職權ヲ以テ右抗辯ニ付キ
 分離シテ辯論ヲ命スルコトヲ得

第三百八十條 第三百三十二條第三百六十六條乃至第三百七十二條ノ規定ハ區裁判所ノ訴訟手續
 三之ヲ適用セス
 然レトモ原告若クハ被告申立及ヒ陳述裁判所ノ意見ニ從ヒ訴訟關係ヲ十分ニ明確ナラシム
 第三百八十一條 原告起訴セシメタル者ハ和解ノ爲メ請求ノ目的物ヲ開示シテ相手方ヲ其普通裁判
 籍有スル區裁判所ニ呼出ス可キコトヲ申立ツルコトヲ得其申立ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲
 ス

當事者雙方出頭シ和解ヲ調兵タルトキハ調書ヲ以テ之ヲ明確ナラシム可シ

和解ヲ調兵シテ和解ニ當事者雙方ハ申立ニ因リ其訴訟ニ付キ直チニ辯論ヲ爲ス此場合ニ於ケル
 訴訟提起ノ口頭ノ演述ヲ以テ之ヲ爲スハ申立ノ書面又ハ口頭ノ演述ニ依リテ之ヲ爲ス

相手方が出頭シ又ハ和解ヲ調兵シテ和解ノ爲メ請求ノ目的物ヲ開示シテ相手方ヲ其普通裁判
 籍有スル區裁判所ニ呼出ス可キコトヲ申立ツルコトヲ得其申立ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲
 ス

第三百八十三條 一定金額ヲ支拂他ノ代替物若クハ有價證券ノ一定ノ數量ノ給付ヲ目的トス
 ル請求ニ付キ債權者ノ通常ノ訴訟手續ニ依リテ之ヲ督促手續ニ依リ條件附シテ支拂命令ヲ債務者
 ニ對シ發シタルトキ申立タル者得ルモノトシテ

申請ノ旨趣ニ依レハ申請者反對給付ヲ爲スニ非サレハ其請求ヲ主張スルコトヲ得サルトキ又ハ
 支拂命令ヲ送達シ外國ニ於テ爲シ若クハ公示送達ヲ以テ爲ス可キトキハ督促手續ヲ許サズ
 第三百八十三條 支拂命令ハ區裁判所之ヲ發シ管轄ノ制限ナキモノト看做シ通常ノ認訴手續ニ於ケル所
 此命令ハ區裁判所才第ニ審ノ事物ノ管轄ノ制限ナキモノト看做シ通常ノ認訴手續ニ於ケル所
 提起ニ付キ普通裁判籍又ハ不動産上裁判籍ノ屬ス可キ區裁判所ノ管轄ニ專屬スルモノト看做ス
 第三百八十四條 支拂命令ハ發スルコトノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得
 此申請ハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス
 第一 申請者及ヒ裁判所所屬表示
 第二 請求ノ一定ノ數額、目的物及ヒ原因ノ表示若シ請求ノ數箇ナルトキハ其各箇ノ一定ノ數
 額及ヒ目的物及ヒ原因ノ表示
 第三 支拂命令ヲ發シタルコトノ申立ニ依リ管轄ノ制限ニ關シテ其申請者ハ口頭ニ其管轄ノ
 第三百八十五條 裁判所ハ申請ヲ調査シ其申請カ前三條ノ規定ニ適當セス又ハ申請ノ旨趣ニ於テ
 請求ノ理由ナキ又ハ現時理由ナキコト顯ハルトキハ其申請却下ス可キニ認ム
 請求又ハ別ノニ付支拂命令ヲ發スルコトヲ得サルトキハ亦其申請却下ス然レトモ數箇ノ請
 求中或ハ別ノ理由由テ之ヲ其其他ノ之ニ理由ヲ見ザルトキハ其理由別ニ認ム可キニ限
 右却下命令ニ對シテ不服ヲ申立ツルコトヲ得然レトモ通常ノ認訴手續ニ依リ認訴スルチ
 妨ザルコト無シ
 第三百八十六條 支拂命令ハ豫メ債務者ヲ審訊セシメテ之ヲ發ス

支拂命令ニハ第三百八十四條第一號及ヒ第二號ニ掲ケタル申請ノ要件ヲ記載シ且即時ノ強制執
 行ヲ避クシテ欲セハ此命令送達ノ日ヨリ十四日ノ期間内ニ請求ヲ満足セシメ及ヒ其手續ノ費用
 ニ付キ定ムル數額ヲ債權者ニ辨濟ス可ク又ハ裁判所ニ異議ヲ申立ツ可キ旨ノ債務者ニ對スル命
 令ヲ記載ス可シ
 前項ノ期間ハ爲替日ニ生スル請求ニ付テハ二十四時間其他ノ請求ニ付テハ申立ニ因リ三日マテ
 之ヲ短縮スルコトヲ得
 第三百八十七條 權利拘束ノ效力ハ支拂命令ヲ債務者ニ送達スルチ以テ始マル
 支拂命令ノ送達ハ之ヲ債權者ニ通知ス可シ
 第三百八十八條 債務者ハ支拂命令ニ對シ書面又ハ口頭ヲ以テ異議ヲ申立テ爲スコトヲ得
 第三百八十九條 債務者ハ請求ノ全部又ハ一分ニ對シ適當ナル時間ニ異議ヲ申立ツルコトヲ得
 命令ノ效力ヲ失フ然レトモ權利拘束ノ效力ハ存續ス
 數箇ノ請求中或ルモノニ對シ異議ヲ申立テタルトキハ支拂命令ハ其他ノ請求及ヒ之ニ相當スル
 費用ノ部分ニ付キ效力ヲ有ス
 第三百九十條 適當ナル時間ニ異議ヲ申立テタル場合ニ於テ請求ニ付キ起ス可キ訴力區裁判所ノ
 管轄ニ屬スルトキハ其訴力支拂命令ノ送達ト同時ニ區裁判所ニ之ヲ起シタルモノト看做ス其口
 頭辯論ノ期日ハ第三百七十七條ノ規定ニ從ヒテ之ヲ定ム
 第三百九十一條 請求ニ付キ起ス可キ訴力地方裁判所ノ管轄ニ屬スル場合ニ於テハ適當ナル時間
 異議ヲ申立アリタルコトヲ債務者ニ通知ス可シ
 債權者其通知書ヲ送達アリタル日ヨリ起算シ一個月ノ期間内ニ管轄裁判所ニ訴ヲ起ササルトキ

權利拘束ノ效力ヲ失フ
第三百九十二條 督促手續ノ費用ハ適當ナル時間ニ異議ノ申立アリタル場合ニ於テハ起ス可キ訴訟ノ費用ノ一分ト看做ス

前條ノ場合ニ於テ期間内ニ訴ヲ起ササルトキハ手續ノ費用ハ債權者ノ負擔ニ歸ス
第三百九十三條 支拂命令ハ其命令中ニ掲ケタル期間ノ經過後債權者ノ申請ニ因リ之ヲ假ニ執行シ得ヘキコトヲ宣言ス但假執行ノ宣言前債務者異議ヲ申立テサルトキハ限ル

右假執行ノ宣言ハ支拂命令ニ付ス可キ執行命令ヲ以テ之ヲ爲ス其執行命令ニハ債權者ニ於テ計算スル手續ノ費用ヲ掲ク可シ

債權者ノ申請ヲ却下スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第三百九十四條 執行命令ハ假執行ノ宣言ヲ付シタル闕席判決ト同一ナリトス其執行命令ニ對シテハ第二百五十五條乃至第二百六十四條ノ規定ニ從ヒテ故障ヲ申立ツルコトヲ得請求カ區裁判所ノ管轄ニ屬セサルトキハ區裁判所ハ其故障ヲ法律上ノ方式及ヒ期間ニ於テ申立テタルヤノ點

ノミニ付キ辯論及ヒ裁判ヲ爲ス此場合ニ於テハ第三百九十一條第二項ニ定メタル期間故障ヲ許ス判決ヲ決定ヲ以テ始マル

第三百九十五條 時期ニ後レテ申立テタル異議ハ命令ヲ以テ之レヲ却下ス

此却下ノ命令ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第三編 上訴 第一章 控訴

第三百九十六條 控訴ハ區裁判所又ハ地方裁判所ノ第一審ニ於テ爲シタル終局判決ニ對シテハ之

ヲ爲ス

第三百九十七條 終局判決前ニ爲シタル裁判ハ亦控訴裁判所ノ判斷ヲ受ク但此法律ニ於テ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

但故障ヲ許ササル闕席判決ニ對シテハ懈怠ナカガシコトヲ理由トスルトキニ限り控訴ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトヲ得

第三百九十九條 控訴ハ口頭辯論ノ前ニ於テハ被控訴人ハ承諾カクシテ之ヲ取下クルコトヲ得

控訴ノ取下ハ上訴權ヲ喪失スル結果ヲ生ス

第四百條 控訴期間ハ一ヶ月トス此期間ハ不變期間ニシテ判決ノ送達ヲ以テ始マル

判決ノ送達前ニ提起シタル控訴ハ無効トス

第二百四十二條ノ規定ニ從ヒテ控訴期間内ニ追加裁判ヲ以テ判決ヲ補充シタルトキハ控訴期間ノ進行ハ最初ノ判決ニ對スル控訴ニ付テモ追加裁判ノ送達ヲ以テ始マル

第四百一條 控訴ノ提起ハ控訴狀ヲ控訴裁判所ニ差出シテ之ヲ爲ス

此控訴狀ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 控訴セラルル判決ノ表示

第二 此判決ニ對シテ控訴ヲ爲ス旨ノ陳述

此他控訴狀ハ準備書面ニ關スル一般ノ規定ニ從ヒテ之ヲ作リ且判決ニ對シテ如何ナル程度ニ於テ不服カレヤ及ヒ判決ニ付キ如何ナル變更ヲ爲ス可キヤハ申立テ掲ク若シ新ニ主張セントスル事

81

實及び證據方法アルトキハ其新ナル事實及び證據方法ヲ掲ク可シ
第四百三條 判然許テ可カラサル控訴又ハ判然法律上ノ方法ニ適セス若クハ其期間ノ經過後ニ起
シタル控訴ハ裁判長ニ命令ヲ以テ之ヲ却下ス
此却下ノ命令ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第四百三條 控訴狀ノ送達ト口頭辯論ノ期日トノ間ニ存スルコトヲ要スル時間ニ付テハ第九十

四條ノ規定ヲ適用シ答辯書ヲ差出ス可キ期間ノ備告ニ付テハ第九十九條ノ規定ヲ適用ス

前項ノ場合ニ於テモ亦第三百三條ノ規定ヲ適用スルコトヲ得

第四百四條 答辯書ハ準備書面ニ關スル一般ノ規定ニ從ヒテ之ヲ作り且被控訴人ノ一定ノ申立及

其主張セシトスル新ナル事實及證據方法ヲ掲ク可シ

第四百五條 被控訴人ハ自己ノ控訴ヲ放棄シタルトキ又ハ控訴期間ノ經過シタルトキト雖モ附帶

控訴ヲ爲スコトヲ得

附帶判決ニ對シ附帶控訴ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトニ付テハ第三百九十八條ノ規定ニ從フ

第四百六條 左ノ場合ニ於テハ附帶控訴ハ其效力ヲ失フ

第一 控訴ヲ不適法トシテ判決ヲ以テ棄却シタルトキ

第二 控訴ヲ取下ケタルトキ

然レトモ被控訴人ハ控訴期間内ニ附帶控訴ヲ爲シタルトキハ之ヲ獨立ノ控訴ト看做ス

第四百七條 答辯書ニ新ナル事實若クハ證據方法ヲ掲ケ又ハ附帶控訴ヲ爲ス旨ノ陳述ヲ掲ケタル

トキハ之ヲ控訴人ニ送達不可シ

第四百八條 右ノ外控訴ノ訴訟手續ニハ地方裁判所ノ第一審ノ訴訟手續ノ規定ヲ進用ス但本章ノ

規定ニ依リ差異ノ生スルモノハ此ノ限ニ在ラス

第四百九條 當事者ノ雙方ヨリ控訴ヲ起シタルトキハ其兩控訴ニ付キ辯論及ヒ裁判ヲ同時ニ爲ス

トキハ之ヲ通例トス

第四百十條 口頭辯論ハ其期日ニ於テ被控訴人ノ控訴期間ノ未タ經過セサルトキハ其中立ニ因リ

期間ノ滿了マテ之ヲ延期ス

附帶判決ヲ受ケタル原告若クハ被告ヨリ其判決ニ對シ故障ヲ申立テ相手方ヨリ控訴ヲ起シタル

トキハ控訴ニ付テノ辯論及ヒ裁判ハ故障ノ完結マテ職權ヲ以テ之ヲ延期ス

第四百十一條 控訴裁判所ニ於ケル訴訟ハ不服ノ申立ニ因リ定マリタル範圍内ニ於テ之ヲ辯論ス

第四百十二條 當事者ハ其控訴ノ申立及ヒ不服ヲ申立テラレタル裁判ノ當否ヲ明瞭ナラシムル爲

メ必要ナル限リハ口頭辯論ノ際第一審ニ於ケル辯論ノ結果ヲ演述ス可シ

演述ノ不正確又ハ不完全ナル場合ニ於テハ裁判長ハ其更正若クハ補充ヲ爲サシメ又必要ナル場

合ニ於テハ辯論ヲ再開シテ之ヲ爲サシム可シ

第四百十三條 訴ノ變更ハ相手方ハ承諾アルトキト雖モ之ヲ許サス

第四百十四條 妨訴ノ抗辯ハ職權ヲ以テ調査ス可カラサルモ之ニシテ且原告若クハ被告カ其過失

ニ非スシテ第一審ニ於テ提出シ能ハサリシコトヲ疏明スルトキニ限り之ヲ主張スルコトヲ得

本案ノ辯論ハ妨訴ノ抗辯ニ基キ之ヲ拒ムコトヲ得然レトモ裁判所ハ職權ヲ以テ妨訴ノ抗辯ニ

付キ分離シタル辯論ヲ命スルコトヲ得

第四百十五條 當事者ハ第一審ニ於テ主張セザリシ攻撃、防禦ノ方法殊ニ新ナル事實及證據方

法ヲ提出スルコトヲ得

第四百十六條 新ナル請求ハ第九十六條第二號及ヒ第三號ノ場合又ハ相殺スルコトヲ得ヘキモ
ノニシテ且原告若クハ被告ガ其過失ニ非ズシテ第一審ニ於テ提出シ能ハザルシテ或ハ疏明スル
トキニ限り之ヲ起スコトヲ得

第四百十七條 事實又ハ證書ニ付キ第一審ニ於テ爲カザリシ陳述又ハ拒ミタル陳述ハ第二審ニ於
テ之ヲ爲スコトヲ得

第四百十八條 第一審ニ於テ爲カザリシ陳述又ハ拒ミタル陳述ハ第二審ニ於テモ亦其效力ヲ有スルモ其
第四百十九條 控訴裁判所ハ控訴ヲ許ス可キヤ否ヤ又控訴ヲ法律上ノ方式ニ從ヒ若クハ其期間ニ
於テ起シタルヤ否ヤヲ職權ヲ以テ調査ス可シ若シ此要件ノ一ヲ缺クトキハ判決ヲ以テ控訴ヲ不
適當トシテ棄却ス可シ

第四百二十條 第一審ノ裁判ハ變更ヲ申立テタル部分ニ限り之ヲ變更スルコトヲ得

第四百二十一條 第一審ニ於テ是認シ又ハ非認シタル請求ニ屬スル總テノ爭點ニシテ申立ニ從ヒ
辯論及ヒ裁判ヲ必要トスルモハ第一審ニ於テ此爭點ニ付キ辯論及ヒ裁判ヲ爲サズトキモ雖
モ控訴裁判所ニ於テ其辯論及ヒ裁判ヲ爲ス

第四百二十二條 控訴裁判所ハ左ノ場合ニ於テ事件ニ付キ保ホ辯論ヲ要トスルコトキハ其事件ヲ
第一審裁判所ニ差戻ス可シ

第四百二十三條 第一審ニ於テ訴訟手續ニ付テノ規定ニ違背シタルトキハ控訴裁判所ハ其判決及
遺言シタル訴訟手續ノ部分ヲ廢棄シ事件ヲ第一裁判所ニ差戻ス可トモ得

第四百二十四條 控訴ノ理由ナシトスルトキハ判決ヲ以テ控訴ノ棄却ヲ言渡ス可シ

第四百二十五條 判決ヲ控訴人ノ不利益ニ變更スルコトハ相手方カ控訴又ハ附帶控訴ノ方法ヲ以
テ判決ニ付キ不服ヲ申立テタル部分ニ限り之ヲ爲ス可トモ得

第四百二十六條 第二百十條ノ規定ニ從ヒテ防禦ノ方法ヲ却下スルトキハ其防禦ノ方法ヲ主張ス
ル權之ヲ被告ニ留保ス可シ

第四百二十七條 第二百四十三條ノ規定ニ從ヒテ判決ノ補充ヲ申立ツルコトヲ
得

留保ヲ掲ケタル判決ハ上訴及ヒ強制執行ニ付テハ終局判決ト看做ス

第四百二十七條 防禦ノ方法ニシテ被告ニ其主張ヲ留保スルモノニ付テハ其訴訟ハ第二審ニ屬
ス

爾後ノ手續ニ於テ訴ヲ以テ主張シタル請求ノ理由ナカリシコトノ顯ハルルトキハ前判決ヲ廢棄
シテ其訴ヲ棄却シ且申立ニ因リ判決ニ基キ支拂ヒタルモノ又ハ給付シタルモノヲ返還ス可キコ
トヲ言渡シ並ニ費用ニ付キ裁判ヲ爲ス可シ

第四百二十八條 請求ガ其原因及ヒ數額ニ付キ爭アル場合ニ於テ不服ヲ申立テラレタル判決カ先ツ其原因
ニ付キ裁判ヲ爲シタルモノナルトキ

第四百二十九條 不服ヲ申立テラレタル判決カ證書訴訟及ヒ爲替訴訟ニ於テ敗訴ノ被告ニ別訴訟ヲ以テ追
訴ヲ爲ス權ヲ留保シタルモノナルトキ

第四百三十條 第一審ニ於テ訴訟手續ニ付テノ規定ニ違背シタルトキハ控訴裁判所ハ其判決及
遺言シタル訴訟手續ノ部分ヲ廢棄シ事件ヲ第一裁判所ニ差戻ス可トモ得

第四百三十一條 控訴ノ理由ナシトスルトキハ判決ヲ以テ控訴ノ棄却ヲ言渡ス可シ

第四百三十二條 判決ヲ控訴人ノ不利益ニ變更スルコトハ相手方カ控訴又ハ附帶控訴ノ方法ヲ以
テ判決ニ付キ不服ヲ申立テタル部分ニ限り之ヲ爲ス可トモ得

第四百三十三條 第二百十條ノ規定ニ從ヒテ防禦ノ方法ヲ却下スルトキハ其防禦ノ方法ヲ主張ス
ル權之ヲ被告ニ留保ス可シ

第四百三十四條 第二百四十三條ノ規定ニ從ヒテ判決ノ補充ヲ申立ツルコトヲ
得

留保ヲ掲ケタル判決ハ上訴及ヒ強制執行ニ付テハ終局判決ト看做ス

第四百三十七條 防禦ノ方法ニシテ被告ニ其主張ヲ留保スルモノニ付テハ其訴訟ハ第二審ニ屬
ス

爾後ノ手續ニ於テ訴ヲ以テ主張シタル請求ノ理由ナカリシコトノ顯ハルルトキハ前判決ヲ廢棄
シテ其訴ヲ棄却シ且申立ニ因リ判決ニ基キ支拂ヒタルモノ又ハ給付シタルモノヲ返還ス可キコ
トヲ言渡シ並ニ費用ニ付キ裁判ヲ爲ス可シ

第四百二十八條 控訴人カ口頭辯論ノ期日ニ出頭セザルトキハ出頭シタル被控訴人ノ中立ニ因リ
 關席判決ヲ以テ控訴ノ棄却ヲ言渡ス可シ
 第四百二十九條 被控訴人日頭辯論ノ期日ニ出頭セザル場合ニ於テ出頭シタル控訴人ヨリ關席判
 決ノ申立ヲ爲ストキハ第一審裁判ノ證據ト爲リタルモノニ抵觸セサル控訴人ノ事實上ノ供述ハ
 被控訴人之チ自白シタルモノト看做シ且第一審裁判所ノ事實上ノ確定ヲ補充シ若シ辯駁スル
 爲メ控訴人ハ申立テタル適法ノ證據調ハ既ニ之ヲ爲シ及ヒ其結果ヲ得タルモノト看做シ關席判
 決ヲ爲ス

第四百三十條 判決中ノ事實ノ摘示ニ付テハ前審ノ判決ヲ引用スルコトヲ得
 第四百三十一條 控訴裁判所ノ書記ハ控訴狀ノ提出ヨリ二十四時間ニ第一審裁判所ノ書記ニ訴訟
 記録ノ送付ヲ求ム可シ
 控訴完結ノ後其記録ハ第三審ニ於テ爲シタル判決ノ證據トシテ本ト共ニ第一審裁判所ノ書記ニ
 送付スル可シ
 第四百三十二條 上訴合衆山ニ於テハ第一審裁判所ノ書記ハ第一審裁判所ノ書記ニ
 第四百三十三條 終局判決前ニ爲シタル裁判ハ亦上告裁判所ノ判斷ヲ受ク但此法律ニ於テ不服ヲ
 申立ツルコトヲ得スト明記シタルトキ又ハ抗告方以テ不服ヲ申立ツルコトヲ得ル限ハ此限ニ
 在ラズ
 第四百三十四條 其上告ハ法律ニ違背シタル裁判ナルコトヲ理由トスルトキニ限リ之ヲ爲ス可キ

得

第四百三十五條 法則ヲ適用セス又ハ不當ニ適用シタルトキハ法律ニ違背シタルコトトシ
 第四百三十六條 裁判ハ左ノ場合ニ於テハ常ニ法律ニ違背シタルコトトシ
 第一 規定ニ從ヒ判決裁判所ヲ構成セザルコトキ
 第二 法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除外セラレタル判事カ裁判ニ參與シタルトキ但忌避ノ申請又
 ハ上訴ヲ以テ除外ノ理由ヲ主張シタルモ其效ナカリシトキハ此限ニ在ラス
 第三 判事カ忌避セラレ且忌避ノ申請ヲ理由アリト認メタルニ拘ハラズ裁判ニ參與シタルトキ
 第四 裁判所カ其管轄又ハ管轄違ヲ不當ニ認メタルトキ
 第五 訴訟手續ニ於テ原告若シハ被告カ法律ノ規定ニ從ヒ代理セラレザルコトキ
 第六 訴訟手續ハ公行ニ付テハ規定ニ違背シタル日頭辯論ニ基キ裁判所ノ書記ハ
 第七 裁判ニ理由ヲ付セザルコトキ
 第四百三十七條 上告期間ハ一个月トス此期間ハ不變期間ニシテ判決ノ送達ヲ以テ始マル
 判決ノ送達前ニ提起シタル上告ハ無効トス
 第四百三十八條 上告ヲ提起ハ上告狀ヲ上告裁判所ニ差出シテ之ヲ爲ス
 此上告狀ニ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス
 第一 上告セラルル判決ヲ表示
 第二 此判決ニ對シ上告ヲ爲ス旨ノ陳述
 第三 此判決ニ對シ上告ノ規定ニ從ヒ之ヲ作リ得ル程度ニ於
 此他上告狀ハ準備書面ニ關スル一般ノ規定ニ從ヒ之ヲ作リ得ル程度ニ於
 テ不服ナルヤ及ヒ判決ニ付キ如何ナル程度ニ於テ破毀ヲ爲ス可キヤノ申立ヲ揭ク且法則ヲ適用

セス若クハ不當ニ適用シタルコトヲ上告ノ理由トスルトキハ其法則ノ表示又ハ訴訟手續ニ付テ
ノ規定ニ違背シタルコトヲ上告ノ理由トスルトキハ其欠缺ヲ明カニスル事實ノ表示又ハ法律ニ
違背シテ事實ヲ確定シ若クハ違脱シ若クハ提出シタリト看做シタルコトヲ上告ノ理由トスル
キハ其事實ノ表示ヲ掲ク可シ

第四百三十九條 上告裁判所ハ上告人ヲ呼出シ其陳述ヲ聽キ上告ヲ許ス可カラサルモノナルトキ
又ハ法律上ノ方式及ヒ期間ニ於テ起ササルトキ又ハ第四百三十四條ノ規定ニ依ラサルトキハ判
決ヲ以テ之ヲ棄却ス可シ

上告人カ呼出ノ期日ニ出頭セサルトキハ上告ヲ取下ケタルモノト看做ス但出頭セザリシコトヲ
期日ヨリ七日ノ期間内ニ十分ナル理由ヲ以テ辯解シタルトキハ更ニ期日ヲ定ム

第四百四十條 上告狀ノ送達ノ口頭辯論ノ期日トノ間ニ存スルコトヲ要スル時間ニ付テハ第百九
十四條ノ規定ヲ適用シ答辯書ヲ差出ス可キ期間ノ催告ニ付テハ第百九十九條ノ規定ヲ適用ス
前項ノ場合ニ於テモ亦第二百三條ノ規定ヲ適用スルコトヲ得

第四百四十一條 答辯書ハ準備書面ニ關スル一般ノ規定ニ從ヒテ之ヲ作り且一定ノ申立ヲ掲ク可
シ

第四百四十二條 被上告人ハ附帶上告ヲ爲スコトヲ得

此附帶上告ニ付テハ附帶控訴ノ規定ヲ適用ス

第四百四十三條 答辯書ニ附帶上告ヲ爲ス旨ノ陳述ヲ掲ケタルトキハ之ヲ上告人ニ送達ス可シ
第四百四十四條 右ノ外上告ノ訴訟手續ハ地方裁判所ノ第一審ノ訴訟手續ノ規定ヲ適用ス但本
條ノ規定ニ依リ差異ノ生スルモノハ此限ニ在ラス

第四百四十五條 上告裁判所ハ當事者ノ爲シタル申立ノミニ付キ調査ヲ爲ス

第四百四十六條 上告裁判所ハ裁判ヲ爲スニ付キ控訴裁判所カ其裁判ノ證據トシタル事實ヲ標準
トス其事實ノ外ハ第四百三十八條第三項ニ掲ケタル事實ニ限リ之ヲ斟酌スルコトヲ得
證據調ヲ必要トスルトキハ上告裁判所ハ之ヲ命ズ可シ

第四百四十七條 上告ノ理由ヲ申立タルトキハ不服ヲ申立テラレタル判決ヲ破毀ス可シ
訴訟手續ニ關スル規定ニ違背シタルニ因リ判決ヲ破毀スルトキハ其違背シタル部分ニ限リ訴訟
手續ヲモ亦破毀ス可シ

第四百四十八條 判決ヲ破毀スル場合ニ於テハ第四百五十一條ノ規定ヲ除ク外更ニ辯論及ヒ裁判
ヲ爲サシムル爲メ事件ヲ控訴裁判所ニ差戻シ又ハ之ヲ他ノ同等ナル裁判所ニ移送ス可シ
事件ノ差戻又ハ移送ヲ受ケタル裁判所ヲ新口頭辯論ニ基キ裁判ヲ爲スコトヲ要ス

第四百四十九條 當事者ハ破毀セラレタル判決ノ以前ニ於ケル口頭辯論ニ當リ提出スルコトヲ得
認明リシ事項ヲ新口頭辯論ニ際シ提出スル權利アリ

第四百五十條 事件ノ差戻又ハ移送ヲ受ケタル裁判所ハ上告裁判所ノ爲シタル法律ニ係ル判斷ニ
シテ判決ヲ破毀スル基本ト爲シタルモノヲ以テ新ナル辯論及ヒ裁判ノ基本ト爲ス義務アリ

第四百五十一條 上告裁判所ハ左ノ場合ニ於テ事件ニ付キ裁判ヲ爲スコトヲ得
第一 確定シタル事實ニ法律ヲ適用スルニ當リ法律ニ違背シタル爲メ判決ヲ破毀シ且其事件カ
第四裁判ヲ爲スニ熟スル程キニ至ラズニテ
第二 無訴權ノ爲メ又ハ裁判所ノ管轄違ナル爲メ判決ヲ破毀スルトキ

第四百五十二條 上告ノ理由ヲ申立タルトキハ之ヲ棄却ス可シ

第四百五十三條 裁判カ其理由ニ於テ法律ニ違背シタルトキト雖モ他ノ理由ニ因リ裁判ノ正當ナ
ル上キ然レ上告ヲ棄却ス可シ此ノ時、上告ノ審判官ハ、或ル時、上告ノ審判官ハ、

第四百五十四條 左ノ諸件ニ關スル控訴ノ規定ハ上告ニ之ヲ準用ス

第一 關席判決ニ對スル不服ノ申立

第二 控訴ノ取下

第三 當事者ノ雙方ヨリ控訴ヲ起シタル場合ニ於ケル訴訟手續及ヒ控訴ト故障ト同時ニ爲シ

第四 口頭辯論ヲ延期

第五 口頭辯論ノ際ニ於ケル當事者ノ演述

第六 妨訴ノ抗辯ニ付テズ辯論

第七 控訴ヲ起シタル者ノ不利益トナル裁判ヲ爲ス可ラザルコト

第八 記録ノ送付及返還

第九 第三審控訴

第四百五十五條 抗告ハ訴訟手續ニ關スル申請ヲ口頭辯論ヲ經スシテ却下シタル裁判ニ對シ其他

此法律ニ於テ特ニ掲ケタル場合ニ限り之ヲ爲ス可ト不得

第四百五十六條 抗告ニ付テハ直近ニ上級裁判所其裁判ヲ爲ス

抗告裁判所ノ裁判ニ對シテハ其裁判ニ因リ新ナル獨立ノ抗告理由ヲ生ズルコトキニ非サレハ更

ニ抗告ヲ爲ス可ト不得

第四百五十七條 抗告ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長ノ屬スル裁判所

三 抗告狀ヲ差出シ送付之ヲ爲ス

訴訟カ區裁判所ニ屬シ若クハ管轄區屬シタルトモ然レテ鑑定人ヨリ若クハ證書ヲ提出ス

並義務ヲ履行シ宣言法受領タル第三者ヨリ抗告狀ヲ爲ス可ト口頭ヲ以テ之ヲ爲ス可ト不得

第四百五十八條 抗告ハ新ナル事實及ヒ證據方法ヲ以テ證據ヲ爲ス可ト不得

第四百五十九條 不服申立テラレタル裁判所又ハ裁判長カ再度ノ考案若クハ新

ナル提供ニ基キ抗告理由ヲ申立テラレタルコトキハ不服ヲ點テ更正シ又理由大シトスルトキハ裁判所

又ハ裁判長ノ意見ヲ付シテ三日ノ期間内ニ抗告ヲ抗告裁判所ニ送付シ又適當トスル場合ニ於テ

復テ訴訟記録ヲ送付ス可シ

第四百六十條 抗告ハ此法律ニ於テ別段ノ規定ヲ設ケタル場合ニ限リ執行停止ノ效力ヲ有ス

然レテ不服法申立テラレタル裁判所又ハ裁判長ハ抗告ニ付テハ裁判所又ハ

其執行ヲ中止テ命スルコトヲ得

抗告裁判所ハ抗告ニ付テハ裁判所又ハ裁判長ハ抗告ニ付テハ裁判所又ハ

其執行ヲ中止テ命スルコトヲ得

第四百六十一條 抗告ハ急迫ナル場合ニ限リ直チニ抗告裁判所ニ之ヲ爲ス可ト不得

抗告裁判所ハ裁判所又ハ前ニ不服ヲ申立テラレタル裁判所又ハ裁判長ノ意見及

ヒ記録ヲ要求スルコトヲ得

抗告裁判所ハ事件ヲ急迫シテ認メタルトモ不服法申立テラレタル裁判所又ハ裁判長ノ意見及

ヒ裁判長ニ其事件ヲ送付シ且其旨ヲ抗告人ニ通知ス可シ

第四百六十二條 抗告裁判所ハ口頭辯論ヲ經スシテ裁判所又ハ裁判長ノ意見及

ヒ裁判長ニ其事件ヲ送付シ且其旨ヲ抗告人ニ通知ス可シ

抗告裁判所ノ抗告人ニ反對ノ利害關係ヲ有スル者ニ抗告ヲ通知シテ書面上ノ陳述ヲ爲サシムル
 陳述口頭ヲ以テ抗告ヲ爲シ得ヘキ場合ニ於テ亦口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得
 抗告裁判所ノ口頭辯論ノ爲ニ當事者ヲ呼出スコトヲ得
 第四百六十三條 抗告裁判所ハ抗告ヲ許ス可キヤ否ヤ又法律上ノ方式ニ從テ若クハ其期間ニ於テ
 提出シタル抗告ノ職權ヲ以テ調査ス可シシテ之ヲ許ス可キ場合ニ於テハ其期間ニ於テ
 若シ此要件ノ一ヲ缺クトキハ抗告ヲ不適法トシテ棄却ス可シ

第四百六十四條 抗告ヲ適法ニ決テ且理由ヲ示スルニキキ抗告裁判所ハ不服ヲ申立テラレタル
 裁判ヲ廢棄シテ自ラ更ニ裁判ヲ爲シ又ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判
 長ニ委任シタル裁判ヲ爲サシムル得ル

第四百六十五條 受命判事若クハ受託判事ノ裁判又ハ裁判所書記ノ處分ノ變更ヲ求ムルニハ先ツ
 受託裁判所ノ裁判ヲ求ム可シ
 抗告及受託裁判所ノ裁判ニ對シテ之ヲ爲スコトヲ得
 第四百六十六條 即時抗告ノ場合ニ於テ左ノ特別ノ規定ニ從テス

第四百六十六條 即時抗告ノ場合ニ於テ左ノ特別ノ規定ニ從テス
 抗告カ七日ノ不變期間内ニ之ヲ爲ス可シ其期間ニ裁判ヲ送達スル始メテ第三百五十三條第六百
 八十九條及第三百六十九條第三項ノ場合ニ於テハ裁判ノ言渡ヨリ始メル 告裁判所ニ抗告ヲ提
 出シタルトキハ急迫トラスホ認メタル場合ニ於テモ亦不變期間ヲ保存ス

再審ヲ求ムル訴ニ付テノ要件存スルトキハ不變期間ノ滿了後ト雖モ此訴ノ爲メ定メタル期間内
 ニ抗告ヲ爲スコトヲ得
 第四百六十七條 確定ノ終局判決ヲ以テ終結シタル訴訟ニ對シテ又ハ原狀回復ノ訴ニ因リ之ヲ
 再審スルコトヲ得

第四百六十七條 確定ノ終局判決ヲ以テ終結シタル訴訟ニ對シテ又ハ原狀回復ノ訴ニ因リ之ヲ
 再審スルコトヲ得
 第四百六十八條 左ノ場合ニ於テハ再審ヲ求ムルコトヲ得
 第一ノ規定ニ從ヒ判決裁判所ヲ構成セザリシトキ
 第二ノ規定ニ從ヒ職務ノ執行ニ際シテ除斥セラルル判事ガ裁判ニ參與シタルトキ但忌避ノ申請又
 ハ上訴ヲ以テ除斥ノ理由ヲ主張シタルモ其效ナカリシトキハ此限ニ在ラス
 第三ノ判事ガ忌避セラレ且忌避ノ申請カ理由アリト認メラレタルニ拘ハラズ裁判ニ參與シタル
 シトキ
 第四ノ訴訟手續ニ於テ原告若クハ被告ガ法律ノ規定ニ從ヒ代理セラレザリシトキ
 第二號及第三號ノ場合ニ於テ上訴若クハ故障ヲ以テ取消ヲ主張シ得ヘカリシトキハ取消ノ訴
 ナ許サズ

第四百六十九條 左ノ場合ニ於テハ原狀回復ノ訴ニ因リ再審ヲ求ムルコトヲ得
 第一ノ規定ニ從ヒ判決裁判所ヲ構成セザリシトキ
 第二ノ規定ニ從ヒ職務ノ執行ニ際シテ除斥セラルル判事ガ裁判ニ參與シタルトキ但忌避ノ申請又
 ハ上訴ヲ以テ除斥ノ理由ヲ主張シタルモ其效ナカリシトキハ此限ニ在ラス
 第三ノ判事ガ忌避セラレ且忌避ノ申請カ理由アリト認メラレタルニ拘ハラズ裁判ニ參與シタル
 シトキ
 第四ノ訴訟手續ニ於テ原告若クハ被告ガ法律ノ規定ニ從ヒ代理セラレザリシトキ
 第二號及第三號ノ場合ニ於テ上訴若クハ故障ヲ以テ取消ヲ主張シ得ヘカリシトキハ取消ノ訴
 ナ許サズ

第一 刑法ニ掲ケタル職務上ノ義務ニ違背シタル罪ヲ訴訟ニ關シ犯シタル刑事カ裁判ニ參與シタリシトキ

第二 原告若クハ被告ノ法律上代理人若クハ訴訟代理人又ハ相手方若クハ其法律上代理人若クハ訴訟代理人カ罰セラル可キ行爲ヲ訴訟ニ關シテ爲シタリシトキ

第三 判決ノ證據ト爲リタル證書カ偽造又ハ變造ナリシトキ

第四 證人若クハ鑑定人カ供述ニ因リ又ハ通事カ判決ノ證據ト爲リタル通譯ニ因リ偽證ノ罪ヲ犯シタリシトキ

第五 判決ノ證據ト爲リタル刑事上ノ判決カ他ノ確定ト爲リタル刑事上ノ判決ヲ以テ廢棄若クハ破毀セラレタリシトキ

第六 原告若クハ被告カ同一ノ事件ニ付テノ判決ニシテ前ニ確定ト爲リタルモノヲ發見シ其判決不服ヲ申立テラレタル判決ト抵觸スルトキ

第七 相手方若クハ第三者ノ所爲ニ依リ以前ニ提出スルコトヲ得サリシ證書ニシテ原告若クハ被告ノ利益ト爲ル可キ裁判ヲ爲スニ至ラシム可キモノヲ發見シタルトキ

第一號乃至第四號ノ場合ニ於テハ罰セラル可キ行爲ニ付テ判決カ確定ト爲リタルトキ又ハ證據欠缺外ナル理由ヲ以テ刑事訴訟手續ノ開始若クハ實行ヲ爲シ得サルトキニ限り再審ヲ求ムルコトヲ得

第四百七十條 原狀回復ノ訴ハ原告若クハ被告カ自己ノ過失ニ非スシテ前訴訟手續ニ於テ殊ニ故障又ハ控訴若クハ附帶控訴ニ依リ原狀回復ノ理由ヲ主張スルコト能ハサリシトキニ限り之ヲ爲スコトヲ得

第四百七十一條 不服ヲ申立テラレタル判決前ニ同一ノ裁判所又ハ下級ノ裁判所ニ於テ爲シタル裁判ニ關スル不服ノ理由ハ再審ヲ求ムル訴ト共ニ之ヲ主張スルコトヲ得但不服ヲ申立テラレタル判決カ其裁判ニ根據スルトキニ限ル

第四百七十二條 再審ヲ求ムル訴ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所ノ管轄ニ專屬ス

同一ノ事件ニ付キ二分ハ下級ノ裁判所又一分ハ上級ノ裁判所ニ於テ爲シタル數箇ノ判決ニ對スル上級ノ裁判所ノ管轄ニ專屬ス

督促手續ニ依リテ區裁判所ノ發シタル執行命令ニ對シ再審ヲ求ムル訴ハ其命令ヲ發シタル區裁判所ノ管轄ニ專屬ス然レトモ其請求カ區裁判所ノ管轄ニ屬セサルトキハ請求ニ付テノ訴訟ヲ管轄スル裁判所ニ專屬ス

第四百七十三條 訴ノ提起及ヒ其後ノ訴訟手續ニハ以下數條ニ於テ別段ノ規定ヲ設ケサル限リハ其訴ニ付キ辯論及ヒ裁判ヲ爲ス可キ裁判所ノ訴訟手續ニ關スル規定ヲ準用ス

第四百七十四條 訴ハ二个月ノ不變期間内ニ之ヲ起ス可シ
此期間ハ原告若クハ被告カ不服ノ理由ヲ知リタル日ヲ以テ始マル若シ原告若クハ被告カ判決ノ確定前ニ不服ノ理由ヲ知リタルトキハ判決ノ確定ヲ以テ始マル
判決確定ノ日ヨリ起算シテ五年ノ滿了後ハ訴ヲ爲スコトヲ得ス
前二項ノ規定ハ第四百六十八條第四號ノ場合コトニ適用セズ此場合ニ於テ其訴ノ提起ノ期間ハ原告若クハ被告又ハ其法律上代理人カ送達ニ因リ判決アリタルコトヲ知リタル日ヲ以テ始マル
第四百七十五條 訴狀ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 取消又は原状回復ノ訴ヲ受ケル判決ノ表示
 第二 取消又は原状回復ノ訴ヲ起ス旨ノ陳述
 此他訴狀ノ準備書面ニ關スル一般ノ規定ニ從ヒテ之ヲ作リ且不服ノ理由ヲ表示シ此理由及ヒ不
 變期間ノ遵守ヲ明白ナラシムル事實ニ付テハ證據方法又如何ナル程度ニ於テ不服ヲ申立テラレ
 然レ判決未廢棄若クハ破毀不可キヤノ申立又本案ニ付キ更ニ如何ナル裁判ヲ爲ス可キヤノ申立
 ヲ掲グ可シ

第四百七十六條 判然許ス可カラサル訴又ハ判然法律上ノ方式ニ適セス若クハ其期間ノ經過後ニ
 起シタル訴ハ裁判長ノ命令ヲ以テ之ヲ却下ス可シ

此却下ノ命令ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第四百七十七條 原告ハ口頭辯論ノ期日ニ於テ相手方ノ陳述ノ有無ニ拘ハラズ再審ヲ求ムル理由
 及ヒ法律上ノ期間ノ遵守ヲ明白ニスル事實ヲ疏明ス可シ

第四百七十八條 許ス可カラサル訴又ハ法律上ノ方式ニ適セス若クハ其期間ノ經過後ニ起シタル
 訴ハ職權ヲ以テ判決ニ因リ不適法トシテ之ヲ棄却ス可シ

第四百七十九條 本案ニ付テノ辯論及ヒ裁判ハ不服申立ノ理由ニ存スル部分ニ限り更ニ之ヲ爲ス
 可シ

裁判所ハ本案ニ付テノ辯論前ニ再審ヲ求ムル理由及ヒ許否ニ付キ辯論及ヒ裁判ヲ爲スコトヲ得
 此場合ニ於テハ本案ニ付テノ辯論ハ再審ヲ求ムル理由及ヒ許否ニ付テノ辯論ノ續行ト看做ス

第四百八十條 原告ノ不利益ト爲ル判決ノ變更ハ相手方再審ヲ求ムル訴ヲ起シテ變更ヲ申立テ
 然レトキニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得

第四百八十二條 訴ガ上告裁判所ニ屬スルトキハ上告裁判所ハ再審ヲ求ムル理由及ヒ其許否ニ付
 テノ辯論ノ完結ガ係争事實ノ確定及ヒ斟酌ニ繫ルトキト雖モ其完結ヲ爲ス可シ

第四百八十三條 上訴ハ訴ニ付キ裁判ヲ爲シタル裁判所ノ判決ニ對シ一般ニ爲スコトヲ得ヘキト
 キニ限リ之ヲ爲スコトヲ得

第四百八十三條 第三者ガ原告及ヒ被告ノ共謀ニ因リ第三者ノ債權ヲ詐害スル目的ヲ以テ判決ヲ
 爲サシメタリト主張シ其判決ニ對シ不服ヲ申立ツルトキハ原状回復ノ訴ニ因レル再審ノ規定ヲ
 適用ス

此場合ニ於テハ原告及ヒ被告ヲ共同被告ト爲ス

第五編 證書訴訟及ヒ爲替訴訟

第四百八十四條 一定ノ金額ノ支拂其他ノ代替物若クハ有價證券ノ一定ノ數量ノ給付ヲ目的トス
 ル請求ハ其請求ヲ起ス理由タル總テノ必要ナル事實ヲ證書ニ依リ證スルコトヲ得ヘキトキハ證
 書訴訟ヲ以テ之ヲ主張スルコトヲ得

第四百八十五條 訴狀ニハ證書訴訟トシテ訴フル旨ノ陳述ヲ掲グ且證書ノ原本又ハ謄本ヲ添フル
 コトヲ要ス

第四百八十六條 本案ノ辯論ハ妨訴ノ抗辯ニ基キ之ヲ拒ムコトヲ得然レトモ裁判所ハ申立ニ因
 リ又ハ職權ヲ以テ此抗辯ニ付キ辯論ノ分離ヲ命スルコトヲ得

第四百八十七條 反訴ハ之ヲ爲スコトヲ得

證書ノ眞否及ヒ第四百八十四條ニ掲グタル以外ノ事實ニ關シテハ書證ノミヲ以テ適法ノ證據方
 法ト爲スコトヲ得

書證ノ申出ハ證書ノ提出ヲ以テノミ之ヲ爲スコトヲ得

第四百八十八條 原告ハ口頭辯論ノ終結ニ至ルマデハ被告ノ承諾ヲ要セスシテ通常ノ手續ニテ訴訟ヲ繫屬セシメテ證書訴訟ヲ止ムルコトヲ得

第四百八十九條 訴ヲ以テ主張シタル請求カ理由ナシト見エ又ハ被告ノ抗辯ニ因リ理由ナシト見ユルトキハ原告ノ請求ヲ却下ス可シ

證書訴訟ヲ許ス可カラサルトキ殊ニ適法ノ證據方法ヲ以テ原告ノ義務タル證據ヲ申出テス又ハ完全ニ之ヲ擧ケサル場合ニ於テハ被告カ口頭辯論ノ期日ニ出頭セス又ハ法律上ノ理由ナキ異議若クハ證書訴訟ニ於テ許ササル異議ノミヲ以テ訴ニ對シ抗辯シタルトキト雖モ此訴訟ニ於テハ其訴ヲ許ササルモノトシテ之ヲ却下ス可シ

第四百九十條 證書訴訟ニ於テ適法ノ證據方法ヲ以テ被告ノ義務タル證據ヲ申出テス又ハ完全ニ之ヲ擧ケサルトキハ被告ノ異議ハ證書訴訟ニ於テ許ササルモノトシテ之ヲ却下ス可シ

第四百九十一條 主張シタル請求ヲ争ヒタル被告ニハ敗訴ノ言渡ヲ受ケタル總テノ場合ニ於テ其權利ノ行使ヲ留保ス可シ

判決ニ此留保ヲ掲ケサルトキハ第二百四十二條ノ規定ニ依リ判決ノ補充ヲ申立ツルコトヲ得

留保ヲ掲ケタル判決ハ上訴及ヒ強制執行ニ付テハ之ヲ終局判決ト看做ス

第四百九十二條 被告ニ權利ノ行使ヲ留保シタルトキハ訴訟ハ通常ノ訴訟手續ニ於テ繫屬ス

此手續ニ於テ證書訴訟ヲ以テ主張シタル請求ノ理由ナカクシテ申立タルトキハ前判決ヲ廢棄シ原告ノ請求ヲ却下シ且其生ゼシシタル費用ノ全部又ハ二分ノ辨濟ヲ原告ニ言渡シ又前判決ニ基キ被告ヨリ支拂ヒ又ハ給付シタルモノノ辨濟ヲ申立ニ因リ原告ニ言渡ス可シ

右手續ニ於テ原告若クハ被告カ出頭セサルトキハ闕席判決ニ關スル規定ヲ準用ス

第四百九十三條 第四百二十六條及ヒ第四百二十七條ノ規定ハ證書訴訟ニ之ヲ適用セス

第四百九十四條 商法ニ規定シタル手形ニ因ル請求ヲ證書訴訟ヲ以テ主張スルトキハ爲替訴訟トシテ以下二條ニ掲ケル特別ノ規定ヲ適用ス

第四百九十五條 爲替ノ訴ハ支拂地ノ裁判所又ハ被告カ其普通裁判籍ヲ有スル地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

數人ノ爲替義務者カ共同ニテ訴ヲ受ク可キトキハ支拂地ノ裁判所又ハ被告ノ各人カ其普通裁判籍ヲ有スル地ノ裁判所各之ヲ管轄ス

第四百九十六條 訴狀ニハ爲替訴訟トシテ訴フル旨ヲ掲グルコトヲ要ス

訴ノ許ス可キモノナルトキハ直チニ口頭辯論ノ期日ヲ定ム

口頭辯論ノ期日ト訴狀送達トノ間ニハ少ナクトモ二十四時ノ時間ヲ存スルコトヲ要ス

第六編 強制執行
第一章 總則
第四百九十七條 強制執行ハ確定ノ終局判決又ハ假執行ノ宣言ヲ付シタル終局判決ニ因リテ之ヲ爲ス

第四百九十八條 判決ハ適法ナル故障ノ申立又ハ適法ナル上訴ノ提起ニ付キ定メタル期間ノ満了前ニハ確定セサルモノトス

判決ノ確定ハ故障若クハ上訴ヲ其期間内ニ申立若クハ提起スルニ因リ之ヲ遮斷ス

第四百九十九條 原告若クハ被告カ判決ノ確定ニ付キ證明書ヲ求ムルトキハ第一審裁判所ノ書記

キコトヲ疏明シタルトキハ其中立ニ因リ左ノ宣言ヲ爲ス可シ
 第一 第五百一條ノ場合ニ於テハ判決ヲ假ニ執行ス可カラサルコト
 第二 第五百二條及ヒ第五百三條ノ場合ニ於テハ債權者ノ假執行ノ申立ヲ却下スルコト
 第五百五條 總テノ場合ニ於テ裁判所ハ債務者ノ申立ニ因リ債權者豫メ保證ヲ立ツルトキハ假執行ヲ爲シ得ヘキ旨ヲ宣言スルコトヲ得

債務者力執行ノ前ニ保證ヲ立ツルコトヲ申出テサルトキハ債務者ノ申立ニ因リ債權者ニ保證ヲ立テシメ又ハ供託ヲ爲サシメテ執行ヲ免カルルコトヲ許ス可シ

第五百六條 假執行ニ關スル申立ハ判決ニ接著スル口頭辯論ノ終結前ニ之ヲ爲ス可シ

第五百七條 假執行ニ付テノ裁判ハ判決主文ニ之ヲ掲ケ可シ

第五百八條 職權ヲ以テ判決ノ假執行ヲ宣言ス可キ場合ニ於テ假執行ニ於テノ裁判ヲ爲ササルトキ又ハ判決ノ假執行ヲ宣言ス可キ債權者ノ申立ヲ看過シタルトキハ第二百四十二條及ヒ第二百四十三條ノ規定ニ從ヒ判決ノ補充ヲ爲スコトヲ得

第五百九條 第一審又ハ第二審ノ判決ニシテ假執行ノ宣言ヲカリシモノ又ハ條件附ノ假執行ノ宣言アリタルモノハ上訴ヲ以テ不服ヲ申立テサル部分ニ限リ口頭辯論ノ進行中ニ爲シタル原告若クハ被告ノ申立ニ因リ上級審ニ於テ其判決ニ假執行ノ宣言ヲ付ス可シ

第五百十條 本案ノ裁判又ハ假執行ノ宣言ヲ廢棄若クハ破毀又ハ變更スル判決ノ言渡アルトキハ假執行ハ其廢棄若クハ破毀又ハ變更ヲ爲ス限度ニ於テ效力ヲ失フ

假執行ノ宣言アリタル本案ノ判決ヲ廢棄若クハ破毀又ハ變更スルトキハ判決ニ基キ被告ノ支拂又ハ給付シタルモノノ辨濟ヲ被告ノ申立ニ因リ判決ヲ以テ原告ニ言渡スヘシ

第五百十一條 第二審ニ於テハ申立ニ因リ先少假執行ニ付キ辯論及ヒ裁判ヲ爲ス可シ
 口頭辯論ノ延期ニ付テハ第四百十條ノ規定ハ此場合ニ於テハ之ヲ適用セス

第五百十二條 假執行ニ付キ爲シタル裁判ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス
 第五百十三條 本編ノ規定ニ從ヒ原告若クハ被告ニ保證ヲ立ツル義務ヲ負ハシメ若クハ保證ヲ立テ又ハ供託ヲ爲スコトヲ許シタル場合ニ於テハ原告若クハ被告ハ其普通裁判籍ヲ有スル地ノ區裁判所又ハ執行裁判所ニ保證ヲ立テ又ハ供託ヲ爲スコトヲ得

第五百十四條 外國裁判所ノ判決ニ因レル強制執行ハ本邦ノ裁判所ニ於テ執行判決ヲ以テ其適法ナルコトヲ言渡シタルトキニ限リ之ヲ爲スコトヲ得

執行判決ヲ求ムル訴ニ付テハ債務者ノ普通裁判權ヲ有スル地ノ區裁判所又ハ地方裁判所之ヲ管轄シ又普通裁判籍ナキトキハ第十七條ノ規定ニ從ヒテ債務者ニ對スル訴ヲ管轄スル裁判所之ヲ管轄ス

第五百十五條 執行判決ハ裁判ノ當否ヲ調査セスシテ之ヲ爲ス可シ

執行判決ヲ求ムル訴ハ左ノ場合ニ於テハ之ヲ却下ス可シ

第一 外國裁判所ノ判決ノ確定トナリタルコトヲ證明セサルトキ

第二 本邦ノ法律ニ依リ強テ爲サシムルコトヲ得サル行爲ヲ執行セシム可キトキ

第三 本邦ノ法律ニ從ヘハ外國裁判所カ管轄權ヲ有セサルトキ

第四 敗訴ノ債務者本邦入ニシテ應訴セザリシトキ但訴訟ヲ開始スル呼出又ハ命令ヲ受訴裁判所所屬ノ國ニ於テ又ハ法律上ノ兵助ニ依リ本邦ニ於テ本人ニ送達セザリシトキニ限ル

第五 國際條約ニ於テ相互ヲ保セザルトキ

第五十六條 強制執行ハ執行文ヲ付シタル判決ノ正本ニ基キ之ヲ爲ス執行力アル正本ハ第一審裁判所ノ書記又訴訟カ上級裁判所ニ繫屬スルトキハ其裁判所ノ書記之ヲ付與ス

執行力アル正本ヲ求ムル申立ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第五十七條 執行文ハ判決ノ正本ノ末尾ニ之ヲ附記ス

其文式左ノ如シ

前記ノ正本ハ被告某若クハ原告某ニ對シ強制執行ノ爲メ原告若クハ被告某ニ之ヲ付與ス

執行文ニハ裁判所書記署名捺印シ且裁判所ノ印ヲ押ス可シ

第五十八條 執行力アル正本ハ判決ノ確定シタルトキ又ハ假執行ノ宣言アリタルトキニ限り之ヲ付與ス

判決ノ執行力其旨趣ニ從ヒ保證ヲ立ツルコトニ繫ル場合ノ外他ノ條件ニ繫ル場合ニ於テハ債權者カ證明書ヲ以テ其條件ヲ履行シタルコトヲ證スルトキニ限り執行力アル正本ヲ付與スルコトヲ得

第五十九條 執行力アル正本ハ判決ニ表示シタル債務者ノ承繼人ノ爲ニ之ヲ付與シ又ハ判決ニ表示シタル債務者ノ一般ノ承繼人ニ對シ之ヲ付與スルコトヲ得但其承繼カ裁判所ニ於テ明白ナルトキ又ハ證明書ヲ以テ之ヲ證スルトキニ限ル

此承繼カ裁判所ニ於テ明白ナルトキニ之ヲ執行文ニ記載ス可シ

第五百二十條 第五百十八條第二項及ヒ第五百十九條ノ場合ニ於テハ執行力アル正本ハ裁判長ノ命令アルトキニ限り之ヲ付與スルコトヲ得

裁判長ハ其命令前ニ書面又ハ口頭ヲ以テ債務者カ審訊スルコトヲ得

本命令ハ執行文ニ之ヲ記載ス可シ

第五百二十一條 第五百十八條第二項及ヒ第五百十九條ニ依リ必要ナル證明ヲ爲ス能ハサルトキハ債務者ハ判決ニ付キ執行文ノ付與ニ付キ第一審ノ受訴裁判所ニ訴ヲ起スコトヲ得

第五百二十二條 執行文ノ付與ニ對シ債務者カ異議ヲ申立テタルトキハ其執行文ヲ付與シタル裁判所書記ノ屬スル裁判所之ヲ裁判ス

裁判長ハ其裁判前ニ假處分ヲ爲スコトヲ得殊ニ保證ヲ立テシメ若クハ之ヲ立テシメテ強制執行ヲ一時停止シ又ハ保證ヲ立テシメテ強制執行ヲ續行ス可キヲ命スルコトヲ得

第五百二十三條 債權者カ執行力アル正本ハ敷通ヲ求メ又ハ前ニ付與シタル正本ヲ返還セスシテ更ニ一同判決ノ正本ヲ求ムルトキハ裁判長ノ命令アルトキニ限り之ヲ付與スルコトヲ得

裁判長ハ其命令前ニ書面又ハ口頭ヲ以テ債務者カ審訊スルコトヲ得

相手方カ審訊セスシテ執行力アル正本ハ敷通ヲ付與シ又ハ更ニ正本ヲ付與シタルトキハ其旨ヲ相手方ニ通知ス可シ

正本ハ敷通ヲ付與シ又ハ更ニ正本ヲ付與シタルトキハ其旨ヲ明記ス可シ

第五百二十四條 執行力アル正本ノ付與前ニ判決ノ原本ニ原告ノ爲メ若クハ被告ノ爲メニ之ヲ付與スル旨且之ヲ付與スル日時ヲ記載ス可シ

第五百二十五條 執行力アル正本ノ效力ハ之ヲ付與シタル裁判所ノ管轄内ニ止マラス總テ本邦ノ

第五百二十六條 執行力アル正本ノ付與前ニ判決ノ原本ニ原告ノ爲メ若クハ被告ノ爲メニ之ヲ付與スル旨且之ヲ付與スル日時ヲ記載ス可シ

第五百二十七條 執行力アル正本ノ效力ハ之ヲ付與シタル裁判所ノ管轄内ニ止マラス總テ本邦ノ

裁判區域内ニ及フモノトス
 第五百二十六條 債權者ハ一箇ノ地又ハ一箇ノ方法ニテ強制執行ヲ爲スモ完全ナル辨濟ヲ得ル能ハサルトキハ數通ノ執行力アル正本ニ基キ數箇ノ地又ハ數箇ノ方法ニテ同時ニ強制執行ヲ爲ス權利ヲ有ス

第五百二十七條 債權者ハ執行ヲ爲ス可キ地ヲ管轄スル區裁判所ノ所在地ニ住居ヲモ事務所ヲモ有セサルトキハ其所在地ニ假住所ヲ選定シ其旨ヲ裁判所ニ届出ツ可シ

第五百二十八條 強制執行ハ之ヲ求ムル者及ヒ之ヲ受クル者ノ氏名ヲ判決又ハ之ニ附記スル執行文ニ表示シ且判決ヲ既ニ送達シ又ハ同時ニ送達シタルトキニ限り之ヲ始ムルコトヲ得

判決ノ執行力其旨趣ニ從ヒ債權者ノ證明ス可キ事實ノ到來ニ際ルトキ又ハ判決ノ執行力判決ニ表示シタル債權者ノ承繼人ノ爲ニ爲シ又ハ判決ニ表示シタル債權者ノ承繼人ニ對シ爲ス可キトキハ執行ス可キ判決ノ外尙ホ之ニ附記スル執行文ヲ強制執行ヲ始ムル前ニ送達スルコトヲ要ス

若シ證明書ニ依リ執行文ヲ付與シタルトキハ又其證書ニ附本ヲ強制執行ヲ始ムル前ニ送達シ又ハ同時ニ送達スルコトヲ要ス

第五百二十九條 請求ノ主張方或ル日時ノ到來ニ際ルトキハ其日時ノ滿了後ニ至リ強制執行ヲ始ムルコトヲ得

若シ執行力債權者ヨリ保證ヲ立ツルコトニ際ルトキハ債權者ガ保證ヲ立テタルコトニ付テノ公正ノ證明書ヲ提出シ且其附本ヲ既ニ送達シ又ハ同時ニ送達シタルトキニ限り其執行ヲ始ムルコトヲ得

若シ證明書ニ依リ執行文ヲ付與シタルトキハ又其證書ニ附本ヲ強制執行ヲ始ムル前ニ送達シ又ハ同時ニ送達スルコトヲ要ス

第五百三十條 豫備後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍屬ニ對シテ爲ス強制執行ハ其ノ上並司令官廳ニ通知ヲ爲シタル後ニ限リ之ヲ始ムルコトヲ得

此官廳ハ債權者ノ求ニ因リ通知ノ受取證ヲ付與ス可シ

第五百三十一條 強制執行ハ此法律ニ於テ別段ノ規定ナキトキニ限り執達吏之ヲ實施ス

債權者ハ強制執行ヲ委任スル爲ニ區裁判所書記ノ補助ヲ求ムルコトヲ得

裁判所書記ノ委任シタル執達吏ハ債權者ノ委任シタルモノト看做ス

第五百三十二條 執達吏ハ債權者ノ委任ニ因リテ爲ス行爲及ヒ職務上ノ義務ノ違背ヨリシテ債權者其他ノ關係人ニ對シ損害ヲ生セシメタルトキハ第一ニ其責ニ任ス

第五百三十三條 債權者執行力アル正本ヲ交付シテ強制執行ヲ委任シタルトキハ執達吏ハ特別ノ委任ヲ受ケサルトキト雖モ支拂其他ノ給付ヲ受取リ其受取リタルモノニ付キ有效ノ受取ノ證書ヲ作り之ヲ交付シ且債務者ニ於テ其義務ヲ完全ニ盡シタルトキハ執行力アル正本ヲ債務者ニ交付スルコトヲ得

第五百三十四條 執達吏ハ執行力アル正本ヲ所持スルヲ以テ債務者及ヒ第三者ニ對シ強制執行及ヒ前條ニ掲ケタル行爲ヲ實施スル權利ヲ有ス

債權者ハ此等ノ者ニ對シ委任ノ欠缺又ハ制限ヲ主張スルコトヲ得ス

第五百三十五條 執達吏ハ債務者ガ其義務ヲ完全ニ盡シタルトキハ執行力アル正本及ヒ受取ノ證書ヲ之ニ交付シ又其義務ノ一分ヲ盡シタルトキハ執行力アル正本ニ其旨ヲ附記シ且受取ノ證書債務者ニ交付ス可シ

債務者カ後ニ債權者ニ對シ受取ノ證ヲ求ムル權利ハ前項ノ規定ニ因リテ妨ケラレルコト無シ
第五百三十六條 執達吏ハ執行ノ爲メ必要ナル場合ニ於テハ債權者ノ住居、倉庫及ヒ債權ヲ搜索
シ又ハ閉鎖シタル戸扉及ヒ債權ヲ開カシムル權利ヲ有ス
抵抗ヲ受クル場合ニ於テハ執達吏ハ威力ヲ用キ且警察上ノ援助ヲ求ムルコトヲ得若シ兵力ヲ要
スルトキハ之ヲ執行裁判所ニ申立ル可シ

第五百三十七條 執達吏ハ執行ノ爲メ爲スニ際シ抵抗ヲ受クルトキ又ハ債務者ノ住居ニ於テ執行
行爲ヲ爲スニ際シ債務者又ハ成長シタル其家族若クハ雇人ニ出會ハサルトキハ處丁者三人又ハ
市町村若クハ警察ノ吏員一人ヲ證人トシテ立會ハシム可シ

第五百三十八條 強制執行ニ付キ利害ノ關係ヲ有スル各人ニハ其求ニ因リテ執達吏ノ記録ヲ閱覽ス
ル可シ及ヒ記録中ニ存スル書類ノ原本ヲ付與スルコトヲ要ス

第五百三十九條 夜間及ヒ日曜日或ハ一般ノ祝祭日ニハ執行裁判所ノ許可ヲ得テ限リ執行行
爲ヲ爲スコトヲ得

有許可ノ命令ハ強制執行ノ際之ヲ示ス可シ

第五百四十條 執達吏ハ各執行行爲ニ付キ調書ヲ作ル可シ

此調書ニハ左ノ諸件ヲ具備スルニハ必要ナル諸件ヲ記入スルコトヲ要ス

第一 調書ヲ作ル場所並年月日

第二 執行行爲ノ目的物及ヒ其重要ナル事情ノ略記

第三 執行ニ與カリタル各人ノ表示

第四 右各人ノ署名捺印

第五百一 調書ヲ其各人ニ讀明セ又ハ閱覽セシメ其承諾ノ後署名捺印ヲ爲シタルコトノ開示

第六 調書ノ署名捺印

第四號及ヒ第五號ノ要件ヲ具備スルコト能ハサルトキハ其理由ヲ記載ス可シ

第五百四十一條 執行行爲ニ關スル備後其他ノ通知ハ執達吏口頭ヲ以テ之ヲ爲シ且調書ニ之ヲ記
載ス可シ

若シ口頭ヲ以テ備後又ハ通知ヲ爲ス能ハサルトキハ第三百三十九條第四百四十五條
乃至第四百四十九條ノ規定ヲ準用シ其調書ヲ原本ヲ送達シ又別ニ送達書ヲ作ラサルコトハ調書
ニ其送達ヲ爲シタルコトヲ記載ス可シ

若シ強制執行ノ地ニ於テハ執行裁判所ノ管轄内ニ於テハ送達書ヲ以テ之ヲ爲シ且備後又ハ通
知ヲ受テ可キ者ニ郵便法ヲ以テ調書ヲ原本ヲ送達シ且之ヲ郵便ヲ付シタル送達書ニハ調書ヲ記載ス可
シ

第五百四十二條 強制執行行爲ノ際債務者ニ爲ス可キ送達及ヒ通知ハ債務者ノ所在明カナラサルトキ
又ハ外國ニ在ル者ニ於テハ必要ナル送達ノ手続ヲ行フ可シ

第五百四十三條 此法律ニ於テ裁判所ニ任カセタル執行行爲ノ處分又ハ其行爲ノ共力ハ執行裁判
所ノ管轄内ニ於テ執行裁判所ノ管轄ニ屬スルコトヲ要ス

法律ニ於テ明瞭ニ裁判所ヲ指定セザル場合於テハ執行手續書爲ス可キ地又ハ之ヲ爲シ
タル地ヲ管轄スル區裁判所ヲ以テ執行裁判所トシテ之ヲ爲ス可トナリ

第五百四十四條 強制執行ノ方法又ハ執行ノ際ニ執達吏ノ遵守ス可キ手續ニ關スル申立及ヒ異議

第五百四十四條 強制執行ノ方法又ハ執行ノ際ニ執達吏ノ遵守ス可キ手續ニ關スル申立及ヒ異議

二付テハ執行裁判所之ヲ裁判ス又執行裁判所ハ第五百二十二條第二項ニ定メタル命ヲ發スル權
 有ラス然レドモ其ノ執行ハ其ノ執行裁判所ノ命ニ依リテ行ハルルコトナリ
 執行吏カ執行委任ヲ受クルヲ拒ミ若クハ委任ニ從ヒ執行行爲ヲ實施スルコトヲ拒ミタルトキ又
 ハ執行吏ノ計算セシ手數料ヲ付キ異議ヲ出ストキハ執行裁判所ノ之ヲ裁判スル權有ラス
 第五百四十五條 判決ニ因リテ確定シタル請求ニ關スル債務者ノ異議ハ訴テ以テ第一審ノ受訴裁
 判所ニ之ヲ主張ス可シ
 右ノ異議ハ此法律ノ規定ニ從ヒ遅クトモ異議ヲ主張スルコトヲ要スルコトヲ要スル口頭辯論ノ終結後ニ其原
 因ヲ生ジ且故障ヲ以テ之ヲ主張スルコトヲ得サルニ限リ之ヲ許スルコトヲ要ス
 第五百四十六條 前條ノ規定ハ第五百十八條第二項及ヒ第五百十九條ノ場合ニ於テ債務者カ執行
 文付與ハ證明シタルト認メラレタル事實ノ到來ニシテ此三因ノ判決ノ執行ヲ爲シ得ルモ
 之爭ヒ又ハ認メラレタル承繼ヲ爭フトキハ亦之ヲ準用ス但此場合ニ於テ第五百二十二條ノ規定
 ニ從ヒ執行文付與對シ異議ヲ申立ツル債務者ノ權ハ此カ爲ニ妨グラルルコトナリ
 第五百四十七條 強制執行ヲ續行シ前項ノ場合ニ於テ異議ヲ訴テ提起セバ因リテ妨グラルルコ
 ト無シ
 然レドモ異議ノ爲メ主張シタル事情カ法律上理由アリ且事實上又點ニ付テ證明アリ
 下判ニ受訴裁判所ハ申立ニ因リ判決ヲ爲スニ至ルマテ保證ヲ立テシメ若クハ之ヲ立テシメス
 強制執行ヲ停止ス可キコトヲ命シ又ハ保證ヲ立テシメテ強制執行ヲ續行ス可キコトヲ命シ又
 ハ其爲シタル執行處分ニ保證ヲ立テシメテ取消ス可キ命スルコトヲ得

右裁判ハ口頭辯論ヲ經ズシテ之ヲ爲シ又急迫ナル場合ニ於テハ裁判長之ヲ爲ス可トナリ
 急迫ナル場合ニ於テハ執行裁判所モ亦此權利ヲ行使スルコトヲ得此場合ニ於テハ執行裁判所ハ
 受訴裁判所ニ裁判ヲ提出セシメタル爲ニ相當ノ期間ヲ定ム可シ此期間ヲ徒過シタルトキハ債權者
 申立ニ因リ強制執行ヲ續行ス
 第五百四十八條 受訴裁判所ハ異議ノ訴ニ付テ判決スル判決ニ於テ前條ニ掲ケタル命ヲ發シ又ハ
 既ニ發シタル命ヲ取消シ之ヲ變更シ若クハ之ヲ認可スルコトヲ得
 判決中前項ニ掲ケル事項ニ限リ職權ヲ以テ假執行ノ宣言ヲ爲ス可シ
 右裁判ニ對スル不服ニ付テハ第五百十一條ノ規定ヲ準用ス
 第五百四十九條 第三者カ強制執行ノ目的物ニ付テキ所有權ヲ主張シ其他目的物ノ讓渡若クハ引渡
 ヲ妨グル權利ヲ主張スルトキハ訴テ以テ債權者ニ對シ其強制執行ニ對スル異議ヲ主張シ又債務
 者ニ於テ其異議ヲ正當ナリトセザルトキハ債權者及ヒ債務者ニ對シテ之ヲ主張ス可シ
 右訴テ債權者及ヒ債務者ニ對シテ起ストキハ之ヲ共同被告ト爲ス
 右訴ハ執行裁判所ノ管轄ニ屬ス然レトモ訴訟物カ區裁判所ノ管轄ニ屬セザルトキハ執行裁判所
 ノ所在地ヲ管轄スル地方裁判所之ヲ管轄ス
 強制執行ノ停止及ヒ既ニ爲シタル執行處分ノ取消ニ付テハ第五百四十七條及ヒ第五百四十八條
 ノ規定ヲ準用ス但執行處分ノ取消ハ保證ヲ立テシメスシテ之ヲ爲スコトヲ得
 第五百五十條 強制執行ハ左ノ書類ヲ提出シタル場合ニ於テ之ヲ停止シ又ハ之ヲ制限スヘシ
 第一 執行ス可キ判決若クハ其假執行ヲ取消ス旨又ハ強制執行ヲ許サントシテ宣言シ若クハ其
 停止ヲ命シタル旨ヲ記載シタル執行力アル裁判ノ正本

第二 執行又ハ執行處分ノ一時停止ヲ命シタル旨ヲ記載シタル裁判ノ正本
 第三 執行ヲ免カラルル爲メ保證ヲ立テ又ハ供託ヲ爲シタル旨ヲ記載シタル公正ノ證明書
 第四 執行ス可キ判決ノ後ニ債權者カ辨濟ヲ受ケ又ハ義務履行ノ猶豫ヲ承諾シタル旨ヲ記載シタル證書

第五百五十一條 前條第一號及第二號ノ場合ニ於テハ既ニ爲シタル執行處分ヲモ取消ス可ク第四號ノ場合ニ於テハ既ニ爲シタル執行處分ナリ一時保持セシム可ク第二號ノ場合ニ於テハ其裁判ヲ以テ從前ノ執行行爲ノ取消ヲ命セザルトキニ限り既ニ爲シタル執行處分ナリ一時保持セシム可シ

第五百五十二條 強制執行ノ開始後ニ債務者カ死亡スルトキハ強制執行ハ遺産ニ對シ之ヲ續行ス可シ

債務者ノ知ルコトヲ要スル執行行爲ヲ實施スル場合ニ於テ相續人アラザルトキ又ハ相續人ノ所在明カナラザルトキハ執行裁判所ハ債權者ノ申立ニ因リ遺産又ハ相續人ノ爲メ特別代理人ヲ任ス可シ

第五百五十三條 強制執行ノ開始後二月主マデニ債務者カ其地位ヲ辭シ又ハ之ヲ失ヒタルトキハ此變更ノ生シ當時債務者ノ所持シタル財産ニ付キ前條ノ規定ヲ準用ス

第五百五十四條 強制執行ノ費用ハ必要ナリシ部分ニ限り債務者ノ負擔ニ歸ス其費用ハ強制執行ヲ受ケル請求ト同時ニ之ヲ取立ツ可シ

第五百五十五條 執行ノ爲メ官廳ノ援助ヲ必要トスルトキハ裁判所ハ其援助ヲ官廳ニ請求ス可シ
 強制執行ノ基本タル判決ヲ廢棄若クハ破毀シタルトキハ其費用ハ之ヲ債務者ニ辨濟ス可シ

第五百五十六條 豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍屬ニ對シ兵營及ヒ軍事用廳舎又ハ軍艦ニ於テ強制執行ヲ爲ス可キトキハ債權者ノ申立ニ因リ執行裁判所ハ管轄ノ軍事裁判所又ハ所屬ノ長官又ハ隊長ニ囑託シテ之ヲ爲ス

囑託ニ因リ差押ヘタル物ハ債權者ノ委任シタル執達吏ニ之ヲ交付スヘシ

第五百五十七條 外國ニ於テ強制執行ヲ爲ス可キ場合ニ於テ其外國官廳カ本邦裁判所ニ法律上ノ共助ヲ爲ス可キトキハ債權者ノ申立ニ因リ第一審ノ受訴裁判所ハ之ヲ外國官廳ニ囑託ス可シ
 外國駐在ノ本邦領事ニ依リ強制執行ヲ爲シ得ヘキトキハ第一審ノ受訴裁判所ハ之ヲ其領事ニ囑託スヘシ

第五百五十八條 強制執行ノ手續ニ於テ口頭辯論ヲ經スシテ爲スコトヲ得ル裁判ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第五百五十九條 強制執行ハ左ノ諸件ニ付テモ亦之ヲ爲スコトヲ得

- 第一 抗告ヲ以テノミ不服ヲ申立ツルコトヲ得ル裁判
- 第二 執行ノ命令
- 第三 訴ノ提起後受訴裁判所ニ於テ又ハ受命判事若クハ受託判事ノ面前ニ於テ爲シタル和解
- 第四 第三百八十一條ノ規定ニ從ヒ區裁判所ニ於テ爲シタル和解
- 第五 公證人カ其權限内ニ於テ成規ノ方式ニ依リ作りタル證書但一定ノ金額ノ支拂又ハ他ノ代替物若クハ有價證券ノ一定ノ數量ヲ給付ヲ以テ目的トスル請求ニ付キ作りタル證書ニシテ直チニ強制執行ヲ受ク可キ旨ヲ記載シタルモノニ限ル

第五百六十條 前條ニ揭ケタル債務者ニ因リル強制執行ニハ第五百十六條乃至第五百五十八條

ノ規定ヲ準用ス但第五百六十一條第五百六十二條ノ規定ニ依リ差異ノ生スルトキハ此限ニ在リ

第五百六十一條 執行命令ニ其命令ヲ發シタル後債權者又ハ債務者ニ於テ承繼アル場合ニ限リ

執行文ヲ附記スルコトヲ要ス

請求ニ關スル異議ハ執行命令ノ送達後ニ生シタル原因ニ基クトキニ限り之ヲ許ス

執行文付與ニ付テノ訴又ハ請求ニ關シ異議ヲ主張スル訴又ハ執行文付與ノ際到來シタリト認メ

タル承繼者爭フ訴ハ執行命令ヲ發シタル區裁判所之ヲ管轄ス但其請求カ區裁判所ノ管轄ニ屬セ

サルモノナルトキハ管轄地方裁判所ニ其訴ヲ起ス可シ

第五百六十二條 公證人ノ作リタル證書ノ執行力アル正本ハ其證書ヲ保存スル公證人之ヲ付與

執行文付與ニ關スル異議ニ付テノ裁判及ヒ更ニ執行文付與ニ付テノ裁判ハ公證人職務上ノ住所

ヲ有スル地方管轄スル區裁判所ニ於テ之ヲ爲ス

請求ニ關スル異議ノ主張ニ付テハ第五百四十五條第二項ニ規定シタル制限ニ從ハス

執行文付與ニ付テノ訴又ハ請求ニ關シ異議ヲ主張スル訴又ハ執行文付與ノ際證明シタリト認メ

タル事實ノ到來ニ係リ此ニ因リ證書ノ執行力爲シ得ハキモノ爭フ訴ハ債務者カ本邦ニ於テ

普通裁判籍ヲ有スル地方裁判所又ハ此裁判所ノ管轄スル時ハ第十七條ノ規定ニ從ヒテ債務者ニ對シ

訴ヲ起シ得ハキ裁判所之ヲ管轄ス

第五百六十三條 本編ニ定メタル裁判籍ハ專屬ナラズ

第五百六十四條 金銀ノ債權ニ付テノ強制執行

第八節 第二節 動産ニ對スル強制執行

第五百六十四條 動産ニ對スル強制執行ハ差押ヲ以テ之ヲ爲ス

差押ハ執行力アル正本ニ掲ケタル請求ヲ債權者ニ對シテ爲メ及ヒ強制執行ノ費用ヲ償フ爲メ

必要ナルモノ外ニ及ホズコトヲ得ス立派立ノ執行官ニ對シテ第六百十八條ニ規定スル

差押フ可キ物ヲ換價スルニ強制作執行ノ費用ヲ償フテ剩餘ヲ得ル見込ナキトキハ強制執行ヲ爲ス

コトヲ得ス

第五百六十五條 第三者カ差押ヲ受ケ可キ物ニ付キ物上ノ擔保權ヲ有スルモ差押ヲ妨クルコトヲ

得ス然レトモ第五百四十九條ノ規定ニ從ヒ訴ヲ以テ賣得金ニ付キ優先ノ擔濟ヲ請求スル權利ハ

此カ爲ニ妨ケラレルコトナシ

此場合ニ於テ請求ノ爲メ主張シタル事情カ法律上理由アリト見エ且事實上ノ點ニ付キ疎明アリ

タルトキハ裁判所ハ賣得金ヲ供託命ス可シ但此事項ニ付テハ第五百四十七條及ヒ第五百四十

八條ノ規定ヲ準用ス

第二款 有體動産ニ對スル強制執行

第五百六十六條 債務者ノ占有中ニ在ル有體動産ヲ差押ハ執達吏其物ヲ占有シテ之ヲ爲ス

其物ハ債權者ノ承諾アルトキ又ハ其運搬ヲ爲スニ付キ其大ナル困難アルトキハ之ヲ債務者ノ保

管ニ任ズ可シ此場合ニ於テハ封印其他ノ方法ヲ以テ差押ヲ明白ニスルコトニ限リ其效力亦生

ス

第五百六十四條 前條の規定は債権者又は物の提出を拒マサル第三者ノ占有中ニ在ル物ノ差押ニ付テモ亦之ヲ準用ス

第五百六十八條 果實未タ吐地其離レサル前ニ雖モ之ヲ差押フルコトヲ得然レモ其差押ハ其通常收穫時期前ニ一月内ニ非ズルニシテ之ヲ爲スルニ得ス

第五百六十條 差押ノ效力ハ差押物ニ生ズル天然ノ産物ニモ當然及フモノトス

第五百七十一條 差押ノ物ハ之ヲ差押フルコトヲ得ス

第一 衣服、履具、家具及ヒ厨具但此物ハ債権者及ヒ其家族ノ爲メ缺ク可カラサルモノトシテ限ル

第二 債務者及ヒ其家族ニ必要ナル一ヶ月間ノ食料及ヒ薪炭

第三 技術者、職工、勞役者及ヒ穩婆ニ在テハ其營業上缺ク可カラサル物

第四 農業者ニ在テハ其農業上缺ク可カラサル農具、家畜、肥料及ヒ次ニ收穫ニ要スル農業ヲ續行スルニ必要ナル物

第五 學費、官費、神職、僧侶、公立私立ノ教育場教師、辯護士、公證人及ヒ醫師ニ在テハ其職業ヲ執行スルニ必要ナル物

第六 文武ノ官吏、神職、僧侶及ヒ公立私立ノ教育場教師ニ在テハ第六百十八條ニ規定スル職務ヲ執行スルニ必要ナル物

第七 差押ノ物ハ之ヲ計算スルニ必要ナル物トシテ其種類ハ法律ニ規定ス

第八 勳章及ヒ名譽ノ證牒ハ之ヲ差押スルコトヲ得ス

第九 實印其他職業ニ必要ナル印

第十 神體、佛像其他禮拜ノ用ニ供スル物

第十一 祭禮ノ金

第十二 債務者及ヒ其家族ノ未タ公ニシタル發明ニ關スル物及ヒ債務者又ハ其家族ノ未タ公ニシタル著作ノ稿本

第十三 債務者及ヒ其家族ノ學校ニ於テ使用ニ供スル書籍

第十四 債権者ノ承諾アルニテ第三號乃至第八號ニ掲ケタル物ヲ除外シテ差押フルコトヲ得

第五百七十一條 差押物保存ノ爲メ特別ノ處分ヲ必要トスルニ非キハ執達吏ハ適當ノ方法ヲ以テ之ヲ爲ス可シ若シ此ノ爲メ費用ヲ要スルニ非キハ債務者ヲ以テ之ヲ豫納セシメ又債権者數名關係スルニ非キハ其要額ノ割合ニ從ヒテ其債権者各々ノ之ヲ豫納セシム可シ

第五百七十二條 執達吏ハ差押ヲ實施シタル後債権者又ハ裁判所ノ特別委任ヲ要セスシテ以下數ノ條ノ規定ニ從ヒテ差押ノ物ヲ以テ其差押物ヲ賣却シ可シ

第五百七十三條 競賣ス可キ物ノ中ニ高價ノモノ有ルニ非キハ執達吏ハ適當ナル鑑定人ヲシテ其評價ヲ爲シ可シ

第五百七十四條 差押金銀ノ之ヲ債権者ニ引渡ス可シ

執達吏ハ金銀ヲ取立テタルニ非キハ債務者ヨリ支拂ヲ爲シタルモノトシテ其担保ヲ立テ又ハ供託ヲ付テ執行ヲ免ルルニ非キハ債務者ニ許スルニ非キハ此限ニ在ラズ

第五百七十五條 差押ノ日ハ競賣ノ日ヨリ前ニ少クハ七日ノ期間ヲ存スルコトヲ要ス但差

押債權者、執行力アル正本ニ因リ配當ヲ要求スル債權者及ヒ債務者カ競買チ更ニ早ク爲サレトキ合意シタルトキ又ハ差押物ヲ泳ク貯藏スルニ付キ不相應シ費用若クハ其物ノ價格ノ著シク減少スル危害ヲ避ケルカ爲メ競買チ早ク爲スル必要ナルトキハ此限ニ在ラズ

第五百七十七條 競買チ差押物ヲ爲シタル市町村ニ於テ之ヲ爲ス但差押債權者及ヒ債務者カ他ノ地ニ於テ之ヲ爲スルコトヲ合意シタルトキハ此限ニ在ラス

競買ノ日時及ヒ場所ハ之ヲ公告ス但其公告ニ競買ス可キ物ヲ表示ス可シ

第五百七十七條 最高價競買ノ爲メ競落シ其價額ニ同呼上ケタル後之ヲ爲ス

競落物ノ引渡ハ現金引換ハ之ヲ爲ス

最高價競買ハ競買事件ニ定メタル支拂期日又ハ其定メテトキハ競買期日ノ終ル前ニ代金ノ支拂

ケ爲シ物ヲ引渡ケ求メサルトキハ更ニ其物ヲ競買ス可シ此場合ニ於テハ前ノ最高價競買人ハ競買ニ加ハルコトヲ得且再度ノ競落代價力最初ノ代價ヨリ低キ時ハ不足ヲ擔任ス可シ其高キトキハ剩餘ヲ請求スルコトヲ得ス

第五百七十八條 競買ハ實得金ヲ以テ債權者ニ辨濟ヲ爲シ及ヒ強制執行ノ費用ヲ償フニ足ルニ至ルトキハ直チ之ヲ止ム可シ

第五百七十九條 執達吏實得金ヲ領收シタルトキハ債務者ヨリ支拂ヲ爲シタルモノト看做ス但保證ヲ立テ又ハ供託ヲ爲シテ執行ヲ免カサルコトヲ債務者ニ許シタルトキハ此限ニ在ラス

第五百八十條 金銀物ハ其金銀ノ實價ヨリ以下ニ競落スルコトヲ許サス其實價マテニ競買ヲ爲ス者ヲキ

第五百八十一條 執達吏有價證券ヲ差押ヘタルトキハ相場アルモノハ賣却日ノ相場ヲ以テ適宜ニ

之ヲ賣却シ其相場キモノハ一般ノ規定ニ從ヒテ之ヲ競買ス可シ

第五百八十二條 有價證券以記名者ハ其執行裁判所賣主ノ氏名ニ書換テ爲シタルモノハ此限ニ在ラス

第五百八十三條 無記名有價證券ニ於テ記名ニ換ヘ又ハ他ノ方法ニ依リ流通ヲ止メタルモノナルトキハ執行裁判所ハ其流通回復ヲ爲サシ及ヒ此カ爲メ必要ナル陳述書債務者ニ代リテ爲シ得

第五百八十四條 土地ヨリ離レテ前ニ差押ヘタル果實ハ競買ハ其成熟ノ後始メテ之ヲ爲スコトヲ許ス

第五百八十五條 競買ハ全ク爾來爲シタル後始メテ之ヲ爲スコトヲ許ス

第五百八十六條 競買ハ全ク爾來爲シタル後始メテ之ヲ爲スコトヲ許ス

第五百八十七條 競買ハ全ク爾來爲シタル後始メテ之ヲ爲スコトヲ許ス

第五百八十八條 競買ハ全ク爾來爲シタル後始メテ之ヲ爲スコトヲ許ス

第五百八十九條 競買ハ全ク爾來爲シタル後始メテ之ヲ爲スコトヲ許ス

第五百九十條 競買ハ全ク爾來爲シタル後始メテ之ヲ爲スコトヲ許ス

第五百九十一條 競買ハ全ク爾來爲シタル後始メテ之ヲ爲スコトヲ許ス

第五百九十二條 競買ハ全ク爾來爲シタル後始メテ之ヲ爲スコトヲ許ス

第五百九十三條 競買ハ全ク爾來爲シタル後始メテ之ヲ爲スコトヲ許ス

第五百九十四條 競買ハ全ク爾來爲シタル後始メテ之ヲ爲スコトヲ許ス

第五百九十五條 競買ハ全ク爾來爲シタル後始メテ之ヲ爲スコトヲ許ス

第五百九十六條 競買ハ全ク爾來爲シタル後始メテ之ヲ爲スコトヲ許ス

假差押三係此物三付テ本條ノ規定ヲ適用セズニテ
 第五百八十七條ニ前條ニ掲ケタル物ノ照査手續ハ配當要求ノ效力ヲ生シ又既ニ爲シタル差押カ取
 消シ爲リタルトキハ差押ノ效力ヲ生ス
 第五百八十八條 適當ナル期間經過スルモ執達吏競賣ヲ爲ササルニシテ差押債權者及ヒ執行力ア
 ル正本ニ因リ配當ヲ要求スル債權者ハ一定ノ期間内ニ競賣ヲ爲ス可キコトヲ催告シ其催告ノ效
 アラサルトキハ相當ノ命令アラントテ執行裁判所ニ申請スルコトヲ得
 第五百八十九條 民法ニ從テ配當ヲ要求シ得ル債權者ハ執行力アル正本ニ因ラスシテ賣得金ノ
 配當ヲ要求スルコトヲ得

第五百九十條 前條ノ配當要求ハ其原因ヲ開示シ且裁判所ノ所在地ニ住居ヲモ事務ヲモ有セサル
 者ハ假住所ヲ選定該執達吏ニ之ヲ爲ス可シ
 第五百九十一條 第五百八十六條第二項及ヒ第五百九十條ノ場合ニ於テ執達吏ハ配當要求ノ有
 タルコトヲ該配當ニ與カル各債權者及ヒ債務者ニ通知ス可シ
 執行力アル正本ニ因ラスシテ配當ヲ要求スル債權者アルトキハ債務者ハ執達吏ノ通知アリタル
 日ヨリ三日ノ期間内ニ其債權ヲ認諾スルヤ否ヤヲ執達吏ニ申立ツ可シ

債權者力認諾セサルコトヲ執達吏ヨリ通知アリタルトキハ債務者ハ其通知アリタルヨリ三日ノ
 期間内ニ債務者三對シ訴ヲ起シ其債權ヲ確定ス可シ
 第五百九十二條 配當ノ要求ハ競賣期日ヲ終ニ至ルマテ之ヲ爲スコトヲ得
 第五百九十三條 賣得金ヲ以テ配當ニ與カル各債權者ヲ満足セシムルニ足ラサル場合ニ於テ債權
 者間ニ配當ノ協議調ハサルトキハ其賣得金ヲ供託ス可シ

數多ノ債權者ノ爲メ同時ニ金錢ヲ差押ハサル時之ヲ以テ各債權者ヲ満足セシムルニ足ラサル
 場合ニ於テモ亦同シ
 右ノ場合ニ於テ執達吏ハ其事情ヲ執行裁判所ニ届出ツ可ク其届書ハ執行手續ニ關スル書類ヲ
 添附ス可シ

第三款 債權及ヒ他ノ財産權ニ對スル強制執行
 第五百九十四條 第三者(第三債務者)ニ對スル債權者ノ債權ニシテ金錢ノ支拂又ハ他ノ有體物若
 クハ有價證券ノ引渡若クハ給付ヲ目的トスルモノニ對シテ強制執行ハ執行裁判所差押命令ヲ以テ之ヲ
 爲ス

第五百九十五條 執行裁判所トシテハ債務者ノ普通裁判籍ヲ有スル地ニ區裁判所若シ此區裁判所
 ナキトキハ第十七條ノ規定ニ從ヒテ債務者ニ對スル訴ヲ管轄スル區裁判所管轄權ヲ有ス
 第五百九十六條 債權者ハ差押命令ノ申請ニ差押ヲ可キ債權ノ種類及ヒ數額ヲ開示ス可シ
 右申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第五百九十七條 差押命令ハ豫メ第三債務者及ヒ債務者ノ審訊ヲ經スシテ之ヲ發ス
 第五百九十八條 金錢ノ債權ヲ差押ヲ可キトキハ裁判所ハ第三債務者ニ對シ債務者ニ支拂ヲ爲ス
 可トシ又債務者ニ對シ債權ノ處分殊ニ其取立ヲ爲ス可カラサルコトヲ命令ス可シ
 差押命令ハ職權ヲ以テ第三債務者及ヒ債務者ニ之ヲ送達シ又債權者ニハ其送達シタル旨ヲ通知
 ス可シ

差押ハ第三債務者ニ對スル送達ヲ以テ之ヲ爲シタルルニテ之ヲ看做ス
 第五百九十九條 抵當アル債權ノ差押ノ場合ニ於テハ債權者ハ債務者ノ承諾ヲ要セスシテ其債權

差押ヲ登記簿ニ記入スル權利アリ
 此記入ノ申請ハ裁判所ニ之ヲ爲ス可シ其中請ハ差押命令ノ申請ト之ヲ併合スルコトヲ得
 裁判所ハ義務ヲ負フタル不動産ノ所有者(第三債務者)ニ差押命令ヲ送達シタル後記入ノ手續
 爲シ得
 第六百六條 差押ヘタル金錢ノ債權ニ付テハ差押債權者ノ選擇ニ從ヒ代位ノ手續ヲ要セスシテ之ヲ
 取立ル爲メ又ハ支拂ニ換ヘ券面額ニテ差押債權者ニ之ヲ轉付スル爲メ命令給付シテ申請
 取立ルコトヲ得
 右命令ノ送達ニ付テハ第五百九十八條第二項ノ規定ヲ準用ス
 第六百七條 支拂ニ換ヘ券面額ニテ債權ヲ轉付スル命令給付場合於テハ其債權ノ存スル限リハ
 第五百九十八條第二項ノ手續ヲ爲スニ因テ債權者ハ債權ノ辨濟ヲ爲シ得ルコトヲ看做ス
 第六百八條 取立ノ爲メノ命令ハ其債權ノ全額ニ及フモ該命令ニ但執行裁判所ハ債務者ノ申立ニ因
 テ差押債權者ヲ訊審シテ差押額ヲ其債權者ノ要求額マテニ制限シ其超過スル額ノ處分殊ニ取立
 ヲ爲シ得ルコトヲ得其限制シタル部分ニ限リ他ノ債權者ハ配當要求得ルコトヲ得
 右許可ハ第三債務者及ヒ債權者ニ通知ス可シ
 第六百九條 手形其他裏書以テ移轉スルコトヲ得ル證券ニ因ル債權ノ差押ハ執達吏其證券ヲ
 占有シテ之ヲ爲ス
 第六百十條 差押及シテ此ノ類スル繼續收入ノ債權ノ差押ハ債權額ヲ限リシ差押後ニ收入ノ可シ金
 額及シテモノトス
 第六百十一條 職務上收入ノ差押ハ債務者ノ轉官兼任又ハ増俸ニ因ル收入ニモ亦及フモノトス

第六百六條 債務者ハ債權ニ關スル所持ノ證書ヲ差押債務者ニ引渡ス義務アリ債權者ハ差押命令
 ニ基キ強制執行ノ方法ヲ以テ其證書ヲ債務者ヨリ取立ケシムルコトヲ得ル
 第六百七條 第五百五條第二項ニ從ヒテ債務者ニ保證ヲ立テシメ又ハ供託ヲ爲サシメテ執行ヲ免
 カルルコトヲ許ス可キトモ差押ヘタル金錢債權ニ付テハ取立ノ命令ノミヲ爲ス可シ但此命令
 ハ第三債務者ヲシテ債權額ヲ供託セシムル效力ノミヲ有ス
 第六百八條 債權者取立ヲ爲シタルトキハ其旨ヲ執行裁判所ニ届出ツ可シ
 第六百九條 差押債權者ハ第三債務者ヲシテ差押命令ノ送達ヨリ七日ノ期間内ニ書面ヲ以テ左ノ
 陳述ヲ爲サシメ得ルコトヲ裁判所ニ申立ツルコトヲ得
 第一 債權ノ認諾ノ有無及ヒ其限度並ニ支拂ヲ爲ス意思ノ有無及ヒ其限度
 第二 債權ニ付キ他ノ者ヨリ請求ノ有無及ヒ其種類
 第三 債權力既ニ他ノ債權者ヨリ差押ヘラレタリトシテ有無及ヒ其請求ノ種類並ニ其限度
 右ノ陳述ヲ求ムル催告ハ之ヲ送達證書ニ記載ス可シ第三債務者陳述ヲ怠リタルトキハ此ニ因リ
 之ヲ生ズル損害ニ付キ其責任ヲ負フ
 第六百十條 債權者ノ命令旨趣ニ基キ第三債務者ニ對シ訴ヲ起スニ至ルアル限リハ一般ノ規定
 ニ從ヒテ管轄ヲ有スル裁判所ニ其訴ヲ起シ且債務者内國ニ在リテ住所ノ知レタルトキハ其訴訟
 ヲ之ニ告知ス可シ
 第六百十一條 債權者ハ取立ヲ爲シ得ル債權ノ行用ヲ怠リタルトキハ此方爲メ債務者ニ生ズル
 損害ヲ責任ニ任ズ
 第六百十二條 債權者ハ命令ニ因リ取立ノ爲メ取得シタル權利ヲ拋棄スルコトヲ得但此方爲メ其

請求ヲ書セラルルコト無シニ因リ其債權ノ成立ハ債權者ノ請求ニ依リテ生ズルモノナリ此種債權ハ裁判所ニ届書ヲ差出シテ之ヲ爲ス但其債權本ハ第三債務者及ヒ債務者ニ之ヲ送達ス可シ
 第六百十三條 差押ヘタル債權ガ條件附若クハ有期ナルトキ又ハ反對給付ニ際シ若クハ他ノ理由
 天リテ其取立困難ナルトキハ裁判所ハ申立ニ因リ取立ニ換ヘ他ノ換價方法ヲ命スルコトヲ
 得ル
 債務者内國ニ在リテ住所ノ知レタルトキハ其申立ヲ許ス決定前ニ之ヲ審訊ス可シ
 第六百十四條 有體物ノ引渡又ハ給付ノ請求ニ對スル強制執行ハ以下數條ノ規定ヲ斟酌シテ第五
 百九十八條乃至第六百十三條ノ規定ニ從ヒテ之ヲ爲ス
 第六百十五條 有體物ノ請求ニ差押ニ付テハ其動産ヲ債權者ノ委任シタル債權者ニ引渡ス可シ
 引下テ命ス可シ

右動産ノ換價ニ付テハ差押物ノ換價ニ關スル規定ヲ適用ス
 第六百十六條 不動産ノ請求ニ差押ニ付テハ債權者ノ申立ニ因リ其不動産ヲ不動産所存地ノ區區
 判所ヨリ命シタル保管人ニ引渡ス可キコトヲ命ス可シ
 引渡シタル不動産ニ付テハ強制執行ハ不動産ニ對スル強制執行ニ付テハ規定ニ從ヒテ之ヲ爲ス
 第六百十七條 有體物ノ引渡又ハ給付ノ請求ニ付テハ支拂ニ換ヘ轉付スル命令ヲ爲スコトヲ得ス
 第六百十八條 左ニ掲クル債權ハ之ヲ差押スルコトヲ得ス
 第一 法律上ノ養料
 第二 債務者ガ職捐建設所ヨリ又ハ第三者ノ慈善ニ因リ受クル繼續ノ收入但債務者及ヒ其家族
 ノ生活ノ爲メ必要ナルモノニ限ル

第三 下士、兵卒ノ給料並ニ恩給及ヒ其遺族ノ扶助料
 第四 出陣ノ軍隊又ハ役務ニ服シタル軍艦ノ乗組員ニ屬スル軍人、軍屬ノ職務上ノ收入
 第五 文武ノ官吏、神職、僧侶及ヒ公立私立ノ教育場教師ノ職務上ノ收入、恩給及ヒ遺族ノ扶助
 料

第六 職工、勞役者又ハ雇人カ其勞力又ハ役務ノ爲ニ受クル報酬
 第一號第五號第六號ノ場合ニ於テ職務上ノ收入、恩給其他ノ收入カ一个年間ニ三百圓ヲ超過ス
 ルトキハ其超過額ノ半額ヲ差押フルコトヲ得
 第六百十九條 數名ノ差押債權者ノ爲メ同時ニ爲スコキ債權ノ差押ニ付テハ前數條ノ規定ヲ準用
 ス

第六百二十條 執行力アル正本ヲ有スル債權者及ヒ民法ニ從ヒ配當ノ要求ヲ爲シ得ヘキ債權者ハ
 差押債權者カ取立ヲ爲シ其旨ヲ執行裁判所ニ届出ツルマテ又ハ執達吏カ實得金ヲ領收スルマテ
 配當ヲ要求スルコトヲ得但執行力アル正本ニ因ラスシテ配當ヲ要求スル債權者ニ付テハ第五百
 九十條及ヒ第五百九十一條第二項第三項ノ規定ヲ適用ス
 支拂ニ換ヘテノ轉付ノ命令アリタル後ハ配當ノ要求ヲ爲スコトヲ得ス
 右配當要求ハ職權ヲ以テ之ヲ第三債務者、債務者及ヒ差押債權者ニ送達シ又既ニ爲シタル差押
 カ取消ト爲リタルトキハ執行力アル正本ニ因リ要求シタル債權者ノ爲メ要求ノ順序ニ因リ差押
 ノ效力ヲ生ス
 第六百二十一條 金錢ノ債權ニ付キ配當要求ノ送達ヲ受ケタル第三債務者ハ債務額ヲ供託スル權
 利アリ